BIOHAZARD®
REVIVAL SELECTION
HDリマスター版

biohazard 4
Leon Scott Kennedy

BIOHAZARD CODE:Veronica 完全版
Chris Redfield

contents

BIOHAZARD -CODE:Veronica- 完全版

Story Track

BIOHAZARD -CODE:Veronica-完全版 003

Interrelation（相関図） 037

Character Track

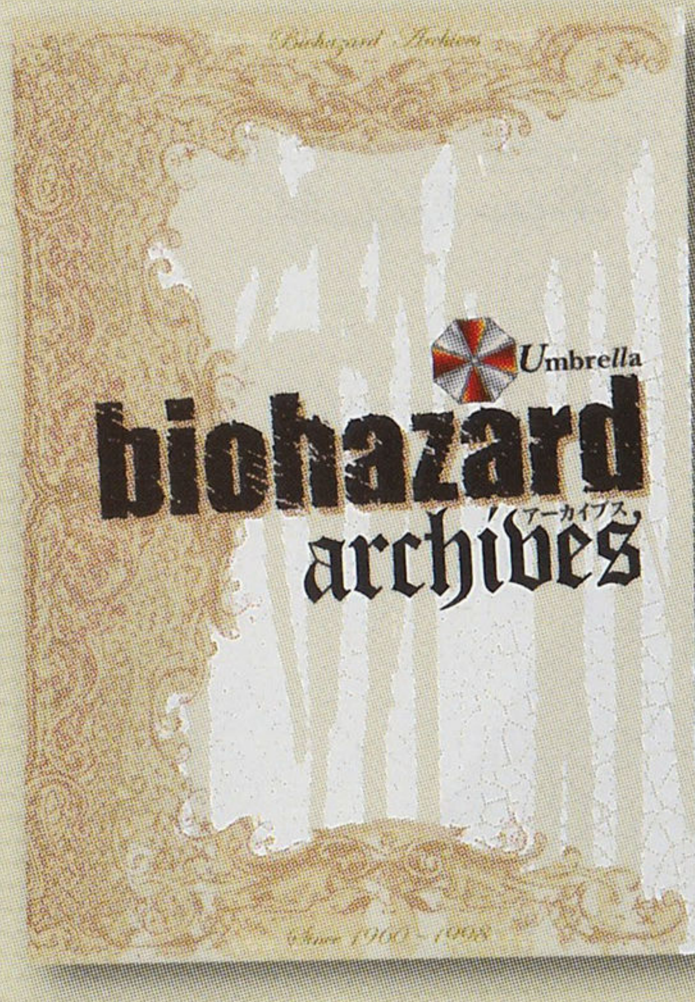
クリス・レッドフィールド 041

アルバート・ウェスカー 045

クレア・レッドフィールド 048

アシュフォード兄妹 051

スティーブ・バーンサイド 053



2010年2月18日発行の『biohazard archives 復刻改訂版』より編纂

biohazard 4

Story Track

biohazard 4 059

Interrelation（相関図） 081

Character Track

レオン・S・ケネディ 085

エイダ・ウォン 087

アシュリー・グラハム 089

ジャック・クラウザー 091

ルイス・セラ 093

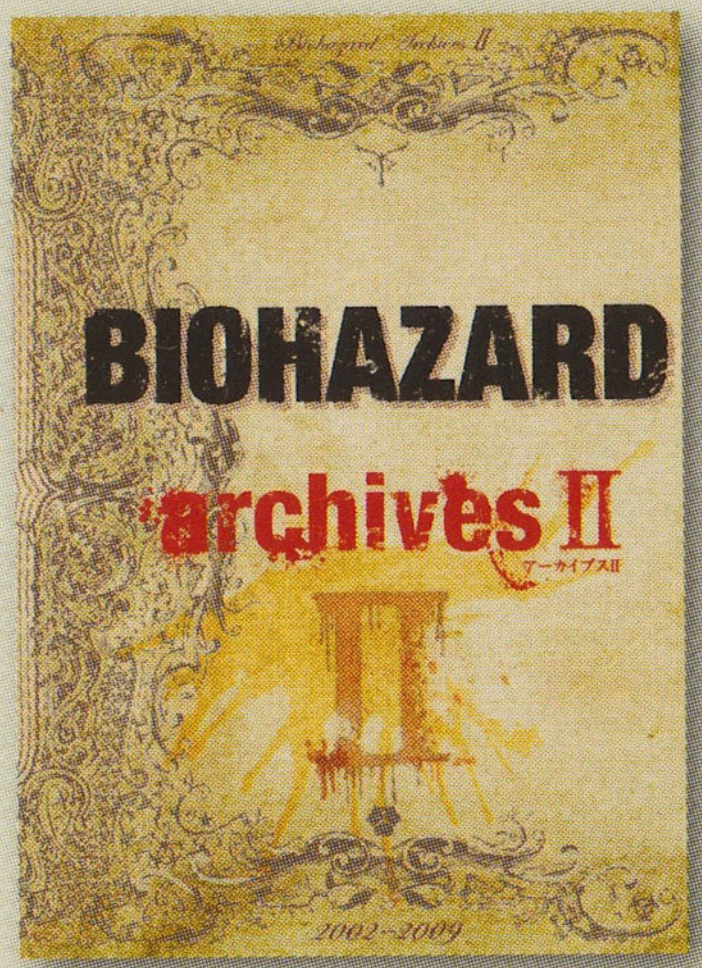
ビトレス・メンデス 094

ラモン・サラザール 095

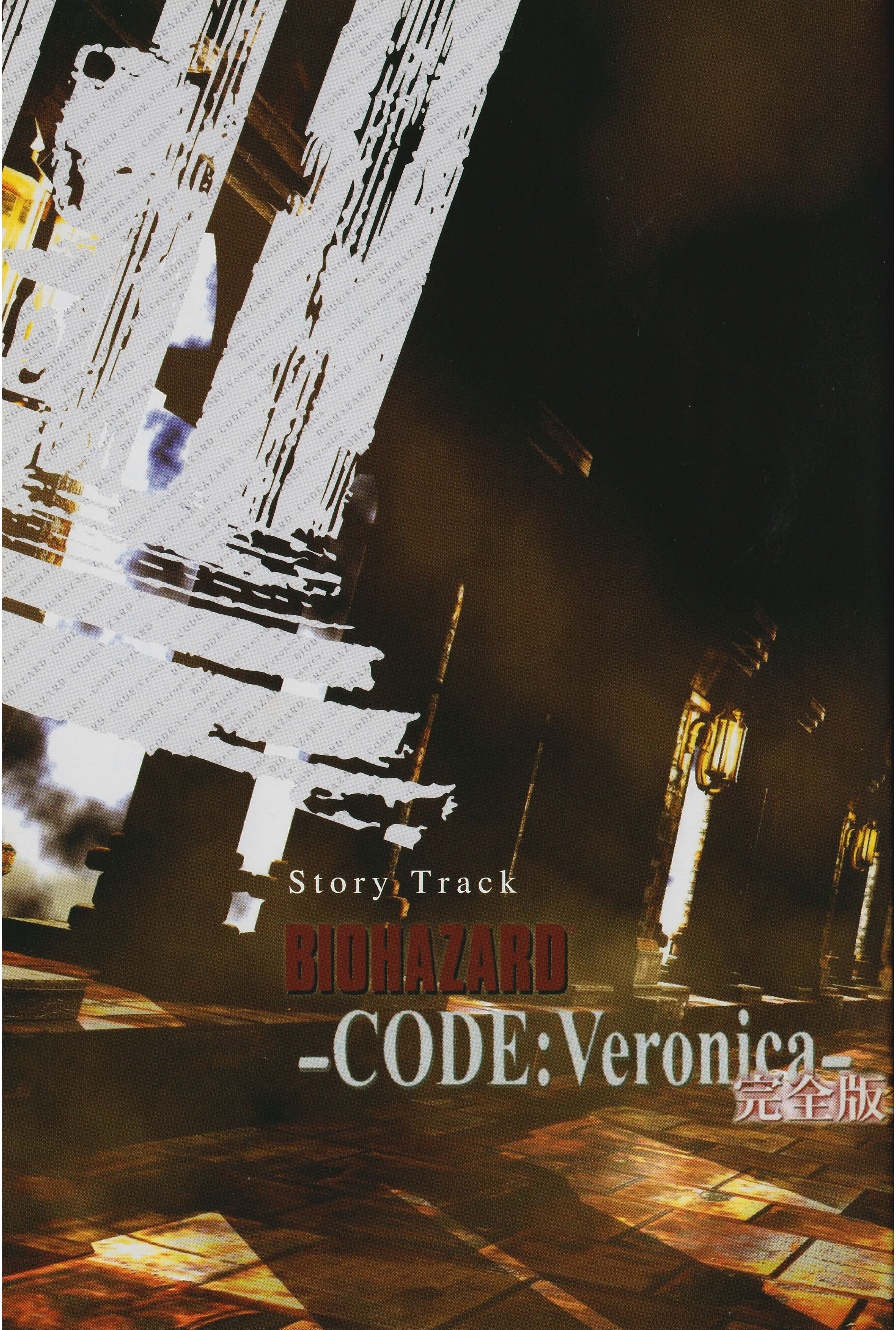
オズムンド・サドラー 096

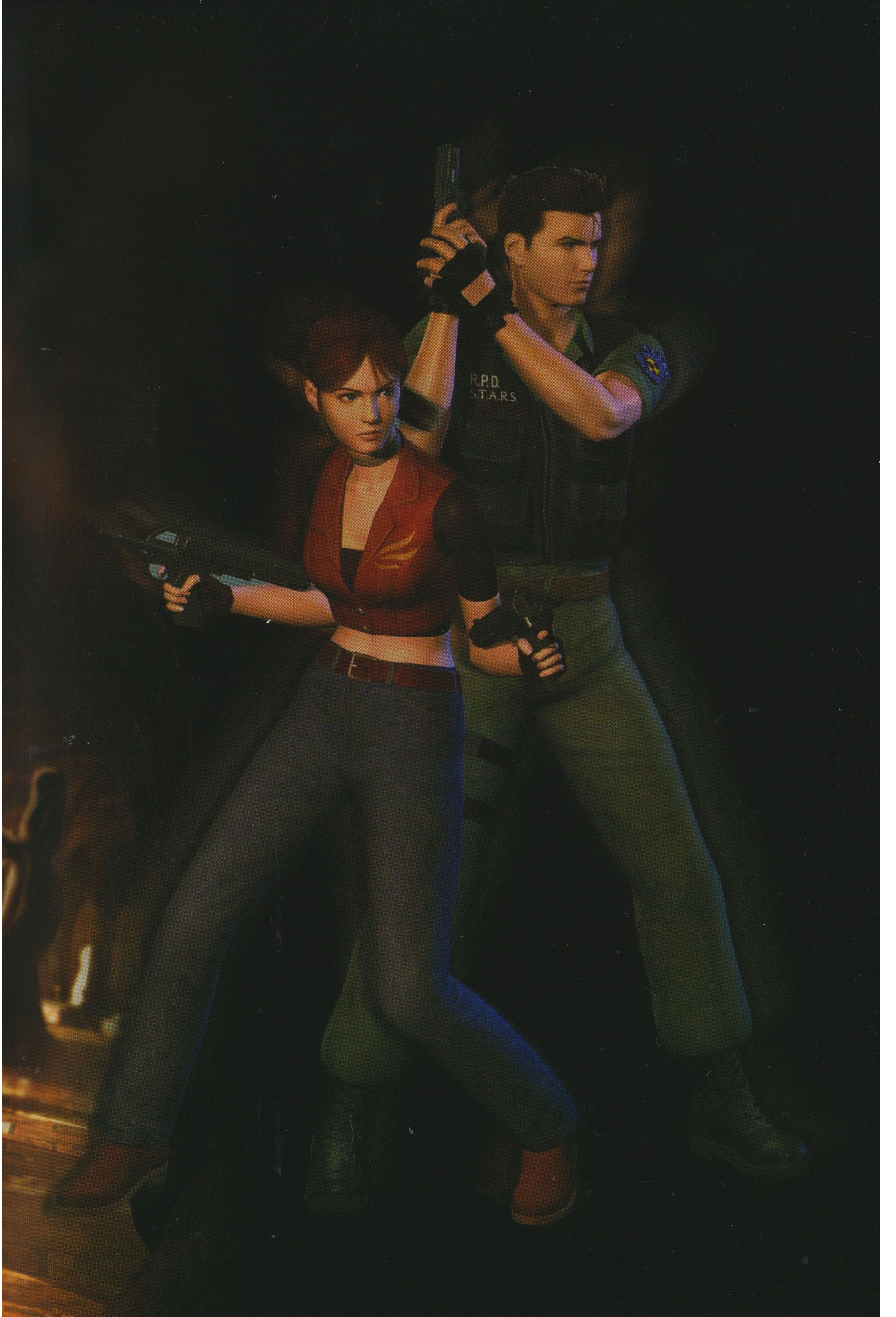
武器商人/イングリッド・ハニガン 097

マイク/ハンク 098



2010年9月21日発行の『BIOHAZARD archives Ⅱ』より編纂


Story Track
BIOHAZARD®
-CODE:Veronica-
完全版


R.P.D.
S.T.A.R.S.

Story

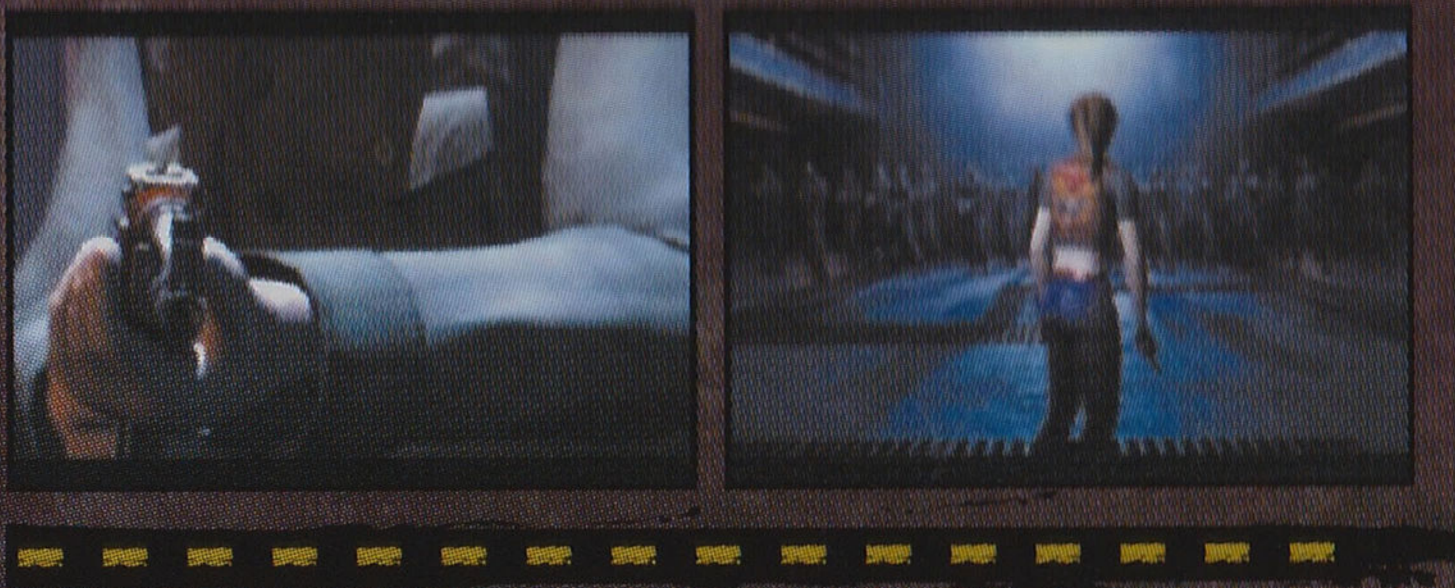
ストーリー

Text by Kyoichi Hat

逃走

必ず逃げ切れる。すぐうしろに追っ手が迫っているも、クレア・レッドフィールドの頭の中は冷静だった。疾走するクレアの背後で、銃声とともに窓ガラスが砕け続ける。その時、彼女は間一髪のところで偶然発見した広間へとその身を投げ入れた。

銃声の届かぬその場所で、鈍い痛みを感じながらゆっくりと立ち上がるクレア。だが彼女の前には、1個小隊はあろうかという警備隊が、銃口を向けて待ちかまえていた。クレアはゆっくりと両手を上げながら、右手から銃を落とす。その刹那、"火気厳禁"の文字が彼女の目に飛び込んだ。銃が床に落ちる寸前に身を翻して再びそれを手にすると、爆発物に向かって発砲した。強烈な爆発と爆風で、眼前で睨みを利かせていた警備隊は一瞬で吹き飛んだ。



床に伏せていた彼女の頭上に、一歩一歩足音が近く。途切れることのない集中力の中、彼女は再び銃かまえようとした。しかし相手の銃口は、すでに彼の額に突き付けられていた。

脱出

クレアはパリにあるアンブレラの研究所で捕らえられ、二度と出所することはないといわれるロックフォート刑務所に移送された。彼女の前には堅牢な鉄格子がはだかり、たったひとつはかなく薄らと灯る電球に自分の運命を少しだけ重ね合わせた。その時、クレアは闇の中で人の気配を感じる。ライターで足音のする方角を照らすと、そこには、自分を拘束した男が立っていた。彼の名はロドリゴ・ファン・ラバル。ヨーロッパからロックフォート島への囚人護送をになう第3警備部隊の隊長だ。クレアがじっとロドリゴの動きを見詰めていると、彼はぶっきらぼうに牢の鍵を開け、外に出るよう促した。
「ここはもうおしまいだ。どこの組織の特殊部隊か知らんが、得体の知れない連中に襲われ刑務所は全滅した」
クレアは先程の地響きと彼の腹部の怪我から、ただならぬことが起きていると悟った。彼の容態を気遣いつつも、クレアは闇の中へと駆け出した――。

生存者

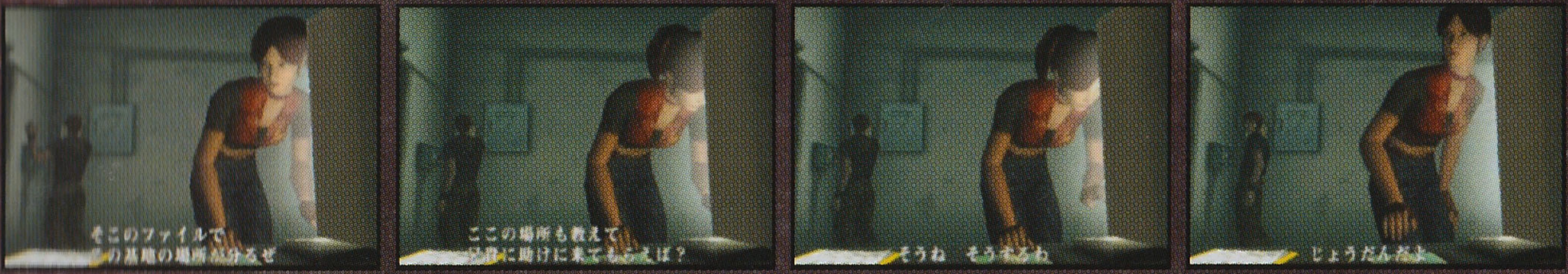
外では重く冷たい雨がクレアを待っていた。立ち込める霧、黒くぬかるんだ土、鼻を突く異臭。早くこの島から脱出しなければ……。しかし、彼女の目に信じられない光景が飛び込んできた。目の前の墓地から、突如無数のゾンビが出現したのだ。

3カ月前にゾンビと遭遇したが、なぜここにも!? なんとか落ち着きを取り戻し、その場から逃げ出した。だが、今度は閃光とともに機関砲がクレアに向かって火を噴く。落ちていたハンドガンで応戦すると、発砲者が慌てて姿を現した。背格好から、クレアと同じくらいの年令だろうか。青年の名はスティーブ・バーンサイド。彼もこの島に囚人として捕らえられていたようだ。彼の話によると空港が存在するらしい。脱出路はそこだ。しかし、スティーブは我先にと空港をめざし、暗闇に消えていった。

Story Track

連感

手がかりはないか。刑務所内を探索するクレアは再びスティーブと出会った。彼が映し出していたパソコンの画面、クレアの兄クリス・レッドフィールドがアンブレラに監視されていることを物語っていた。クレアはこの事実と、助けを求めるメールを仲間のレオン・S・ケネディに発信した。レオンに伝われば、いずれクリスが助けに来てくれる。だが、クリスの助けを期待するクレアに、スティーブは冷たかった。
「身内なんかアテにしたってバカ見るだけだぜ！」
そう吐き捨てると、彼は再びクレアの前から姿を消した。
スティーブの言動に疑問を感じながらも、クレアはレオンと連絡ができたことに心強さを感じていた。



出会いは銃声とともにやってきた。クレアはとっさに身を隠し、相手の姿を確認した。すると、男がいきなり叫んだ。
「私はアルフレッド・アシュフォード。この基地の司令官である。我がアシュフォード家は世界でも有数の名門貴族である。そして、私の祖父はアンブレラ創立メンバーのひとりなのだ」
クレアは驚きを隠せなかった。彼はさらに続ける。
「なぜ基地を攻撃したのだ？　t-ウィルスをばらまきおって。おかげで、そこら中ゾンビや化け物だらけではないか！」
あたりを徘徊しているゾンビは、アンブレラのウィルス漏洩で感染したものではないのか？　では、いったい誰が……。

「いいだろう。好きにするがいい。どうせ貴様はカゴの鳥だ。しばらくは楽しませてもらうとしよう」
　そう言い残すと、アルフレッドは奥へと消えていった。
　彼女の脳裏に3カ月前の出来事が蘇る。t-ウィルス――。ラクーンシティを壊へと導いたアンブレラが開発したゾンビの種――。クレアの思いは巡った。

過去

この島は毒されている。ウィルスに冒されたゾンビ、生体実験の末にでき上がった化け物たち。それらは本能のままに動き、人間に襲い掛かる。そして今もまた、クレアの前に化け物が現れ、彼女は死と隣り合わせになっていた。そう、彼が来なければ……。

クレアが顔を上げると、スティーブが化け物の死骸を見下ろしていた。クレアは自分のマシンガンとスティーブのゴールドルガーを交換した。マシンガンを手にしたスティーブは、無邪気な子供のように喜び、ゾンビ狩りへと勇んだ。
「やっぱ、人間なんかよりこいつのほうが頼りになるぜ」
クレアは戸惑いを隠せなかった。彼女は初めて尋ねた。家族について。そして、なぜ連れて来られたのかを。すると、スティーブは苛立ち、闇に向かってマシンガンを乱射した。彼の過去に何があったのだろう。寂し気な彼のうしろ姿にクレアは続いた。

危険はいたるところに潜んでいる。足元の床が突然抜け落ち、2人は階下に落下した。どちらも命に別状はなかったものの、クレアは瓦礫に足を挟まれる。身動きが取れない彼女を助けに向かうスティーブ。すると、彼の背後にゆらゆらとゾンビが忍び寄って来た。

「スティーブ、後ろッ！」
　クレアの声で、すぐさま振り向く。だが、一向に銃声は響かない。どうしてなんだ！　彼は硬直している。
「どうしたのスティーブ!?　早く撃つのよ！」
　すると、クレアに気付いたゾンビは、攻撃対象を身動きできない彼女に切り替えた。しかしいまだ銃声は聞こえない。スティーブには撃てなかった。なぜなら、彼の目に映っているのはただのゾンビではなかったからだ。いや、死んだのような目をして血肉を求める様相は、ゾンビには違いない。ただひとつ、スティーブの“父親”だということを除いては……。
　その時、スティーブの耳にクレアの悲鳴が飛び込んできた。スティーブは我に返り、マシンガンの弾が尽きるまでゾンビに向かって発射し続けた。その場にがっくりと膝を落としたスティーブは、泣きながら「親父」と繰り返した……

「親父はアンブレラの社員だったんだ」
　しばらくして、スティーブはクレアに語り始めた。父親がアンブレラの報を密売しようとしたこと、それが理由で母親が殺されたこと、そして自は父親と一緒にこの島に囚人として連れて来られたことを――。今までの動の裏にあるものを理解したクレアは、彼の肩にそっと手を置いた。そのかさは、スティーブにはまるで母親のように感じられた……。

亡霊

ひとりで探索を開始したクレアの目前に、古びた洋館が稲光で照らし出された。その洋館でアルフレッドとその妹らしき人物との会話を耳にする。妹の名は、アレクシア・アシュフォード？　2人はアシュフォード家再興と邪魔者の始末について話している。早くこの孤島から脱出しなければ。クレアは焦る気持ちを抑えられずにいた。

途中、止血剤を入手したクレアは、ある男を思い出した。ロドリゴのことである。彼の元へと向かい、ロドリゴに会った彼女は、止血剤と牢を開けてくれたお礼に自分のライターを渡す。そして、再びクレアは走り出した。亡霊が背後に迫っているのも知らずに……。

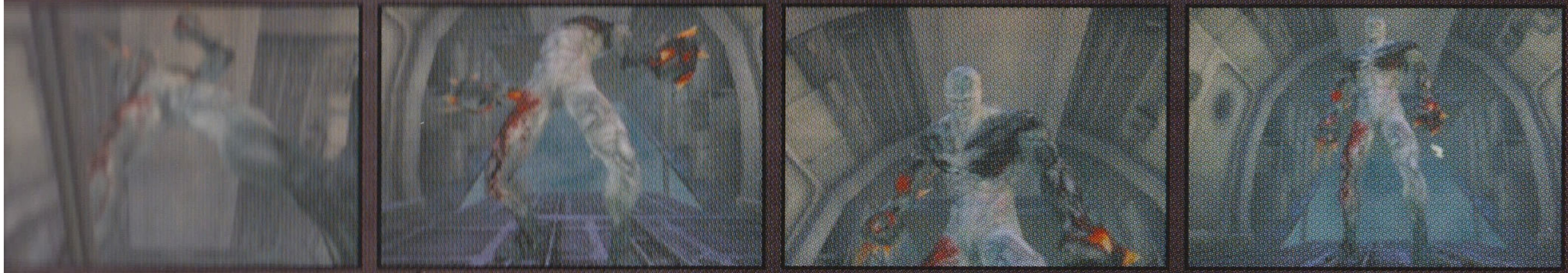
ただならぬ殺気をクレアが背後に感じたのは、洋館の入口に差しかかった時だった。とっさに振り向く。
「誰なの？」
「お前の兄クリスに殺され、復讐のために地獄から蘇った亡霊だ」
クレアは信じられなかった。なぜなら、目の前に立っているのは、あの忌まわしき洋館事件で死んだはずのアルバート・ウェスカーだったからだ。彼はクリスに対する憎しみからクレアを叩きのめし、踏みにじった。激しい痛みが彼女に走る。その時、ウェスカーに無線が入り、彼は超人的な動きをしながら闇の中へ消えて行った。クレアの頭に兄の顔が浮かぶ。この事実をクリスに知らせなくては……。言い知れぬ不安がクレアを襲った。

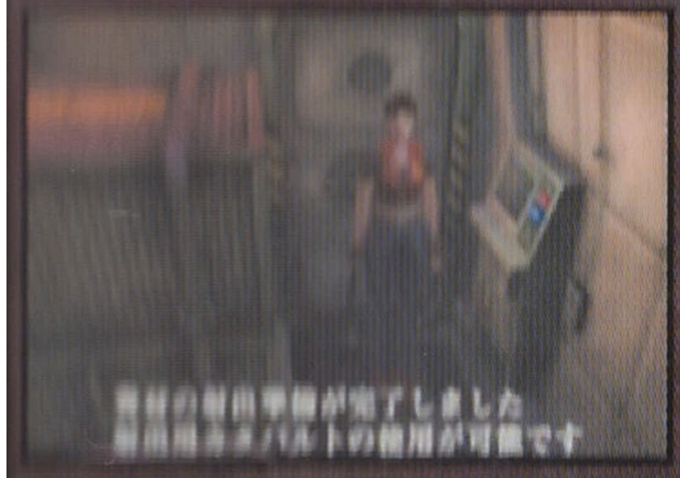
離陸

再び洋館に侵入したクレアは不意を突かれた。
「私はアレクシア・アシュフォード」
そう名乗った美しい金髪と清楚なドレスが似合う女性は、クレアに銃口を向けて待ちかまえていた。いくつもの危機を乗り越えて来たが、今度こそ最期だと感じた。クレアは武器を持っていなかったのだ。しかし、その時再び颯爽とスティーブが現れた。彼の銃弾を受けたアレクシアは、隣の部屋へと逃げ込んだ。後を追うクレアとスティーブ。だが、そこにアレクシアの姿はなかった。直後、背後から何者かが2人に襲い掛かった。アレクシア、いや、それはアルフレッドだった。彼は女の化粧をして、アレクシアになり切っていたのだ。スティーブに倒され、ガラスに映った自分の顔を見たアルフレッドは、絶叫しながら部屋を出て行った。2人は理解した。すべてはアルフレッドの二重人格が引き起こした茶番だったということを……。

う、たくさんだ。こんな所早く出て
うぜ」
スティーブがそう言った瞬間、避難勧
のアナウンスがあたりに響いた。自動
爆装置だ！　2人は空港へ急ぎ、輸送
離陸した。しかし、彼らにまだ安息
られなかった。カーゴルームで異常発
の警告音。スティーブに操縦を任せ、
レアはすぐに確認に向かった。すると、
こにはラクーンシティで遭遇したタイ
ントの姿が——。クレアはありったけ
弾弾を浴びせた。そして、弱った姿を
認すると、積んであったコンテナもろ
も空に向かって放出したのだった。

やった！
とうとう脱出したぜ！
これで自由になれたのね
クレア…悪かったな
俺 お調子もんだから
色々迷惑かけてさ
何言ってるの
兄さんに会えるといいよな
俺は…一人ぼっちに
なっちまったけど
スティーブ…
ところで これからどこへ行く？
クレアの行きたい所
どこへでも行くぜ
今ごろだと
ハワイがシーズンね
決まりだ！
な 何だ！？
カーゴルームの
ハッチが開いている！
調べて来るわ
頼む カーゴルームの
ドアロックは外した





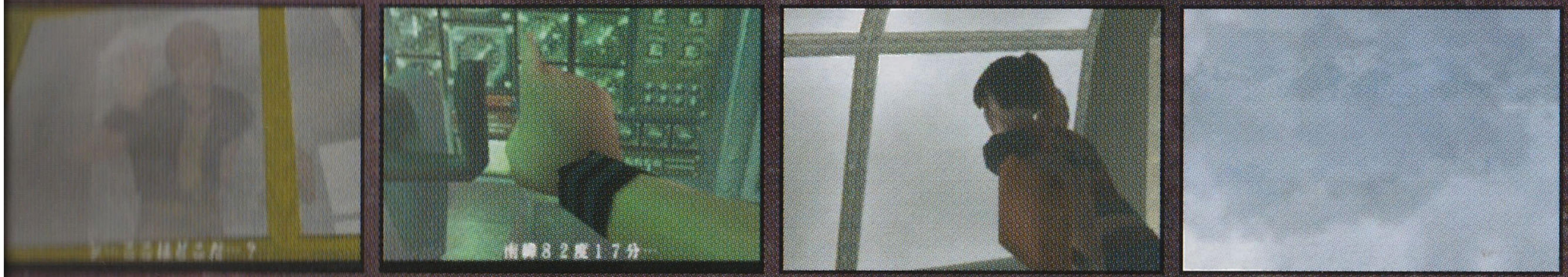
2人は遂に自由を得た。だが、輸送機が突然自動操縦に切り替わり、機体はあらぬ方向へと飛行を始める。もうなす術がない。2人は、運命に身を任せるしかなかった……。

静寂に包まれた機内。クレアは、いつの間にかスティーブに寄り掛かって眠っていた。どのくらいこうしているのだろう……彼は動けずにいた。この時スティーブは、心の奥底にしまったはずの感情が蘇るのを感じていた。ずっとこのままならいいのに……。クレアの優しい寝顔に吸い寄せられるように近付いていく……。しかし、クレアの目覚めと同時に彼の束の間の幸せは遮られた。

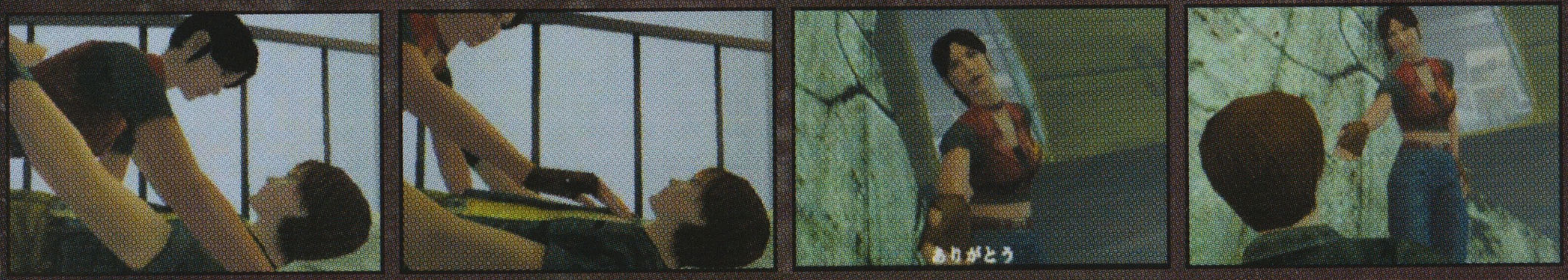
スティーブは照れ臭そうに立ち上がり、何気なく窓の外を見た。そして、コクピットの経度に目を移した。

「南緯82度17分…、ここは…南極だ！」

2人の眼下には、氷の大地に並び立つ建物とアンブレラの飛行艇があった。ここもアンブレラの施設……。それが確認できた途端、輸送機は自動的に高度を下げ始め、強い衝撃とともに不時着した。一瞬の出来事に鼓動の高鳴りを感じながら、お互いの無事を確認し合う。そして、残骸と化した機体から身を出すと、2人は二手に分かれて未知なる施設の探索を開始したのだった。



起きて スティーブ！
た、助かったのか？ 俺達


ありがとう

こりゃ…もう使えねぇな…
このでかい冷凍庫の出口を
別れて探そうぜ
そうね

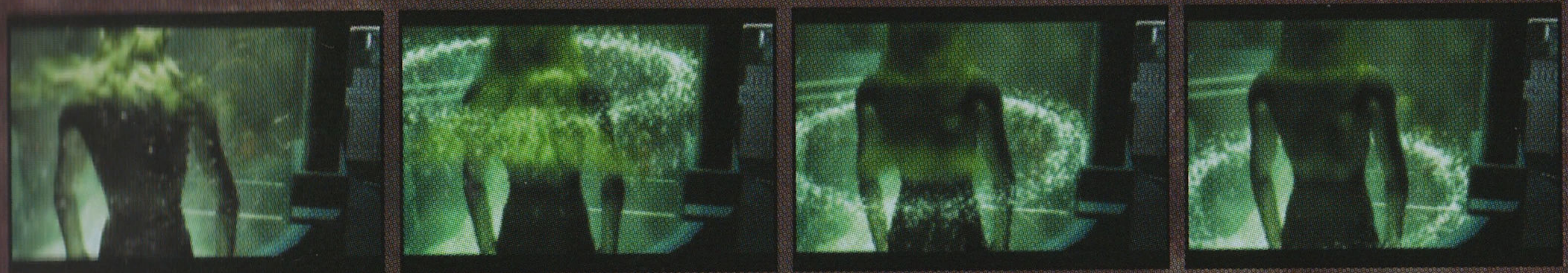
10キロ先に観測基地があると、落ち合ったクレアにスティーブは伝えた。そこに出るには、目の前に立ち塞がる壁を突破しなければならなかった。クレアは壁を破壊すべく、掘削機に乗り込んだ。そんな彼女を生きて帰すまいと、スナイパーライフルを携えた怪しい人影が忍び寄る。それは、ロックフォード島から脱出したアルフレッドだった。しかし、クレアはまたも"優秀なナイト"によって救われる。スティーブの胸にクレアの言葉が蘇る――「帰るときは一緒よ！」――。スティーブが放った銃弾を受けて、アルフレッドは呆気なく地下へと転落していった。

改めて掘削機に乗り込んだクレアとスティーブは、ようやく外の世界へと出ることができた。だが行く手を、またも"異形"が阻む。心臓を剥き出しに鎖を付けた、囚人のようなモンスター。アルフレッドとアレクシアの父アレクサンダー・アシュフォードのなれの果てだ。一瞬で叩きのめされたスティーブに代わって、クレアは慎重にモンスターを仕留めた。息子愛用のスナイパーライフルで……。

クレアは希望の兆しに思わずはしゃいだ。2人は1台の雪上車を発見したのだ。これで観測基地まで行けば助かる。今度こそ……。クレアとスティーブは雪上車に乗り込むと、南極の大地を走り出した。しかし、悪夢は終わっていなかった。雪上車を突然、巨大な触手が襲って来たのだ！　触手は車体を巻き付けると、軽々と空中に放り投げた。落下した雪上車は、その衝撃で激しい爆発音とともに炎上した。触手の正体を確認できないほど、それは一瞬の出来事だった。

その様子を、彼女は静かに見守っていた。こと切れた兄アルフレッドを優しく撫でながら……。

15年の長い眠りから今、アレクシアは目覚めた――。



Story Track

兄妹

同時刻、ロックフォート島に向かうひとりの屈強な男の姿があった。元S.T.A.R.S.の隊員でクレアの兄、クリスである。妹の連絡をレオンから受け取り、単身この孤島に乗り込んで来たのだ。彼にとって、ただひとりの肉親を救うために……。

恩人

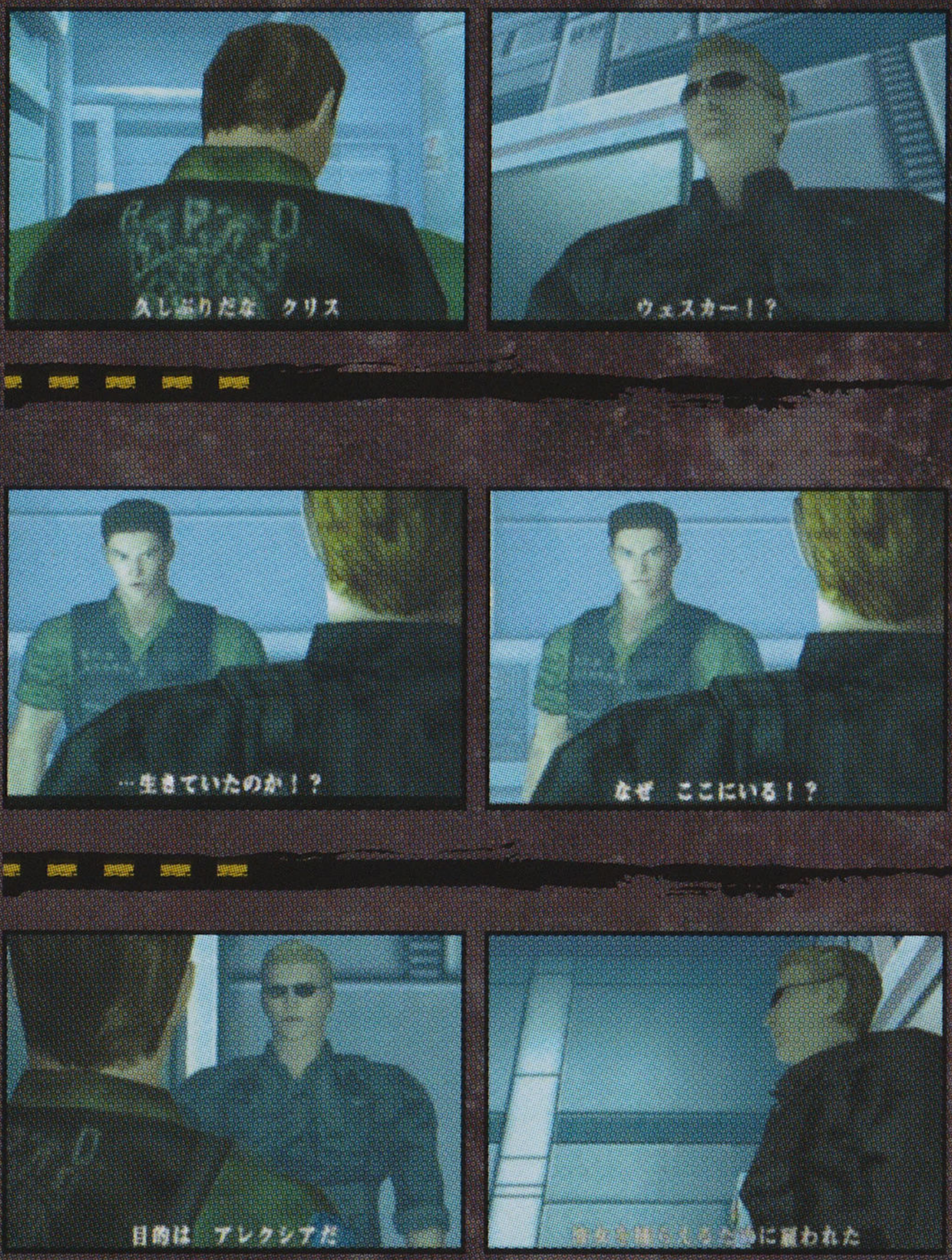
島に足を踏み入れたクリスは、クレアの恩人ロドリゴと出会う。クリスは妹の所在を尋ねた。

「飛行機が何機か飛んで行くのが見えた。多分、そいつに乗ってこの島から脱出したんだろう」

ロドリゴに礼を言って立ち去ろうとしたその時、地中から突然巨大なミミズが現れ、一瞬でロドリゴを呑み込んでしまった。巨大ミミズに戦いを挑むクリス。激しい銃撃の後、それは断末魔の咆哮をあたりに響かせながらロドリゴを吐き出した。胃酸にやられたのだろうか。彼は衰弱し切っている。死に際にロドリゴは、クレアからもらったライターをクリスに手渡した。そして、彼は静かに息を引き取った……。

クリスの脳裏に洋館事件の悪夢が蘇る。あの巨大ミミズはt-ウィルスによって生まれたものではないのか？　早くここから脱出しなければ……。彼は妹の身を案じた。

因縁



刑務所内を探索するクリスは、不意に自分の名を呼ばれ、その声に一瞬背筋が凍る思いをした。

「ウェスカー!? …生きていたのか!?」

振り返ったクリスの目に映ったのは、死んだはずの男の亡霊だった。かつて仲間を裏切った悪魔の手先、アルバート・ウェスカー──。

「目的はアレクシアだ。彼女を捕らえるために雇われた」

ウェスカーの言葉は、この島の惨状が彼によって作り出されたことを瞬時に理解させた。直後、妹の顔が浮かんだクリスは、とっさに銃をかまえようとする。しかし、それに対しウェスカーは超人的な動きでクリスの体をはね飛ばし、不敵な笑い声とともにクリスを片腕で持ち上げた。

「お前が憎い。お前が俺の計画を打ち壊した…俺は魂を売ったのだ。ここで死ね!!」

コイツは魂を組織に売ってまで何を企んでいるのか。クリスは渾身の力でウェスカーの顔面を殴りつける。しかし、今の彼は人間の力で勝てる相手ではなかった。サングラスの下の鋭い眼光は不気味に赤く輝き、爬虫類のごとく冷たい視線をクリスに向けている。ウェスカーは、冥途の土産にクレアとアレクシアが南極にいることをクリスに伝えた。これまでか……!? クリスがあきらめかけたその時、突然モニターから発せられた女の高らかな笑い声があたりに響き渡った。

「アレクシア！」

ウェスカーはクリスを放り投げると、闇へと消え去った。

クレア……。南極へ向かうべくクリスは立ち上がった。

お前が憎い
やつ裂きにしても足らないほどな
お前が俺の計画を打ち壊した…
だから
俺は新たな組織に魂を売った
最後に教えてやる
ここのデータから　お前の妹は
南極にいることが分った
そして　アレクシアもな
残念だな
妹に会えずに死ぬとはな
アレクシア！

…南極に辿り着いたクリスは、そこに居並ぶ建物がアンブレラの施設だということを突き止める。さらに、彼はさ…を知った。それは、「t-Veronica」という新たなウィルスの存在。t-Veronica ――女王アリのごとき支配力を…ウィルス――それは、世界をもひざまずかせることができる悪魔の発明。アレクシアは自分の父親を実験台にそのウィ…自身に投与していたのだ――。

…襲い来るゾンビを倒しながらクリスは歩を進めた。クリスにさまざまな思いが去来する。t-ウィルスに冒された…ウェスカー、アレクシアという謎の女。そして今、足を踏み入れたこの場所にクリスは唖然とした。酷似してい…忘れもしない洋館事件の舞台に。クリスの胸に死んでいった仲間たちが浮かぶ……。待っていろ、クレア！

クレアは、クリスの前に突然現れた。粘り気のある繭に閉じ込められて……。クリスはコンバットナイフでそれをかっ切…倒れ込んで来たクレアを優しく抱きかかえた。意識を取り戻したクレアが、すかさず兄の胸に飛び込む。深い絆で結…兄妹は、生きてここに再会を果たしたのである。

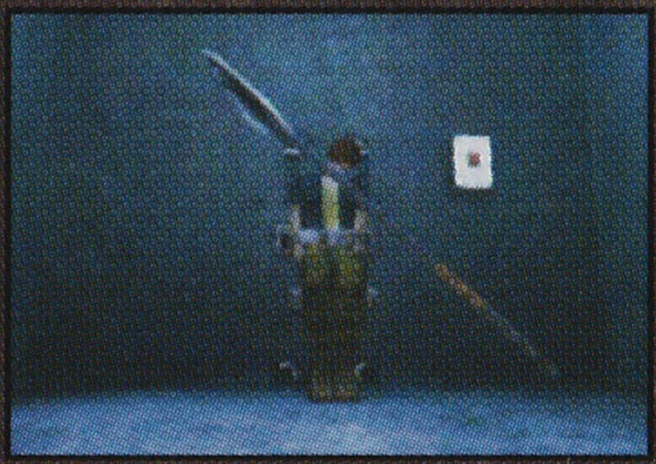
「…ここから脱出しよう」

「…まだスティーブがいるわ」

…その時であった。2人の頭上から、仲睦まじい兄妹愛をあざ笑うかのごとく高らかに笑い声を響かせながら、アレクシア…現れた。ヤツはスティーブの居場所を知っているに違いない！　即座にクリスとクレアはアレクシアの後を追った。階段…駆け上がる2人に触手が襲い掛かる。階下へ落下した衝撃で、膝を負傷するクリス。その刹那、スティーブの叫び声が2…耳に飛び込んで来る。クリスを気遣う妹に彼は叫んだ。

「…スティーブを助けるんだ！　行け!!」

クレアはスティーブのもとへと駆け出した。



「スティーブなの？」

…クレアが発見した彼は、冷たい牢獄の壁際で、巨大な斧に押さえ付けられ…た。斧の刃は壁に食い込み、クレアの腕力ではびくともしない。なんと…も助けようと頑張るクレアに、スティーブは力なく言った。

「…あの女が俺に…、自分の父親にしたのと…同じ実験を…してやるって…」

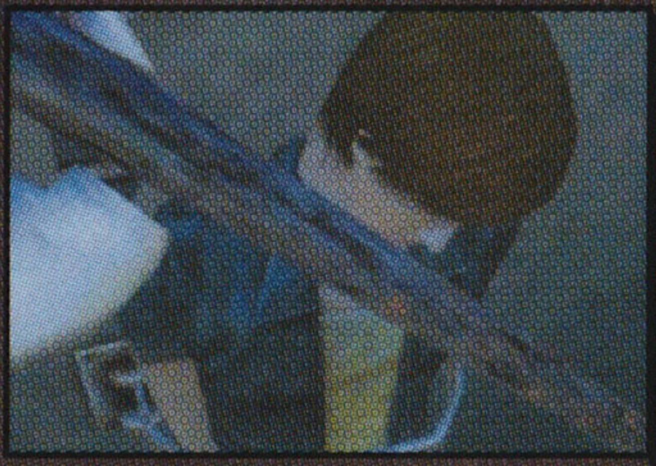
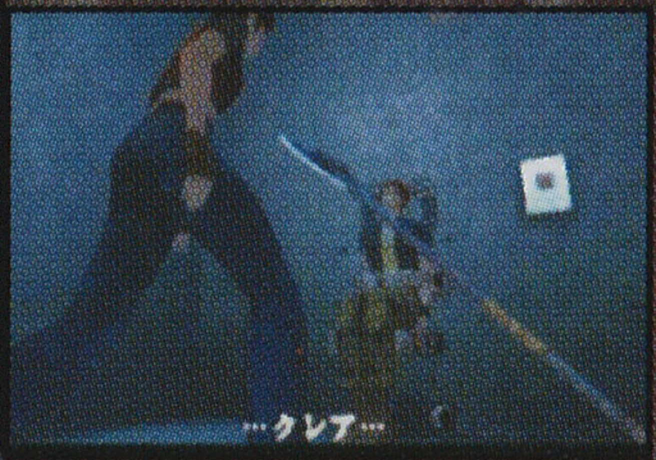
…言い終わらないうちにスティーブは苦しみ出した。

「…クレア…助けてくれ……」

…の直後、スティーブは自身の体内から異形の物に体を蝕まれ、凶暴なモ…スターへと変貌を遂げた。クレアはウィルスを植え付けられた人間が、ど…なるのかを何人も見てきた。

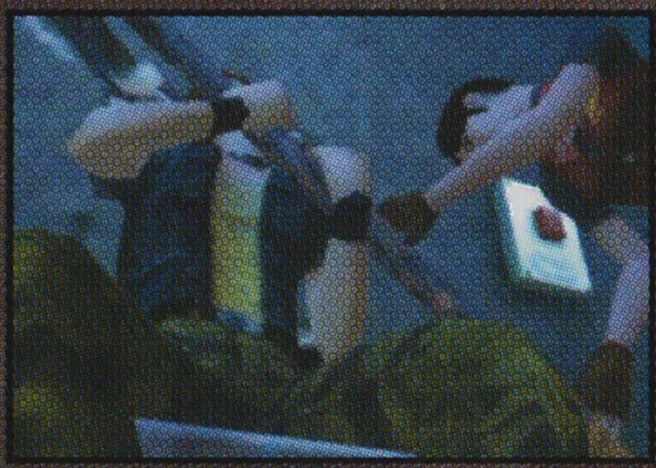
「…そんな！」

…理性を失ったスティーブは、自分を押さえ付けていた斧を引き抜くと、血…を求めて暴れ出した。それを見て、逃げることしかできないクレア。閉ま…りかけていた鉄格子の向こう側に逃げ延びた彼女は、すべてを呪った。自分…の力さ、アンブレラ、そしてアレクシア……。今もスティーブが自分を殺…そうと、斧で鉄格子を叩き壊そうとしている。その音はクレアの心に虚しく…響いた。その時、分厚いコンクリートを突き破って巨大な触手が出現した。…触手がクレアの体を締め上げていく。斧を振り回す怪物に人の心など宿って…いるのだろうか。だが、クレアの悲壮な姿を目にした怪物がつぶやいた。

「…クレア」

…スティーブがクレアへ振り上げたその斧は、彼女を締め上げる触手へと振…り下ろされた。すると、触手は鞭のような一撃をスティーブに与え、その場…から一瞬にして消え去った。倒れたスティーブの体から、怪物の面影が徐々…に薄れていく。しかし、それは同時に彼の死をも意味していた。クレアはそ…っとスティーブの頬に手を当てた。



「…あったかい」

「スティーブ……、しっかりして」

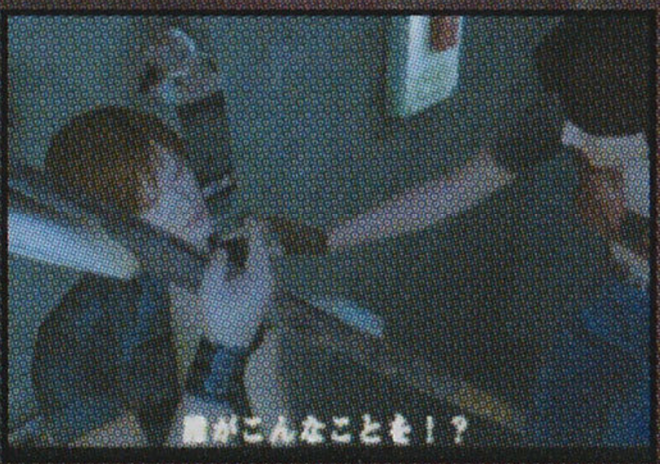
クレアはスティーブの手をしっかりと握った。

「俺は……、君が好きだったよ…、クレア…」

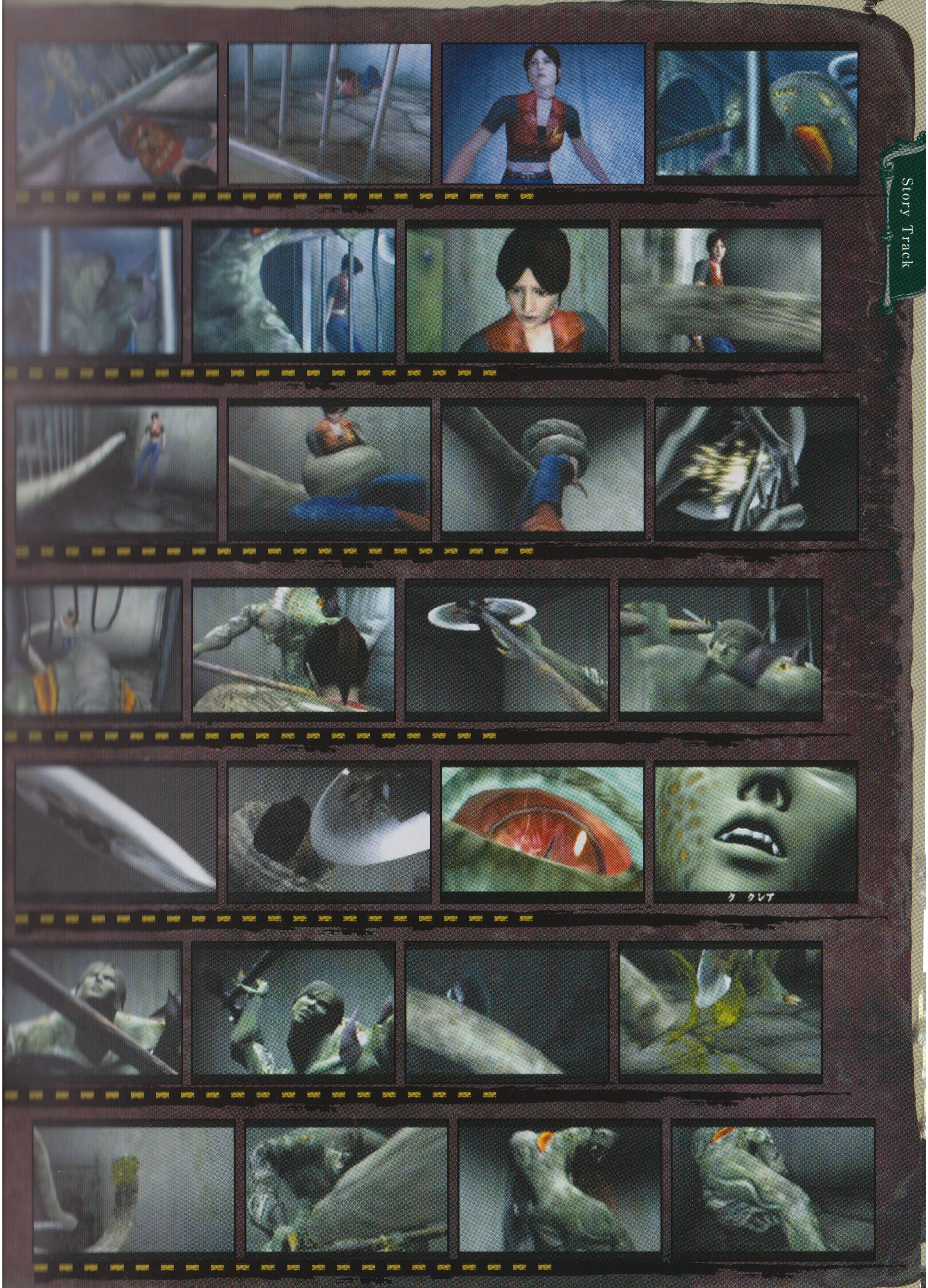
スティーブの体からゆっくりと力が抜けていく。

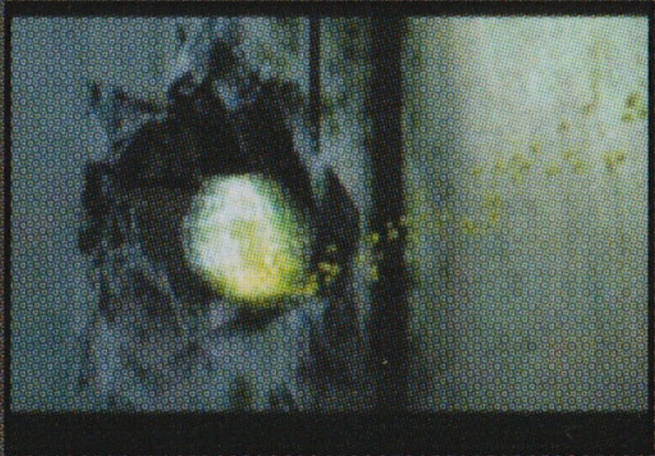
「スティーブッ!!」

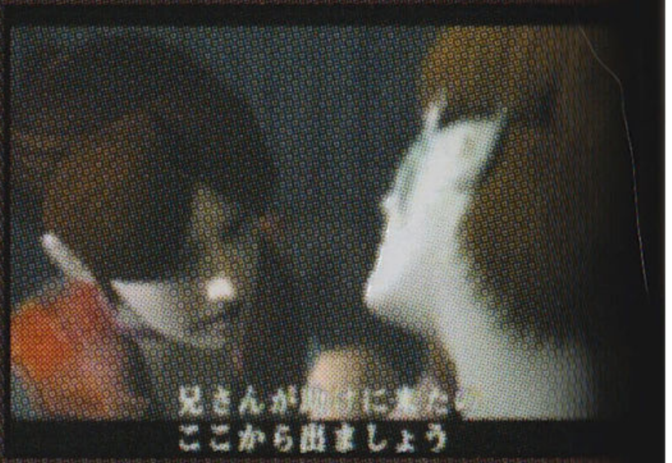
…そして、彼は動かなくなった。傍らでクレアはナイトの死を嘆いた。あな…たは、いつも私を助けてくれた。なのに私は……、私は……。スティーブの…死を信じることができないクレアから、とめどなく涙があふれ出した……。

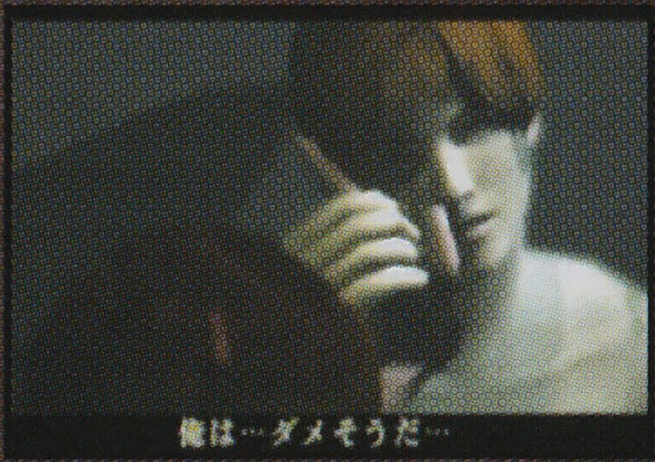


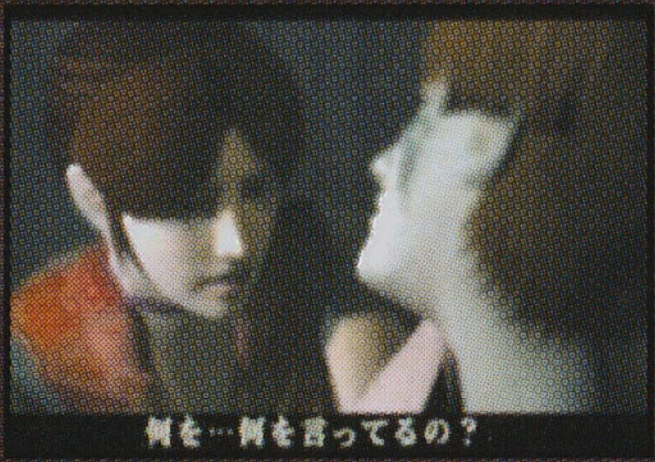
あの女が俺に…
自分の父親にしたのと…
同じ実験を…してやるって…
完全に…イカレてるよ…
どうしたの！？
く 苦しい…
ク クレア…助けてくれ…
た たすけ…て…
ク…クレア…
スティーブ！
そ そんな！

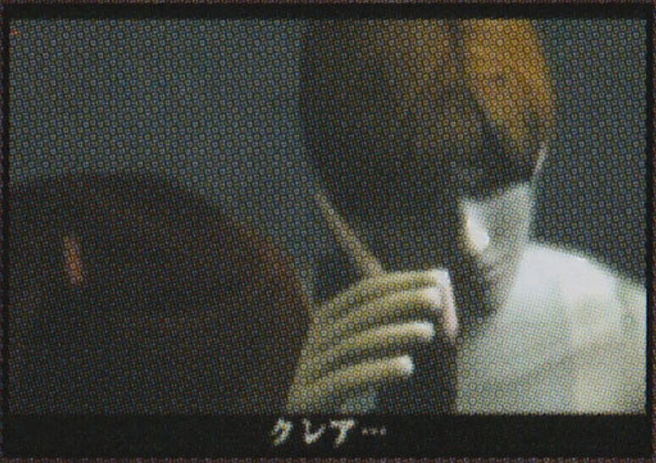

ク クレア











覚醒

「とうとう見つけたぞ、アレクシア」

ウェスカーの声だ。クリスは耳をそばだてた。ウェスカーもまた、この地に降り立っていたのだ。ウェスカーは、アレクシアの体内にしかないt-Veronicaウィルスを我が物にせんとしていた。

「できるものなら、やってごらん」

アレクシアがゆっくりと階段を下りていく。そして彼女は遂に覚醒した。美しい金髪は炎のように立ち昇り、硬い鱗が舐めるように彼女の半身を覆っていく。ウェスカーはしばし、その光景に目を奪われた。アレクシアの血液の飛沫は発火し、あたりを紅蓮の炎に包んでいく――。クリスは思わず飛び出した。

「クリス！」

クリスはとっさに身がまえるもウェスカーの反応は意外だった。

「優秀な部下だった貴様にここは任せるとしよう」

そう言い残すとウェスカーは姿を消した。クリスの目の前をアレクシアの血液が炎となって激しく舞い踊る。行き場を失ったクリスは覚悟を決め、マグナムを乱射した。どれほど時間が経っただろうか。クリスが気付いた時には、アレクシアはその場に倒れ込んでいた。生死を確認する余裕などなかったクリスは、足早にクレアの後を追った。

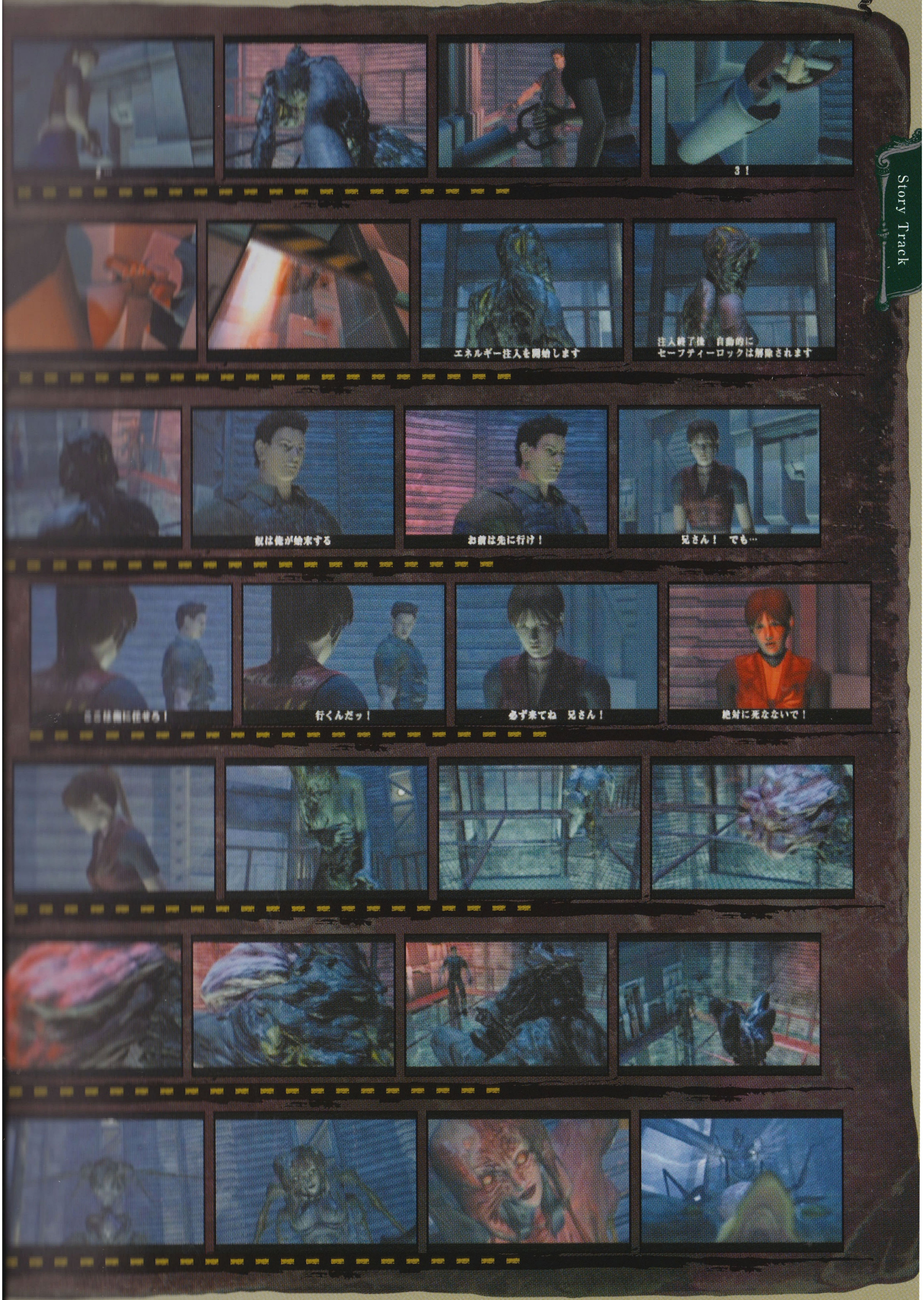
とうとう見つけたぞ アレクシア
一緒に来るんだ
お前は すばらしいウィルス
T-Veronicaを作った
それが欲しいんだ
さァ！
私が欲しいですって

力ずくでも連れて行くぜ！

クリス！
ウェスカー！
優秀な部下だった貴様に

終焉

　妹のすすり泣く声が聞こえたのは、クリスが牢獄に足を踏み入れた時だった。
「クレア？　スティーブも一緒なのか!?」
「……、スティーブ……、スティーブが……」
　クレアの嗚咽は止まらなかった。クリスの胸が痛む。
「いいかい、クレア。ここからすぐに出よう」
　閉じ込められたクレアを救うためには、自爆装置を作動させ、すべての扉の電磁ロックを解除する必要があった。クレアが扉の隙間から差し出したセキュリティーファイルを受け取ると、クリスは急いで制御室へと向かった。
「自爆装置、爆発まで後5分です」
　無機質な警告音声が周囲に響き渡る。すると、クリスの元にクレアが駆け付けてきた。戦闘機へ……だがその時、倒したはずのアレクシアが再び2人の眼前に立ちはだかった。サナギのような彼女の体が、瞬く間に変化し始める。2人はすぐさま傍らにあったリニアランチャーに手をやると、エネルギーの注入を開始した。すると、変化を遂げたアレクシアが起き上がり、2人を睨み付けた。クリスは、クレアを戦闘機へ向かわせると、即座にアレクシアめがけてグレネード弾を撃ち込んだ。もがき苦しむアレクシア。だが、その攻撃も虚しく彼女は成虫へと変化を遂げるのだった。憎悪の詰まった腹を横たえ、左右に6本の足を突き出し、昆虫のような羽を満足気に羽ばたかせ――。アレクシアは今、女王アリとなったのだ！
　クリスはありったけのグレネード弾を発射し続けた。効かないのか……瞬間、女王アリは突如羽を震わせ始め、宙に舞った。真の姿か!?　その時、リニアランチャーのエネルギー注入が完了した。クリスは、それを手にすると即座に女王アリに向けて発射した。高濃度なエネルギーをまともに受けた女王アリは、木っ端微塵となって大量の肉塊をまき散らす――。クリスはすぐさま戦闘機へと向かった。

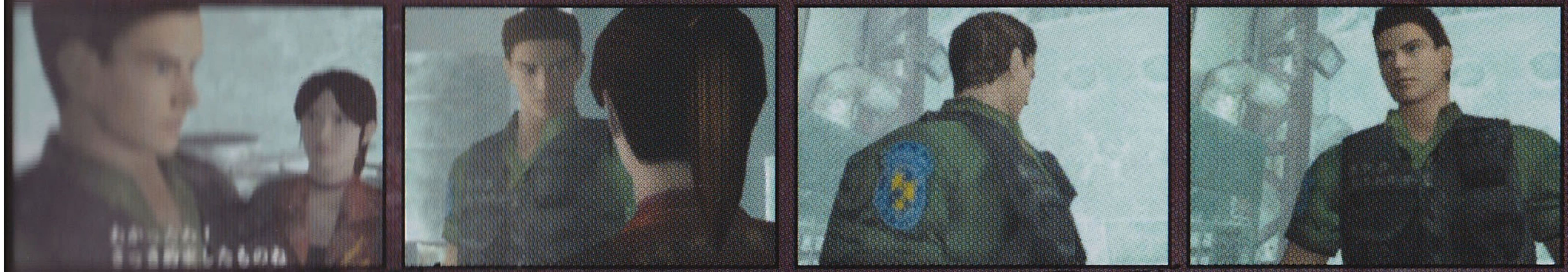

3！
エネルギー注入を開始します
注入終了後　自動的に
セーフティーロックは解除されます
奴は俺が始末する
お前は先に行け！
兄さん！　でも…
行くんだッ！
必ず来てね　兄さん！
絶対に死なないで！

Story Track

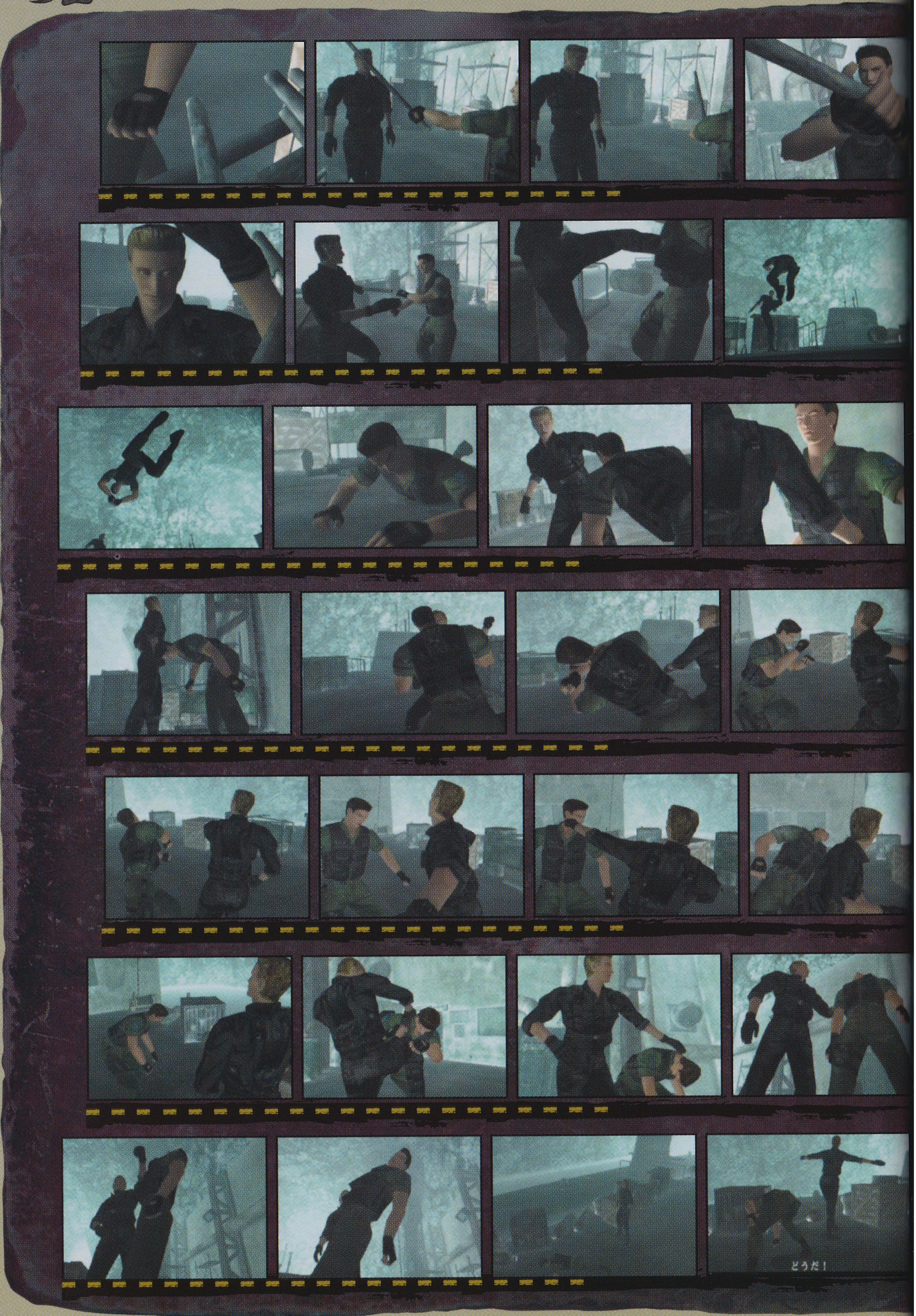
3'39"63

とクレアが消えた今、クリスは一刻も早く脱出するのみだった。クレア
ために。しかし、クリスの前に、クレアを人質に取ったウェスカーが不敵
みを浮かべながら現れた。
わったなクリス！　こうなったら後はお前への復讐を果たすだけだ！」
離せ！　俺がいれば十分だろう」
ェスカーはクレアを突き放した。
クレアはもうお前の手には入らないぜ」
リスの言葉に、ウェスカーは少しも動じる気配を見せなかった。それど
か、2人はさらに恐ろしい彼の企みを知ることとなる。ウェスカーいわ
死んだスティーブの体にはT-アレクシアが移植されているというのだ。
は、T-Veronicaそのものに他ならない。
うとしたらオレのように蘇り、いつかお前の妹と再会できるかも知れ
」
の瞬間、クレアの胸にスティーブへの思いがあふれ出した。
ティーブを返して!!」
び出すクレアをクリスはいさめた。スティーブはウェスカーの部下によ
彼の手中にあったのだ。

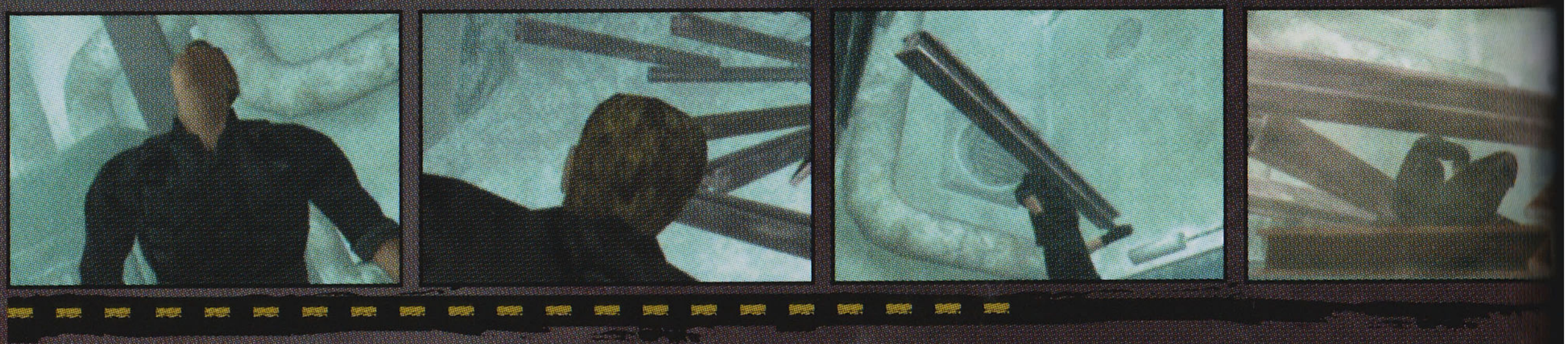
「お前は先に行くんだ、クレア」
　S.T.A.R.S.の生き残りとして、死んだ仲間のためにも負けるわけにはいかない。だがクリスの先制攻撃は、蚊でも追い払うかのようにウェスカーに振り払われた。そして、彼は今までの恨みを晴らすべく何度もクリスを殴り付けた。遂に動けなくなったクリスにウェスカーが豪語する。
「どうだ！　人間である事と引き換えに手に入れた俺の力は」
　しかし、クリスはまだあきらめていなかった。彼は自分の頭上に、無数の鉄骨が吊るされているのを知っていたからだ。ウェスカーが、最後の一撃を喰らわさんと宙へ舞うと、クリスは鉄骨を吊るすロープの根元へと身を投じた。そしてレバーを倒すと同時に、無数の鉄骨をウェスカーへ見舞った。一瞬の静寂。終わったか……そう思った途端、鉄骨は音を立てて崩れていく。
「おしかったな…」
　ウェスカーがそうつぶやいた直後、突然爆発が起きた。そして、衝撃が収まった頃には彼の顔面は醜く焼け爛れていた。
「悪運の強い奴め。次に会う時が貴様の最後だ」
　ウェスカーの高笑いを背に、クリスはクレアの元に急いだ。

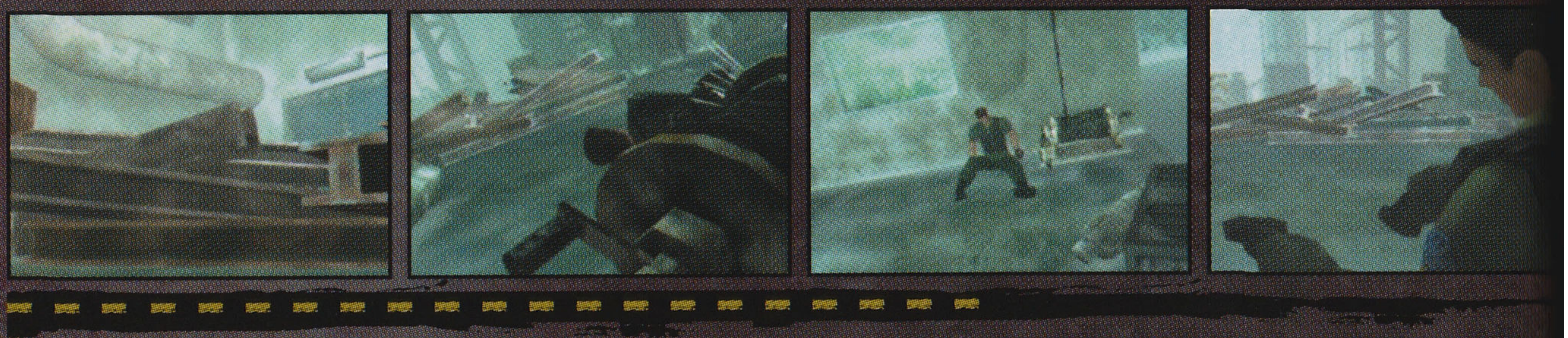


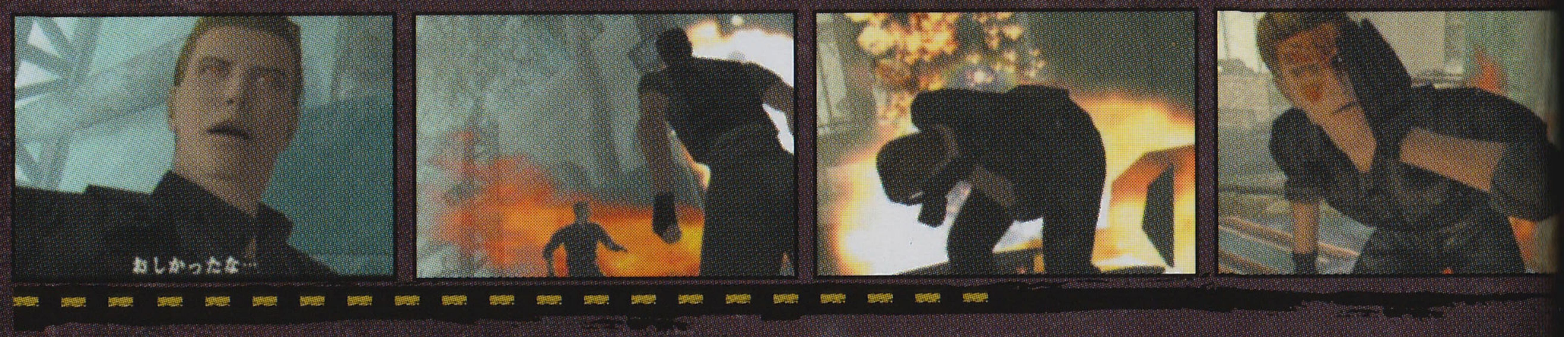
Story Track

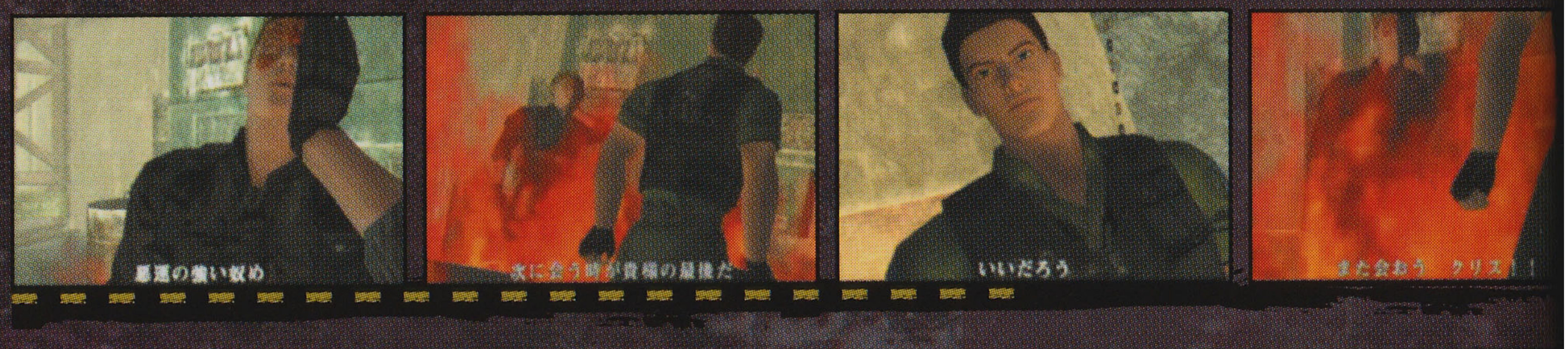

どうだ！

あの世に行くのはお前だ









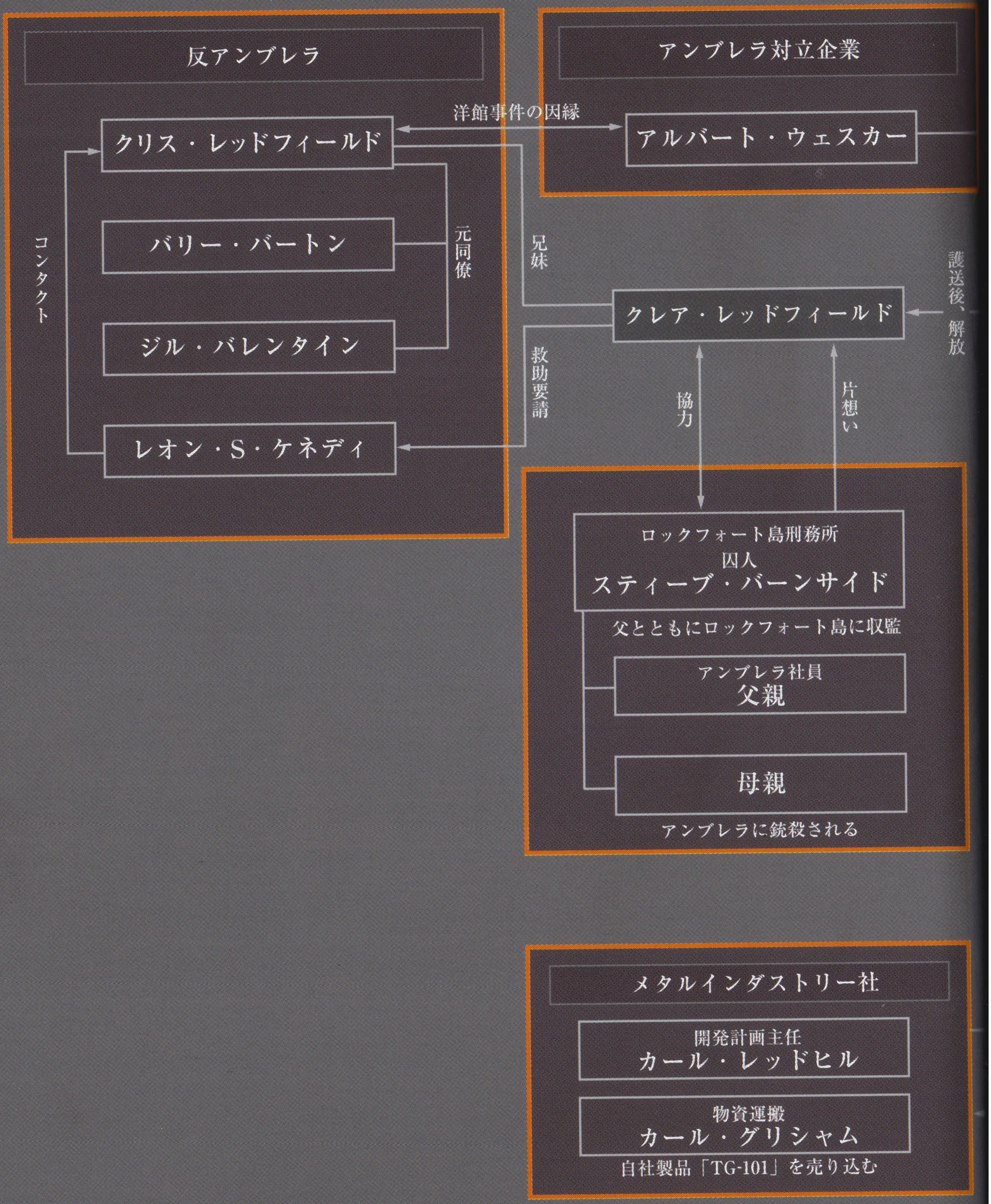
アレクシアの炎はすべてを焼き尽くした。そして巨大な爆発とともに、アシュフォード家の悪しき野望も潰えた……。
まばゆい閃光を浴びながら大空へ飛び立つ戦闘機のコックピットには、長い戦いを終えた兄妹の姿があった。
「兄さん…約束して、もう、どこにも行かないって」
しかし、クリスは頷くことなく決意を新たにする。諸悪の根源であるアンブレラを、必ず破滅させるのだと――。

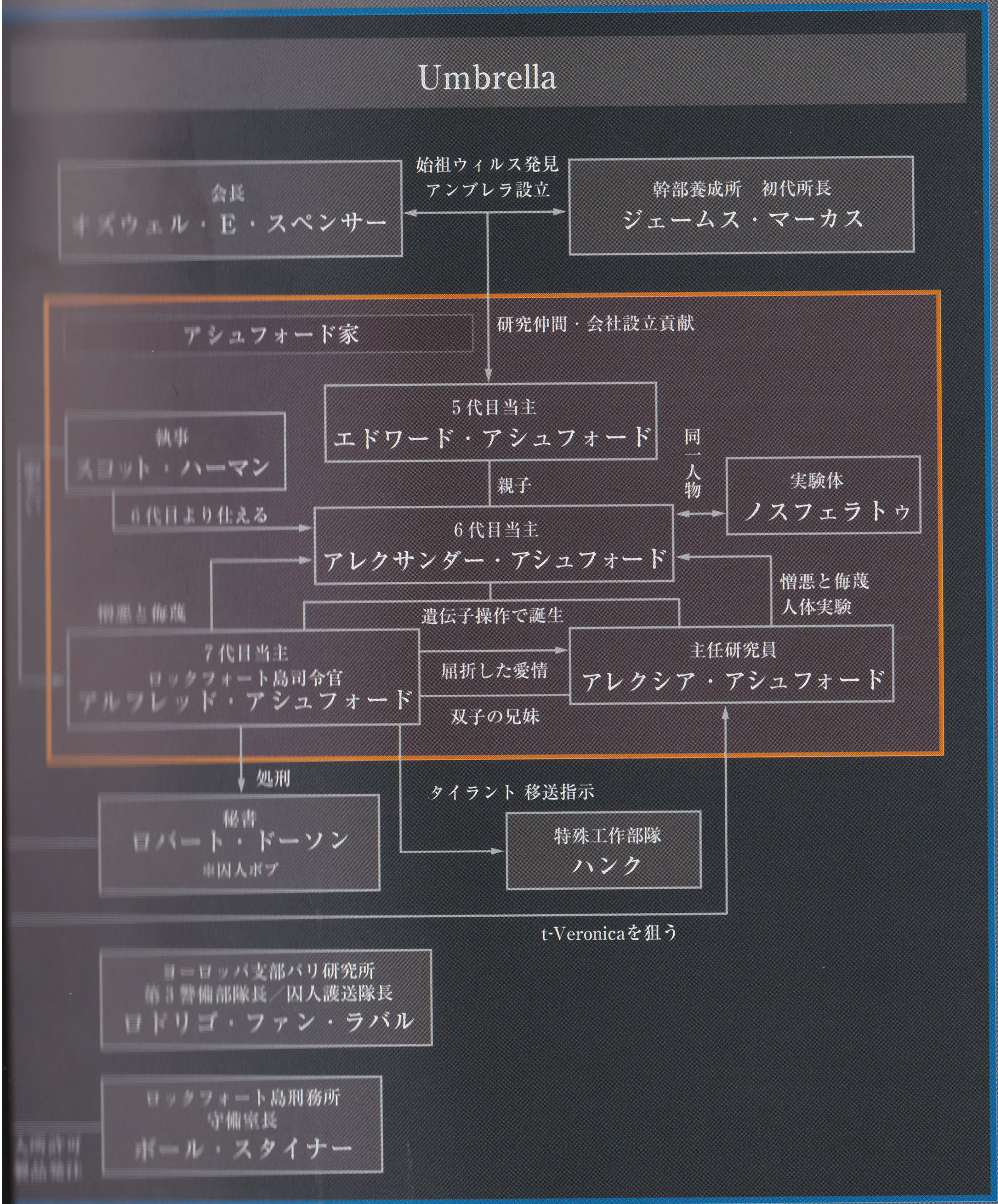
何で離してる…
約束は必ず守るだろ
約束して
もう どこにも行かないって
すまない クレア
それはできない
やり残したことがある
そうだ！ 借りは返してやる！
アンブレラを壊滅させてな！
にカタを付けてやるぜ！

Interrelation

相関

BIOHAZARD -CODE:Veronica-




Umbrella
始祖ウィルス発見
アンブレラ設立
会長
オズウェル・E・スペンサー
幹部養成所　初代所長
ジェームス・マーカス
研究仲間・会社設立貢献
アシュフォード家
5代目当主
エドワード・アシュフォード
執事
スコット・ハーマン
6代目より仕える
親子
同一人物
実験体
ノスフェラトゥ
6代目当主
アレクサンダー・アシュフォード
憎悪と侮蔑
人体実験
憎悪と侮蔑
遺伝子操作で誕生
7代目当主
ロックフォート島司令官
アルフレッド・アシュフォード
屈折した愛情
双子の兄妹
主任研究員
アレクシア・アシュフォード
処刑
タイラント 移送指示
秘書
ロバート・ドーソン
元囚人ボブ
特殊工作部隊
ハンク
t-Veronicaを狙う
ヨーロッパ支部パリ研究所
第3警備部隊長／囚人護送隊長
ロドリゴ・ファン・ラバル
ロックフォート島刑務所
守備室長
ポール・スタイナー

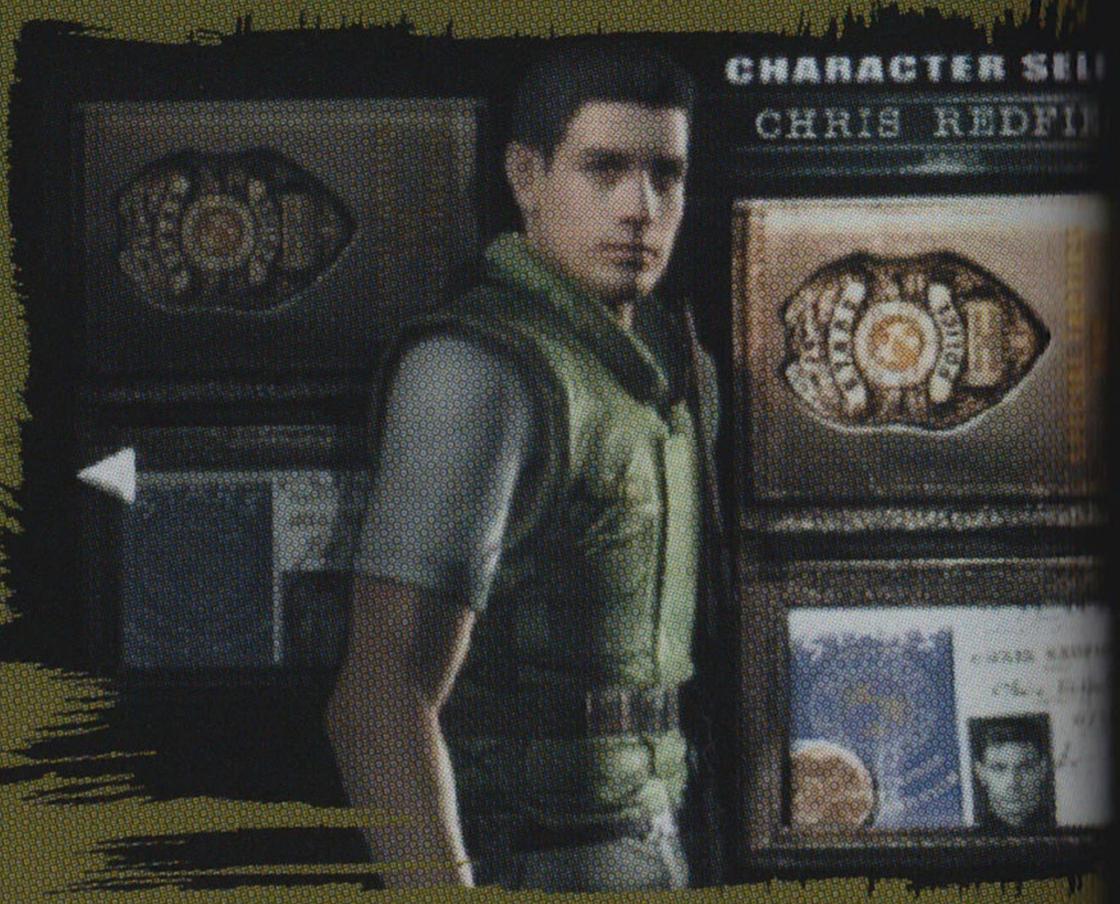
Character

Character Track

メイン及び重要なキャラクターを集成し、CGやイラスト、
イベントムービーなど現存するビジュアルとともに解説。
ゲーム中のエピソードを基に、あらゆる角度から人物像に迫る。

Chris Redfield

クリス・レッドフィール



S.T.A.R.S.アルファチーム所属。ポジションはPM（イントマン）。射撃技術はチームNo.1で、常に優れ観察力と洞察力でエースとして活躍する。元米空軍パイロットという経歴を持ち、ヘリの操縦免許も所有。現のチームメイトであるバリー・バートンとは、同じ部隊に属していた。いかなる状況でも信念を曲げない彼だが、そ真っすぐな性格は、時に上官との衝突を生んでしまったよだ。パイロットとして優秀であったにもかかわらず、彼は官との意見対立を理由に軍を除隊。以後、その優れた戦闘術が買われて、S.T.A.R.S.にスカウトされるとになる。実戦経験豊富でハンドガンから重器にいたるまであらゆる武器を使いこなし、ち前の柔軟性で格闘戦も難なくこなす。ナイによる接近戦もお手の物で、S.T.A.R.S.制式アーマーベストにはナイフホルダーを常時着。その中には、彼の愛用品である大型のコバットナイフが収められている。

PERSONAL DATA

AGE/25

BLOOD TYPE/O

HEIGHT/181CM

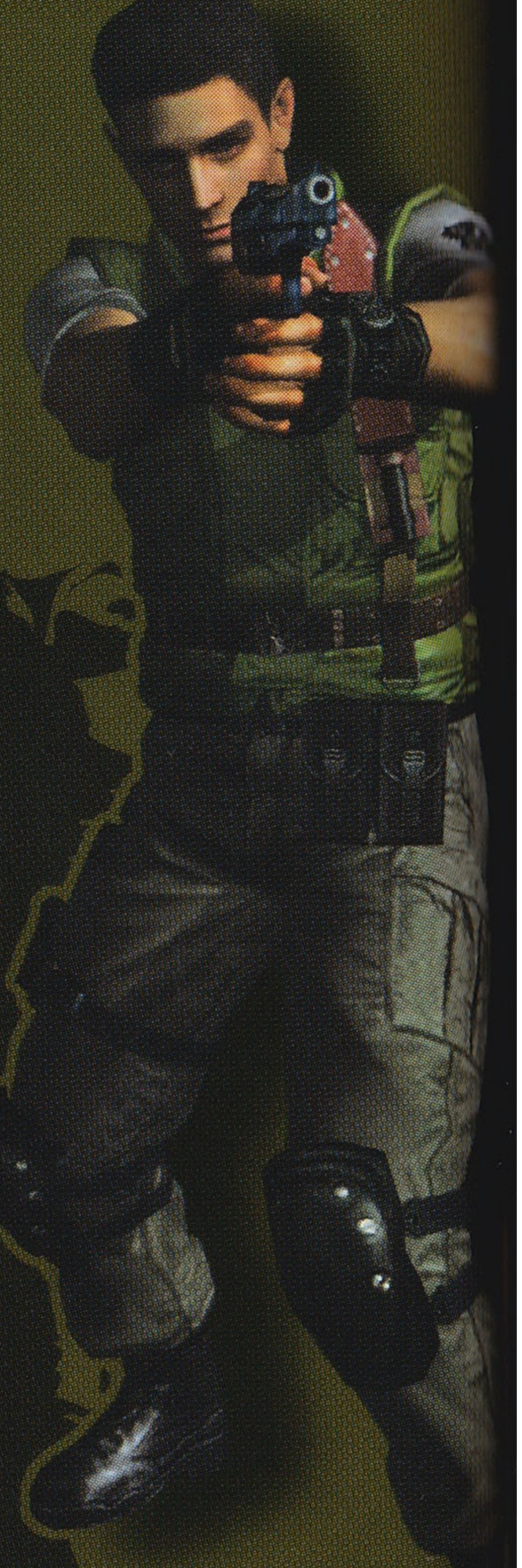
WEIGHT/80.5KG

[illegible]ショットガンを装備した状態。この武器は、
[illegible]と寄宿舎地下の大水槽で再会する
[illegible]となっているので、プレイヤーによっ
[illegible]かもしれない。

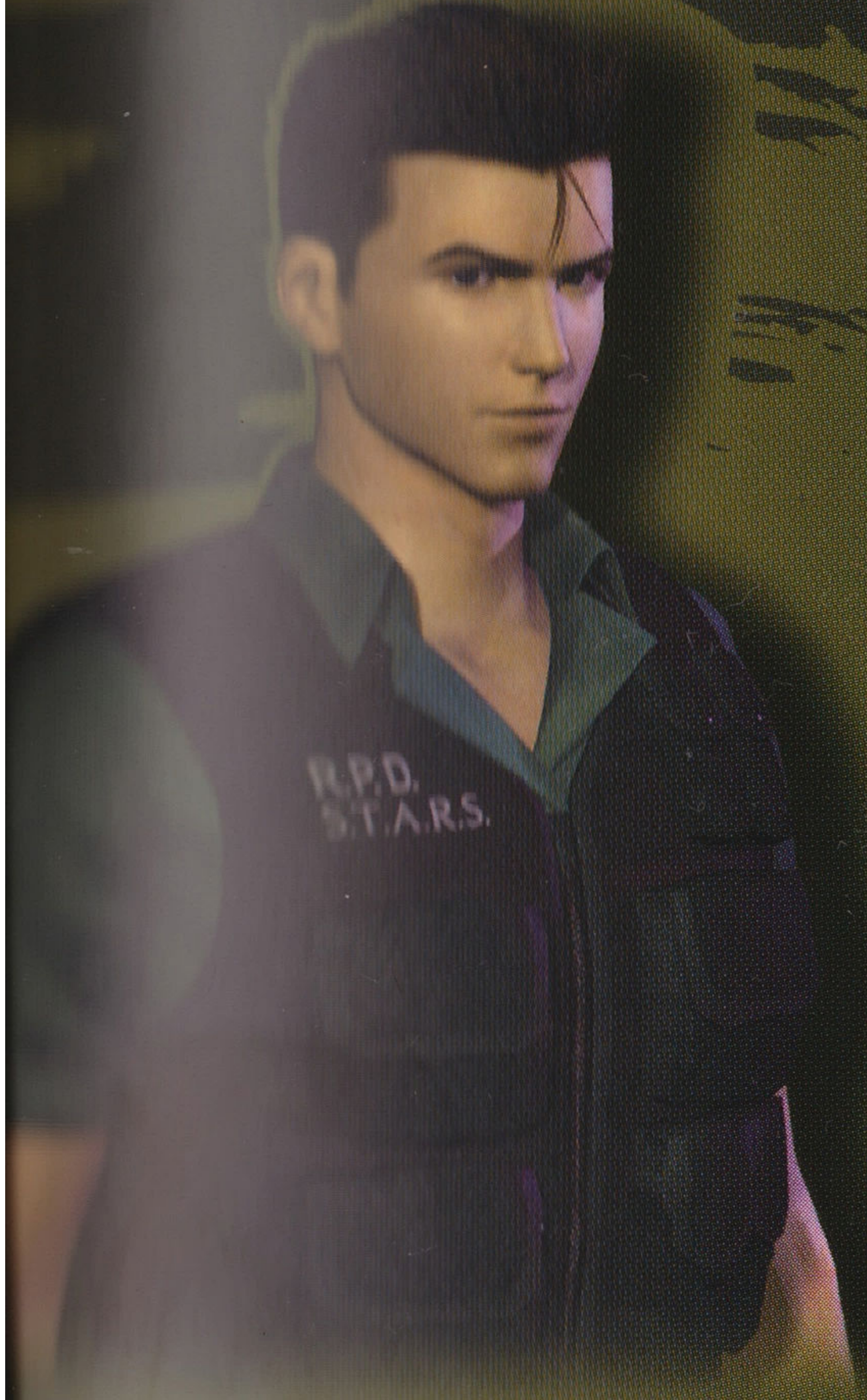
2周クリアした強者のみが得られる隠しコスチューム、S.T.A.R.S.ニュープロトタイプに身を包んだクリス。制式採用前の新型防弾ベストの背面には、S.T.A.R.S.の記章が装飾されている。

Chris Redfield

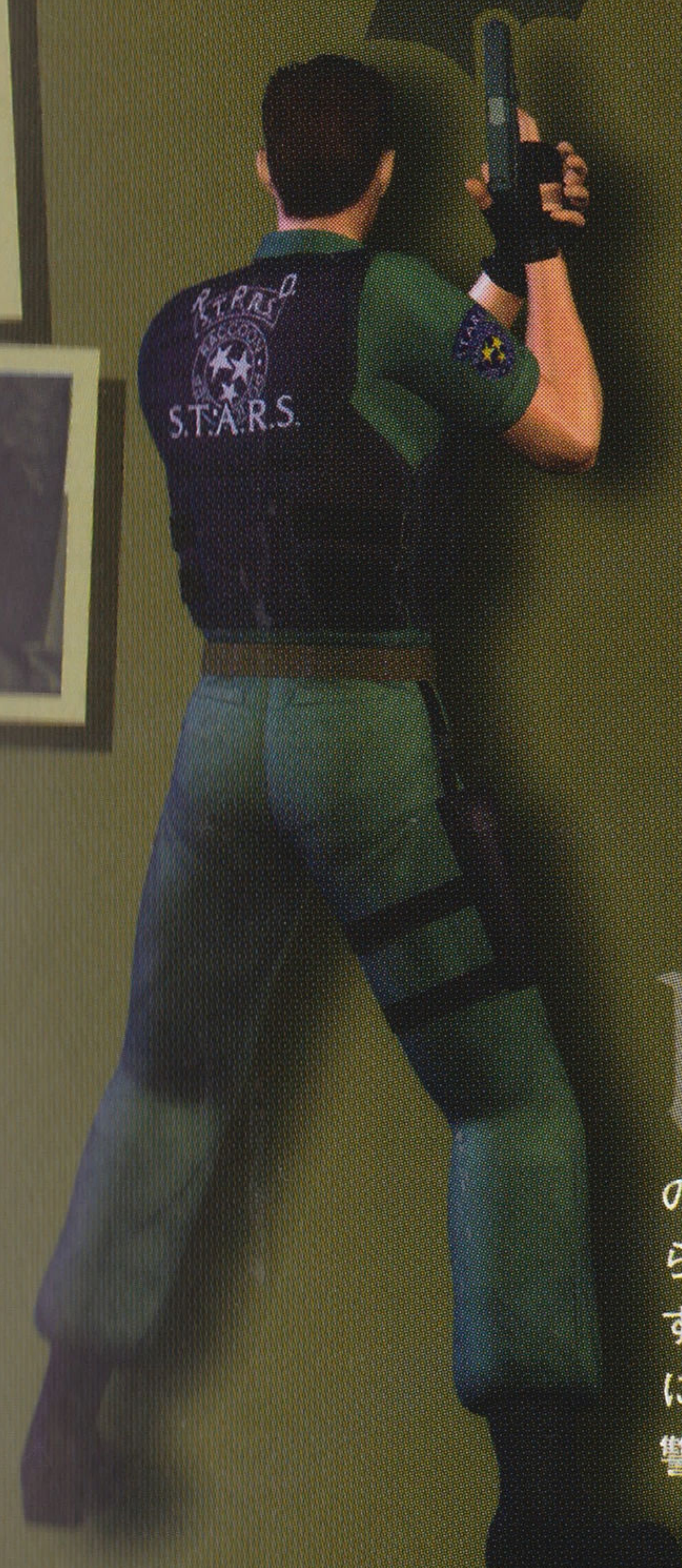
クリスは、洋館事件でアークレイ研究所を発見し、アンブレラの陰謀を探り当てた。しかし、大規模な組織的隠蔽を図ろうとする同社によって、彼の報告は公表されることなく闇に葬り去られてしまう。そこで、彼は独自に調査を進めることを決意し、ヨーロッパへ旅立つ。
　出発の際、家族に危険が及ぶことを恐れて妹クレアとの連絡を絶ったクリス。しかし、それはかえって裏目に出てしまう。彼の身を案じたクレアが単独で捜索に乗り出し、アンブレラの手に落ちてロックフォート島の刑務所へと移送されてしまったのである。この事実をクリスが知ったのは、クレアが行動を開始してから3カ月後のことだった。そして、その情報をクリスに伝えたのが、かつてクレアと行動をともにした、レオン・S・ケネディである。



クリスの銃かまえポーズ。彼が愛用するサムライエッジは、武器の補充やメンテナンスを担当するバリーがラクーンシティのケンド銃砲店に持ち込んでカスタム化した銃である。



『BIO CV』の基本コスチュームは、『bio』に登場するS.T.A.R.S.ニュープロトタイプと同じデザインである。これは、クリスがS.T.A.R.S.を去る時に、本部から試作品を持ち出したものと思われる。



レオンから情報を聞いた後、クリスは急遽ロックフォート島へ出発。この時、クレアは牢獄からの脱出に成功していたが、クリスと再会するまではかなりの時間を要した。これは、ある男の組織的介入があったからに他ならない。その人物の名は、アルバート・ウェスカー。すでに息絶えたと思われていた彼は、さらなる野望のために島で暗躍していたのだ。こうして、クリスの救出劇は復讐劇へと姿を変え、混迷の度を深めていく。

Albert Wesker

アルバート・ウェスカー

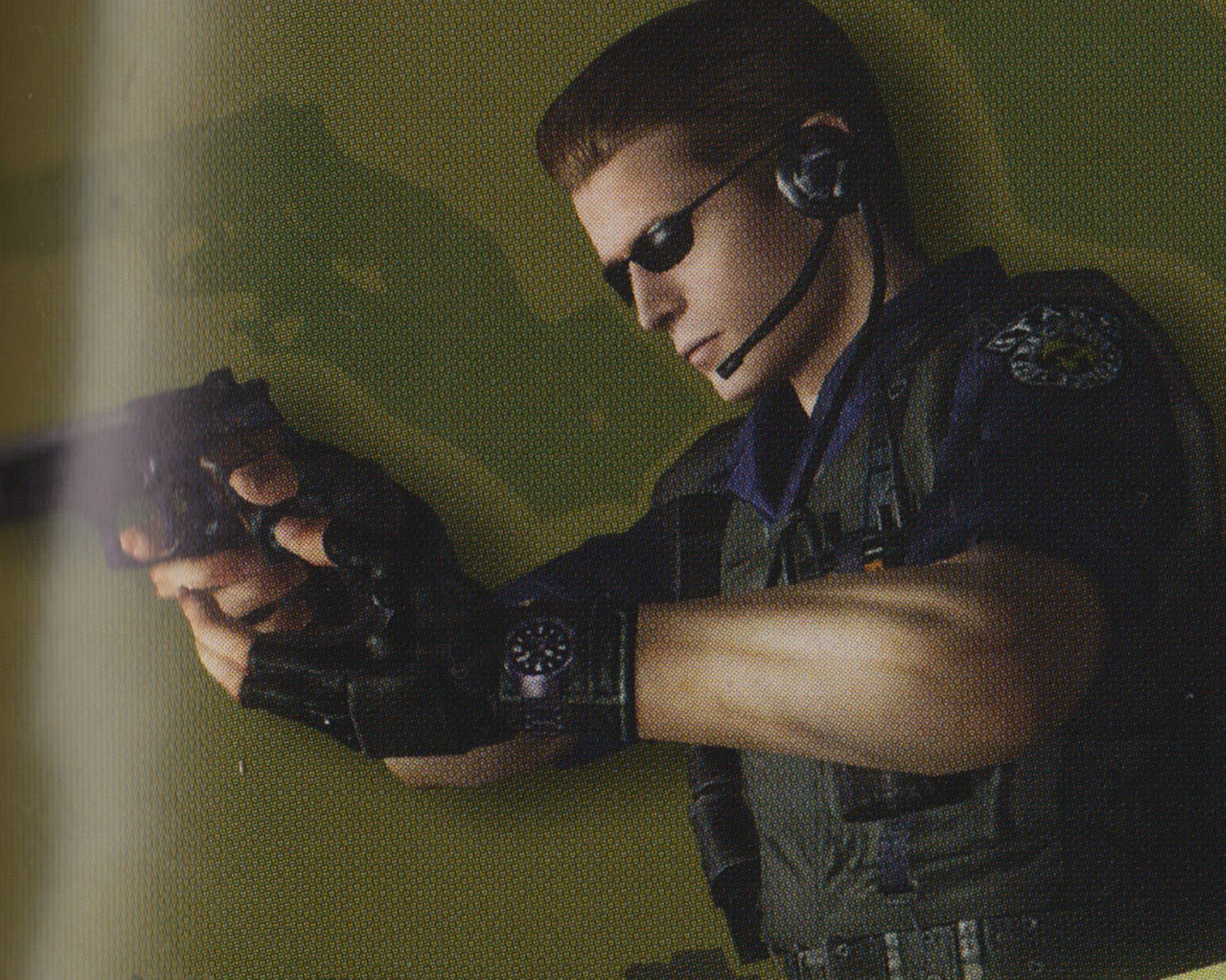
PERSONAL DATA

AGE/38
BLOOD TYPE/O
HEIGHT/183CM
WEIGHT/84.5KG

S.T.A.R.S.の隊長にして、アルファチームのリーダー。威厳と風格に満ちたその容姿は冷徹そのもので、トレードマークの真っ黒なサングラスが近寄りがたい印象を与えている。制服の上にはタクティカルベストを着用。脇腹には予備弾倉を入れたマグポーチを装備し、胸の部分には無線機を取り付けている。レッグホルスターにマウントしているのは、自分用にカスタマイズしたサムライエッジ。射撃技術は、エースのクリス・レッドフィールドに迫る勢いである。かつて生物工学の専門家だったウェスカーは、後にG-ウィルス開発者となるウィリアム・バーキンとともにアークレイ研究所に所属していた。目的は、t-ウィルスの研究。しかし2人の運命は、幹部養成所の所長であるジェームス・マーカスを裏切ったことから、大きく二分する。ウィリアムがアンブレラの中枢をになうまでに出世していったのに対して、ウェスカーは情報部員の身に甘んじていたのだ。その後、彼はS.T.A.R.S.創設と同時に隊長に就任。S.T.A.R.S.が真相に食い込むことを阻止する諜報活動を開始する。

ウェスカーに転機が訪れたのは、アークレイ山中への出動要請が出た時だった。そこでウェスカーは、S.T.A.R.S.抹殺と実戦データ収集という密命を逆利用しようと企てる。彼は、以前からアンブレラの対立企業に寝返ることを画策しており、手みやげを作るチャンスを窺っていたからだ。しかし、彼の計画はクリスやジルの活躍によって台なしとなり、ウェスカーはやむを得ず次なる計画を実行に移す。それは、ウィリアムが研究を進めるG-ウィルスを奪取することだった。洋館事件から2カ月が経過した頃、ウェスカーはスパイのエイダ・ウォンと協力して行動を起こした。この時もまた、レオン・S・ケネディやクレア・レッドフィールド、さらにはアンブレラ特殊工作部隊の妨害に遭い、奪取までにはいたらなかった。だが、残された死体からようやくG-ウィルスを回収。爆撃直前のラクーンシティから脱出することに成功している。

トレードマークは、昼夜を問わず常に掛けている真っ黒なサングラス。表情をなかなか窺い知ることができないため、よりミステリアスな雰囲気を醸し出している。



『BIO CV』でも『bio』と同様に黒を基調としたコスチュームで登場。『BIO CV』では、今までサングラスで覆われて謎だった彼の素顔を見ることができるので、イベントシーンは必見だ。

Albert Wesker

G-ウィルス奪取後、名誉を取り戻したウェスカーだったが、彼はそれで満足することはなかった。ウェスカーが次にめざした場所は、南極の地下研究所。そこで覚醒した天才科学者アレクシア・アシュフォードを自らの手で掌握するためである。ウェスカーは彼女が独自に開発した新型ウィルス「t-Veronica」を手に入れるために、秘密組織の特殊部隊を率いてロックフォート島を襲撃。島を混乱に陥れる。そして、彼はその破壊工作活動の中で、最大のライバルである元部下、クリスと因縁の再会を果たす。人間としてではなく、自然界から逸脱した新たな生命体として……。

Claire Redfield

クレア・レッドフィールド

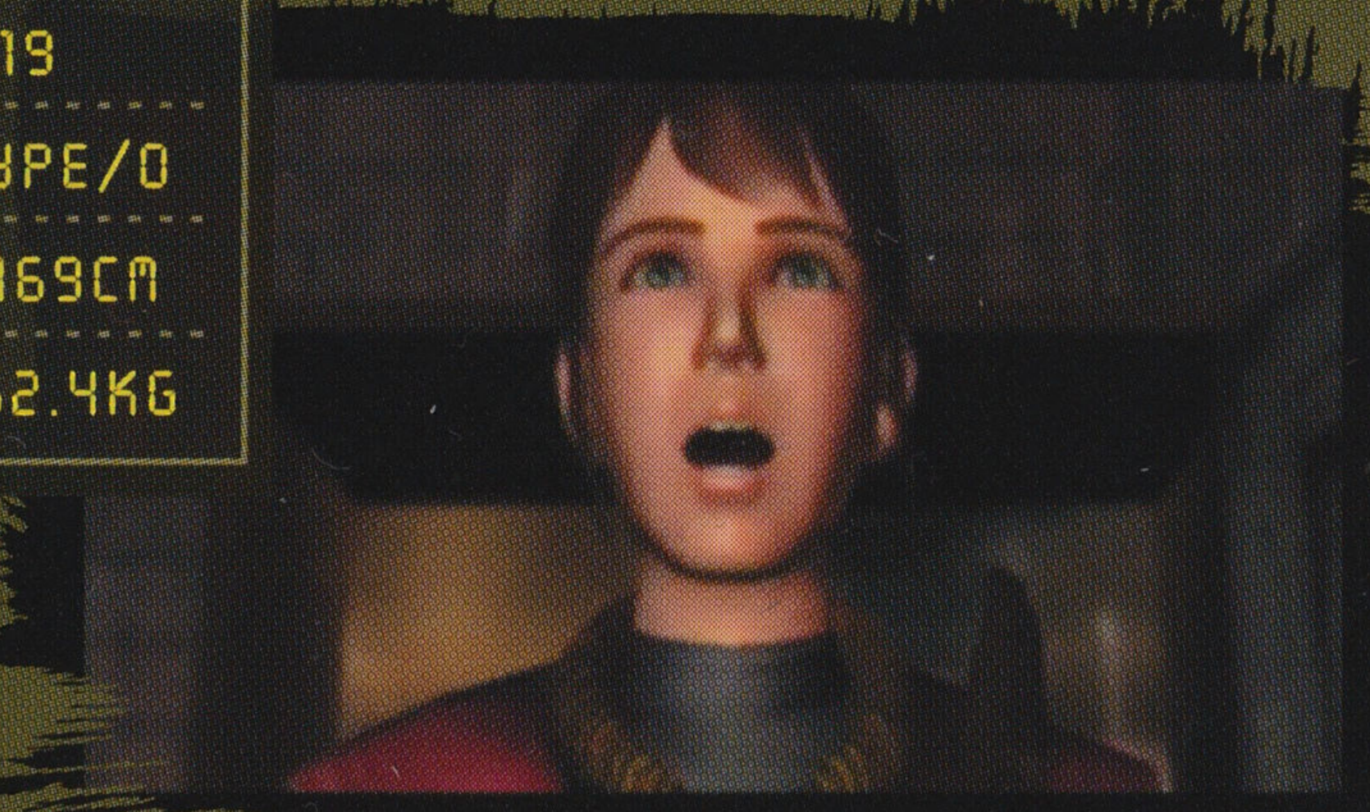
PERSONAL DATA

AGE/19

BLOOD TYPE/O

HEIGHT/169CM

WEIGHT/52.4KG



バイクをこよなく愛する活発な女子大生。クリス・レッドフィールドの妹で、S.T.A.R.S.隊員として活躍する兄を心から尊敬している。勝ち気な性格は兄譲りで、素人の女性ながらナイフからロケットランチャーまでなんでも使いこなす。クリス捜索時のスタイルは、胸にナイフホルダー、腕にハンドガンという出で立ち。コンバットナイフによる格闘や射撃に優れているあたり、常日頃から兄のレクチャーを受けていたことが窺える。また、彼女はジル・バレンタインに負けないほど手先が器用で、キーピックによるピッキングも得意としている。

クリスがヨーロッパへ向けて旅立った後、彼女は兄の安否を気遣いラクーンシティへと捜索に出た。街に到着した頃には、すでに街全域にt-ウィルスが流出。そのため、彼女は到着直後にゾンビの襲撃を受けて窮地に立たされる。そのピンチから救ってくれたのは、当時新人警官としてラクーン市警察に着任したばかりのレオン・S・ケネディだった。しかし、2人は知り合って間もなく、暴走するタンクローリーの爆発によって進路を隔てられてしまう。

Claire Redfield

まるで地獄絵と化した街で、あてもなく彷徨うクレア。過酷なサバイバルの中、クレアはシェリー・バーキンという名の少女と遭遇し、彼女を連れて脱出することを決意する。そして、シェリーを助けようと奔走するうちに、アンブレラが秘密裏に進めていたG-ウィルス計画の実態を突き止めるのだった。やがて、クレアはレオンと協力し合うことで、ラクーンシティからの脱出に成功した。しかし、彼女はそれで終わることはなかった。クレアは、レオンと別れた後もクリスの捜索を続行。クリスがアンブレラの拠点を探っているという情報をつかむと、すぐにヨーロッパへと旅立った。

バイクが大好きなクレアは、大型バイクを2台所有している。そのうちの1台はオープニングに登場。もう1台はランキング画面で見られる。

戦乙女ヴァルキリーがあしらわれたベストに身を包み、果敢にパリ研究所に潜入するクレア。その身のこなしはもはやプロ級のものだったが、警備隊の執拗な追跡によって逃げ場を失い、遂に捕らえられてしまう。すべてを知り尽くしたクレアをアンブレラが見過ごすはずもなく、彼女はロックフォート島の監獄へ移送された。しかし、収監直後に島が何者かによって襲撃されたことで、彼女は脱獄のチャンスを得る。脱獄後、クレアは収監先で知り合ったスティーブ・バーンサイドとともに島からの脱出を開始した。そして、レオンにメールを送信したことがきっかけとなり、念願の兄クリスとの再会を果たすのである。

『BIO CV』のクレアは、赤いベストにストレートジーンズといった動きやすいコスチュームで登場。バイク乗りらしいワイルドな着こなしが魅力的である。ちなみに、『BIO 2』で着ていたベストはシェリーに預けたままになっている。

『BIO 2』と『BIO CV』でクレアが着ているベストには、どちらも派手なバックプリントが入っている。『BIO 2』のベストには、『bio』のクリス用隠しコスチュームと共通の天使の絵柄で「Made in Heaven」。『BIO CV』のベストには、戦乙女ヴァルキリーの絵柄で「Let me live」と書いてある。

Alexia Ashford

アレクシア・アシュフォード

PERSONAL DATA

AGE/27

BLOOD TYPE/UNKNOWN

HEIGHT/175CM

WEIGHT/54.3KG

名門貴族のアシュフォード家6代目当主、アレクサンダー・アシュフォードが人工的に生み出した天才。わずか10歳で大学を首席で卒業した経歴を持ち、その優れた頭脳と美貌は初代当主ベロニカの再来とまで噂された。アルフレッドとは双子の兄妹だが、妹に異常な愛を注ぐ彼に対してはまるで女主人のように君臨していた。

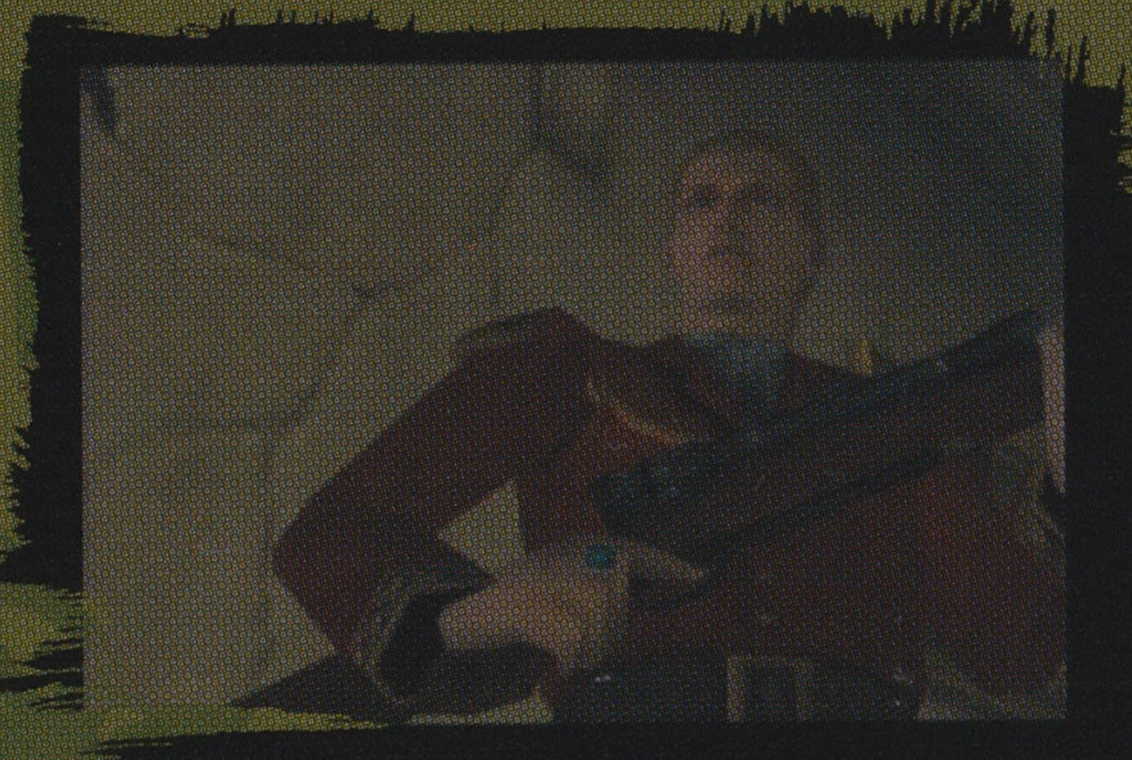
アレクシアは10歳の頃、南極基地の主任研究員に就任。アークレイ研究所のt-ウィルス研究と同時期にt-Veronicaを単独開発し、研究員たちを驚かせる。しかし、ウィルスの開発が佳境に入ると、アレクシアは信じられない行動に出た。邪悪な心を持って生まれた彼女は、なんのためらいもなく父アレクサンダーを実験に利用し、彼にウィルスを投与したのである。t-Veronicaと共生できないために、醜悪な怪物へと変貌するアレクサンダー。それは、紛れもなく実験の失敗を意味した。だが、アレクシアにとって失敗はひとつの過程でしかなく、振り返ることなくさらなる研究を続けていく。

研究が最終段階を迎えると、アレクシアは自分自身を実験体にすることを決めた。つまり、今度は自分の体にt-Veronicaを投与するというのだ。これにより、アレクシアは15年間のコールドスリープに突入。公には実験中の事故死と伝えられたが、計画自体は順調に成功への時を刻んでいた。

15年後、アレクシアは長い年月をかけることでt-Veronicaとの共生に成功し、驚異的な能力を身に付けて覚醒を果たした。彼女の研究は、遂に実を結んだのである。復活したアレクシアは、手始めに南極基地に居合わせたスティーブ・バーンサイドにt-Veronicaを投与。彼の運命を狂わせる。共生できなければどうなるかを知りながら、彼女はスティーブにウィルスを植え付けたのだ。アレクシアが望むものは自己の繁栄に過ぎず、その野望はますますエスカレートしていく。しかし、それは同時に破滅をも意味した。スティーブの復讐に燃えるクレア・レッドフィールドと、彼女の兄クリス。2人の深い絆に、勝るものはなかったからだ。アレクシアは、彼らとの戦いでt-Veronicaの実力を発揮しようとするが、死闘の末に敗退。野望を実現することなく、その忌まわしい研究人生に幕を下ろした。

Alfred Ashford

アルフレッド・アシュフォード



PERSONAL DATA

AGE/27

BLOOD TYPE/UNKNOWN

HEIGHT/176CM

WEIGHT/61.8KG

ロックフォート島に設置された基地の最高司令官。かつてアンブレラ設立に貢献したアシュフォード家の6代目当主、アレクサンダー・アシュフォードの息子だが、その出生には秘密がある。陰りの見え始めたアシュフォード家の再興をめざし、アレクサンダーはクローン技術で天才児を生み出す極秘プロジェクト、「コード：ベロニカ」を始動させた。そこで生まれたのが、アルフレッドと双子の妹、アレクシアである。アレクシアが計画通り天才的頭脳を持って生まれたのに対して、アルフレッドは常人よりも多少知能が高いだけの“失敗作”に過ぎなかった。

2人が12歳の頃、アルフレッドは自分たちが人工的に生み出されたことを知り、父親に強い不信感を抱いた。そして、アルフレッドが当主を引き継いだこの年、父が不運にもアレクシアのt-Veronica開発で実験台となり、アレクシア自身も実験台となってコールドスリープに入ったために、孤独に陥ったアルフレッドは次第にその性格を歪めていく。

1993年、英国の大学を卒業し、南極基地及びロックフォート島の基地司令官に就任したアルフレッド。その後はアンブレラから全権を任されるが、彼が島で行ったことといえば、囚人の虐待や趣味のミリタリーコレクションで施設を装飾することばかりだった。アルフレッドは、もはや過去の栄光を引きずるただの独裁者でしかなく、アンブレラにとってはお荷物のような存在となる。

助言者もなく、ただひたすらアシュフォード家再興を夢見る毎日は、彼の性格破綻に拍車を掛けた。そして、いつしか自分の心の中にもうひとりの人格を形成し、寂しさを紛らわしていく。その人格とは、アルフレッドが妄想から作り出した理想のアレクシア像だった——。

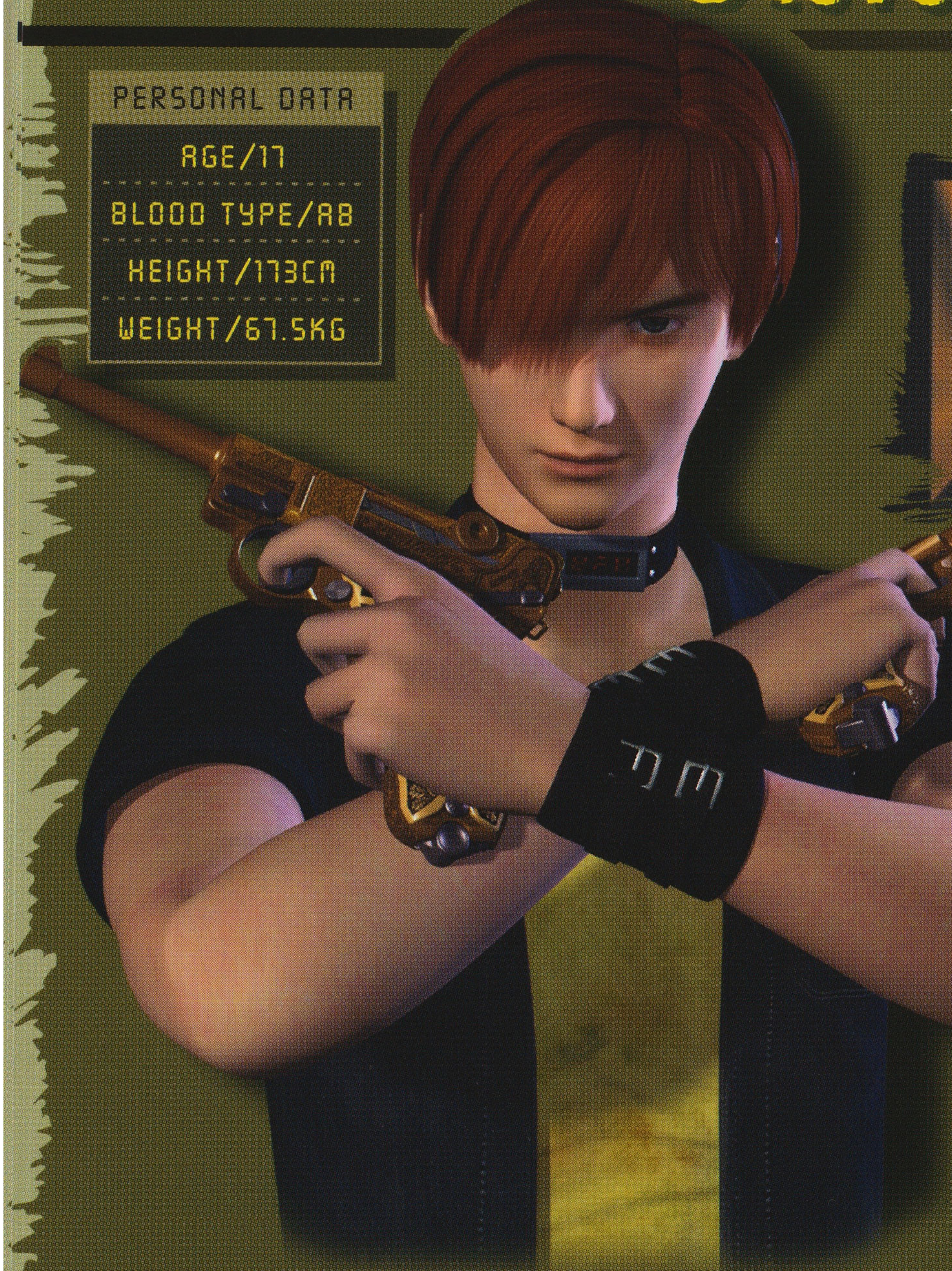
アルフレッドが当主となってから15年後、彼の無能ぶりをよく知るアルバート・ウェスカーは、t-Veronicaを奪うために基地を襲撃。彼の部隊がt-ウィルスをばらまいたことで、島は大混乱に陥る。ウェスカーがアレクシアを捜索する中、アルフレッドが取った行動は脱獄したクレア・レッドフィールドの追跡だった。彼はクレアを基地に潜入したスパイと勘違いしたのである。それは、隠密行動を取っていたウェスカーにとって好都合かつ愉快極まりない展開だった。クレアをスナイパーライフル片手に執拗に追い回し、自分の生まれ故郷である南極基地まで追い詰めたアルフレッド。しかし、彼は皮肉にも最愛の妹が15年の眠りから目覚めたその日、クレアとともに行動していたスティーブ・バーンサイドが放った銃弾によって、南極の厚い氷の谷底へと葬り去られる。

Steve Burnside

スティーブ・バーンサイド

PERSONAL DATA

- AGE/17
- BLOOD TYPE/AB
- HEIGHT/173CM
- WEIGHT/67.5KG



ロックフォート島の刑務所に囚われていた少年。彼が収監されたそもそもの原因は、元アンブレラ社員である父親の愚行にあった。盗んだ機密情報を外部に売ろうとした父親は、それが発覚したことで妻を殺され、息子ともども監獄行きとなったのだ。その事件以来、スティーブは他人だけでなく身内に対しても強い不信感を抱くようになり、絶海の孤島で深い悲しみに暮れる日々を過ごしていた。

スティーブに希望をもたらしたのは、アルバート・ウェスカーが引き起こした騒動だった。彼の襲撃によって崩壊した刑務所から脱出することに成功したスティーブは、ばらまかれたt-ウィルスによる混乱に乗じて空港を捜索。その過程でひとりの女性と運命的な出会いを果たす。

クレア・レッドフィールド――スティーブの前に現れたのは、兄クリスを捜していた彼女だった。

クレアとのツーショット。スティーブのメイン立ちポーズを、クレアのグラフィックと背中合わせにしたもの。両者とも、『BIO CV』で初めて可能になった二丁拳銃スタイルになっているのが興味深い。

クレアと遭遇したスティーブは、初めは彼女を邪険に扱うが、クレアの優しさや強さに触れるうちに徐々に心を開いていく。表面上は生意気でお調子者でも、内面は誰よりも純粋で愛に飢えていたのだ。

アンブレラの呪縛は、なかなか2人を解き放とうとしなかった。島からの脱出に成功したスティーブたちは、何者かに導かれるように南極基地に辿り着く。そして、必死に脱出路を探す彼に、新たな悲劇が襲い掛かった。15年ぶりに覚醒したアレクシア・アシュフォードがスティーブを捕らえ、自ら生み出したt-Veronicaを彼に投与したのだ。ウィルスの侵食によって瞬く間にモンスターと化し、クレアに襲い掛かるスティーブ。しかし、クレアに対する確かな愛は、体を蝕むウィルスにも負けなかった。自我を取り戻し、クレアを守るために自分の命を犠牲にしたのである。そして、スティーブはクレアに愛を伝えると、人間としての短い生涯に幕を下ろした……。

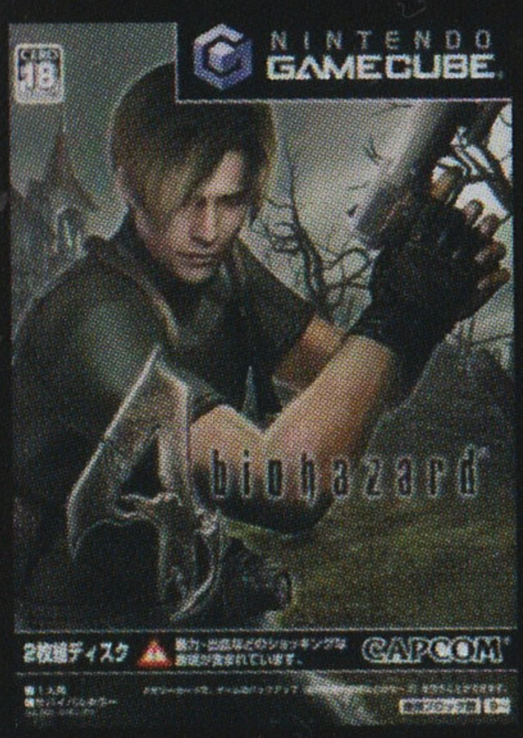
Steve Burnside

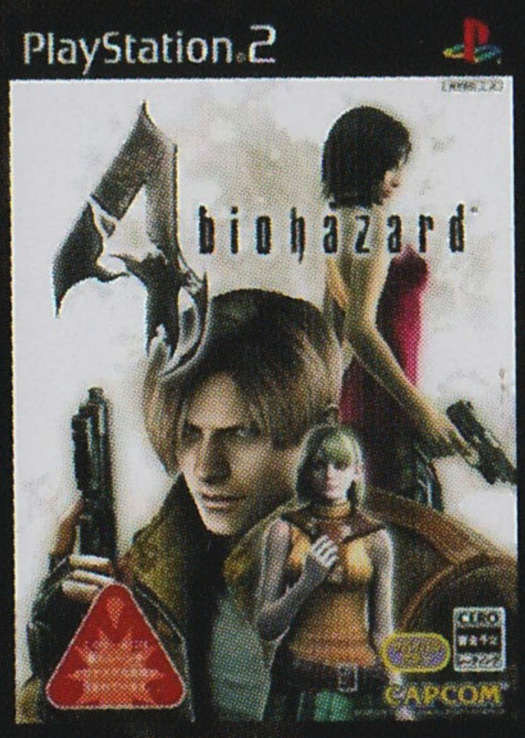
スティーブは、その後ロックフォート島で暗躍していたウェスカーの手によって回収され、島から持ち出されている。スティーブの体内に残されたt-Veronicaウィルスを手中に収める狙いがあったことは明白だ。

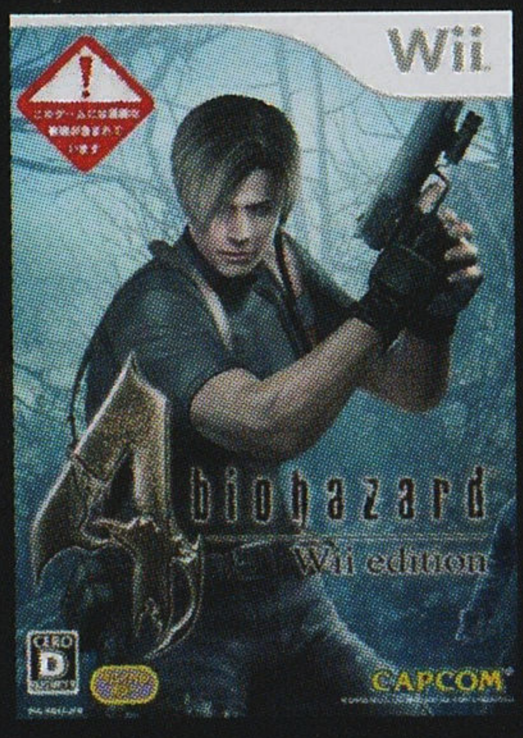
ゴールドルガーを二丁かまえたスティーブ。本編ではあまり活躍の場がなかったスティーブだが、追加モード「BATTLE GAME」ではこの二丁拳銃スタイルで暴れまくることができる。

Story

Story Track







(左)GAME CUBE 版：2005年1月27日発売
(中)PlayStation 2 版：2005年12月1日発売
(右)Wii 版：2007年5月31日発売

序章　欧州での初の洗礼

1

泥で汚れた車が山道を走っていた。冬はまだ先のはずだが、周囲の木々はすっかり葉を落とし、道端は枯れた葉で埋もれている。

車内に流れる哀愁を帯びたフラメンコの調べが色あせた風景に馴染んでいる。後部座席で揺られるレオン・S・ケネディは、物思いに耽るようにこの景色を眺めていた。

「お前、一体何者なんだ?」

助手席から年配の警官が声をかけてきた。ハンドルを握る若い警官も聞き耳を立てている。ある村までレオンを案内するのが、彼らの役目だ。

「ごあいさつだな。用件は聞いてるだろ?　迷子の娘の捜索だ」

「一人でか?」

「男三人でこんな山奥にパーティでもないだろう。まあ、お前らならやりかねないか…」

年配の警官は笑い声を上げ、それ以上の質問はしなかった。

「まあ、署長の命令でしようがねえけどよ。ちょろい仕事じゃねえな」

「頼りにしてるぜ」

年配の警官は笑みを浮かべ、任せてくれとばかりに両手を広げて見せた。木製の吊り橋を渡ると車が止まり、運転席の警官が脇にある小さな道を指し示す。木々の向こうに農家のような建物が見えた。

「こっから先が例の村だ」

レオンがひとりで歩き始めると、通信機にバックアップする本部から連絡が入った。

「今回あなたをサポートする事になったハニガンよ」

「ターゲットの名前はアシュリー・グラハムだな」

「そうよ。グラハム大統領の一人娘」

数日前、アシュリーはマサチューセッツ州の大学で、謎の集団に拉致された。アシュリーはレオンが護衛するはずだったが、大統領から救出の特命が与えられたのだ。唯一の手掛かりは、これから向かう先にある村で、黒装束の集団が彼女に似た女性を連れていたとの目撃情報。

「アシュリーを拉致した集団について、こちらでも調査を進めておくわ」

レオンは通信を切ると、手始めに村の入り口に建つ家へ向かった。

屋内は、まるで廃家のようで生活感が感じられない。家の住人と思しき男が暖炉に火をくべているが、声をかけても背中を向けたままだ。レオンは男に近づきながら、アシュリー・グラハムの写真を取り出した。

「この娘のことを何か知らないか?」

男は暖炉から顔を上げ写真を一瞥すると、顔をしかめながら口早に答えた。よく聞き取れなかったが、レオンが歓迎されていないことは理解できた。

「お邪魔のようだな。出てくよ」

踵を返した時に屋内の空気がかすかに揺れ、背中にある種の気配を感じる。これは、殺気だ。

レオンは身を屈めて跳躍し、前転する。男が振るった手斧が背中をかすめ、空を切った。振り返りながら9mmのオートマチックを抜くと、男に制止するよう警告した。

「動くな!」

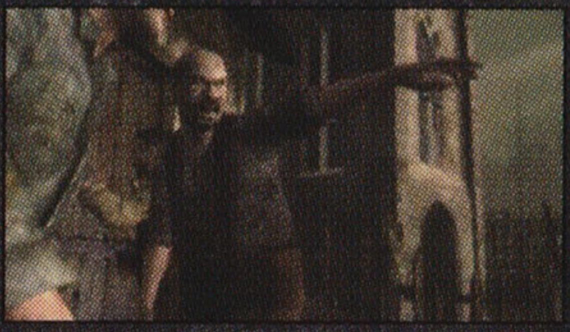
6年前に経験した異常事態を思い起こした。あの時、レオンを襲った相手には一般市民もいたが、それはt-ウィルスに感染した「動く屍」

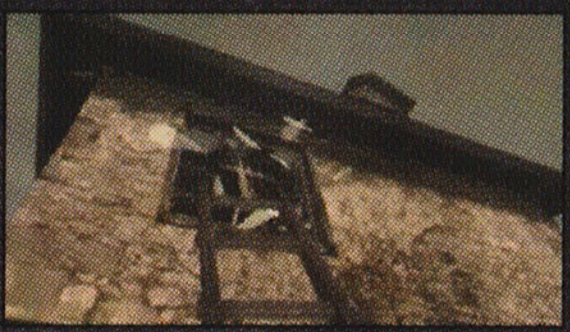
だった。目が赤く光っているが、この男はゾンビの類には見えなかった。
「止まれ」
しかし男は唸り声を上げ、斧を振り上げる。
レオンは引き金を引き、弾丸は男の体を貫いた。床へ倒れた男は身動きひとつしない。外で車のエンジンがかかる音が聞こえ、続いて警官たちの声と激しい衝突音。悪い予感がする。外に出ると橋は落ち、黒煙が上がっていた。崖下を覗くとトラックと警察車両が炎上し、さっきまで軽口を交わしていた警官たちの姿は見えなかった。
得体も知れない狂気の触手が、レオンに近づきつつあった……。

2

村の中心部には石造りの家屋が建ち並んでいた。女たちは水を運び、男たちは手にした鋤で飼葉の山を積み、鶏や牛などの家畜の姿も見える。
中央に3mほどの高さの杭が立てられ、そこには年配の警官がぶら下がっていた。力尽きた警官の足元では飼葉の山が炎をまとい、パチパチと音を立てている。
村の様子を窺っていたレオンは双眼鏡から目を離すと、再び村に向かった。家の中で見つけた白骨の山、来訪者への火あぶり、常軌を逸した村人たち。この村がアシュリー誘拐に関係があるのなら……。急がねばならなかった。

村へと侵入すると、村人が不意に姿を現し、レオンを指差しながら大声を張り上げた。それを合図に四方から村人たちが集まってくる。単身で近づこうとはせずに数人が連携して動き、まるで群れで生きる肉食獣の狩猟法だ。
くそっ、人数が多過ぎる！
レオンは近くの家へ逃げ込んだ。
村人は懸命に扉を叩いている。扉の外からエンジンの始動音が聞こえ、窓越しにチェーンソーを抱えた村人の姿が見える。2階の窓にはハシゴが掛けられ、それを伝ってなだれ込んできた。彼らは異常だが、恐ろしいほど冷静で知恵を絞って追い詰めようとしている。
レオンは銃を撃ち続けた。しかし、撃ち倒した後から、まるで洪水のように次々と村人は現れる。事態は悪くなる一方だ。突破口を見つけなければ……。





音が聞こえた……。教会の鐘の音だ。村人たちの動きが止まり、レオンは呆然と事態を見守る。押し寄せた村人たちは踵を返し、何かをつぶやきながら、村の奥に建つ屋敷の中へと消えていく。
レオンだけが村に取り残された。その横で、警官を焦がす炎が揺れていた。

第一章　ロス・イルミナドス教団

1

村内をくまなく捜索したレオンは、納屋でメモを発見した。しかも、メモに添えられている写真は自分だった。

近々、合衆国のエージェントが、この村の調査に訪れるという情報が入った。このエージェントが例の者と接触しないよう注意せよ。
とりあえず例の者は、農場を抜けた先の廃屋に監禁してあるが、準備が整いしだい、より警戒厳重な渓谷へ移送する。その間、合衆国の人間を近寄らせてはならない。

メモの最後には、この村の村長「ビトレス・メンデス」の署名が記されていた。もし「例の者」がアシュリーだとしたら、移送される前に救出しなければならない。

村人を極力回避しながらレオンは進んだ。
廃屋を見かけ、部屋に侵入すると、クローゼットが音を立てながら揺れている。扉を開けると、後ろ手に縛られた黒髪のラテン系の男が転がり出てきた。レオンに縄を解かれながら、ラテン男は問いかけてきた。
「あんた、奴らとは違うのか?」
「あんたはどうなんだ?」
拘束から解放された男は、派手な指輪が目立つ指を動かし、自身の無事を確認している。片田舎の農村には場違いな装いだ。
レオンは村で見たメモの内容を思い返しながら考えた。この男が「例の者」なら、この村とは敵対しているはずだ。ただし、それが「味方」を意味するのか。レオンは用心せざるをえなかった。それはこの男にとっても同じだろう。
続けて男は尋ねた。
「一つ大事なことを聞かせてくれ。たばこあるか?」
場違いな質問にレオンは呆れながらガムならと答えた。事情を聞くまで、かなり遠回りをする羽目になりそうだ。

会話が中断する。農具を手にした2人の村人が現れたからだ。ラテン男が声を上げ、その視線は村人たちの背後へ向けられていた。
「ヤバイ!」
村人の背後から、黒く煤けたロングコートを着た大男が現れた。禿げ上がった頭とは対照的に、口元には黒く縮れたヒゲを生やしている。無言のまま、レオンを見据えていた。
ラテン男が
「ここのボスだ!」
とつぶやく。つまり、この大男が村長のメンデスか。レオンは渾身の回し蹴りを放つ。しかし、メンデスは右の掌で踵を受け止めると、表情を変えずに宙へ放り投げた。投げ飛ばされたレオンは壁に激しく叩き付けられ、やがて意識が遠のいていった。

2

夢というものは、いつでも他愛のないものだ。ぼんやりと浮かぶのは、フードを被って杖を手にする老人の姿。童話に出てくる魔法使いにそっくりだった。レオンは魔法使いの声を聞いていた。

「弱き人間よ……」

レオンの意識の中で、魔法使いの声が囁いた。

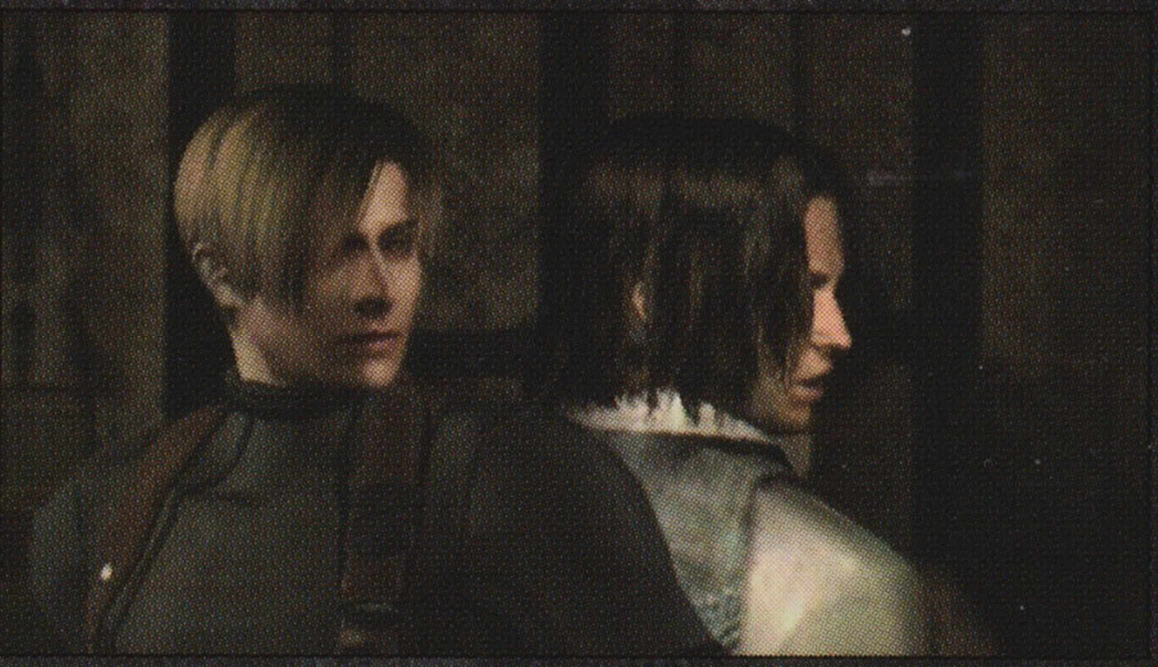
「我らの力を授けてやろう」

首筋に痛みが走る。針で突かれたような痛みだった。

「やがてお前もこの力の魅力に逆らえなくなる……」

レオンは夢の中で自問した。
いったいどういう魔法だ?
俺に、何を注射したんだ?

意識を取り戻したレオンは、どこかの納屋の中にいた。後ろ手に拘束具をはめられ、背後のラテン男と繋がれているようだ。不気味な夢から覚めても、厄介な現実に戻っただけだった。
「大丈夫か?」
ラテン男に声をかけると、文句が返ってきた。
「俺を助けるはずじゃなかったのかよ? あんた、アメリカ人だろ? 何しに来た?」
「俺はレオンだ。この子を探しに来た。知らないか?」
レオンは名乗りながら、後ろ手にアシュリーの写真を掲げた。
「当ててやろうか。大統領の娘だろ」
ラテン男は村人が大統領の娘について話しているのを聞いただけだと語った。鐘の音に従った村人たちの様子から、もしかするとアシュリーは村の教会に捕らわれているのかもしれない。レオンはそう考えながら、ラテン男の素性を尋ねてみた。
「ルイス・セラ。ただのハンサムなプーさ。マドリッドの警官だったが、辞めちまった」
どこか人ごとのように自身を語った。
レオンもルイスと同じく、元警官だった。1日だけだったが。
「配属初日からラクーンシティの事件さ」
「それってアンブレラ事件か?」
うなずくレオンに、ルイスが話を続ける。
「警察のラボでウィルスのサンプルってヤツを…」
ルイスの言葉が止まった。納屋に大きな斧を引きずった、血まみれの村人が入ってくる。
「何とかしろ! 元警官だろ」
村人がレオンたちに向かって、斧を振り上げた。
「お前もな!」
とっさに背を屈め、腕を伸ばす。振り下ろされた斧が、2人を繋ぐ拘束具を打ち壊した。レオンは続けて攻撃してきた村人を軽々と倒したが、気が付くとルイスの姿は消えていた。
レオンの目指す場所はひとつ。彼は納屋を後にした。



3

教会へ向かう途上でレオンは、行く手を阻むように建つ屋敷を発見した。手入れが行き届いており、どうやら村長の家らしい。裏口から侵入し、書斎と寝室を兼ねたような部屋に入る。寝台の上にメモがあった。

サドラー様の命令により、合衆国のエージェントは生かしたまま監禁しておいたが、その真意は計りかねる。

第3の組織が動いているとすれば、この隙を見逃すはずはない。

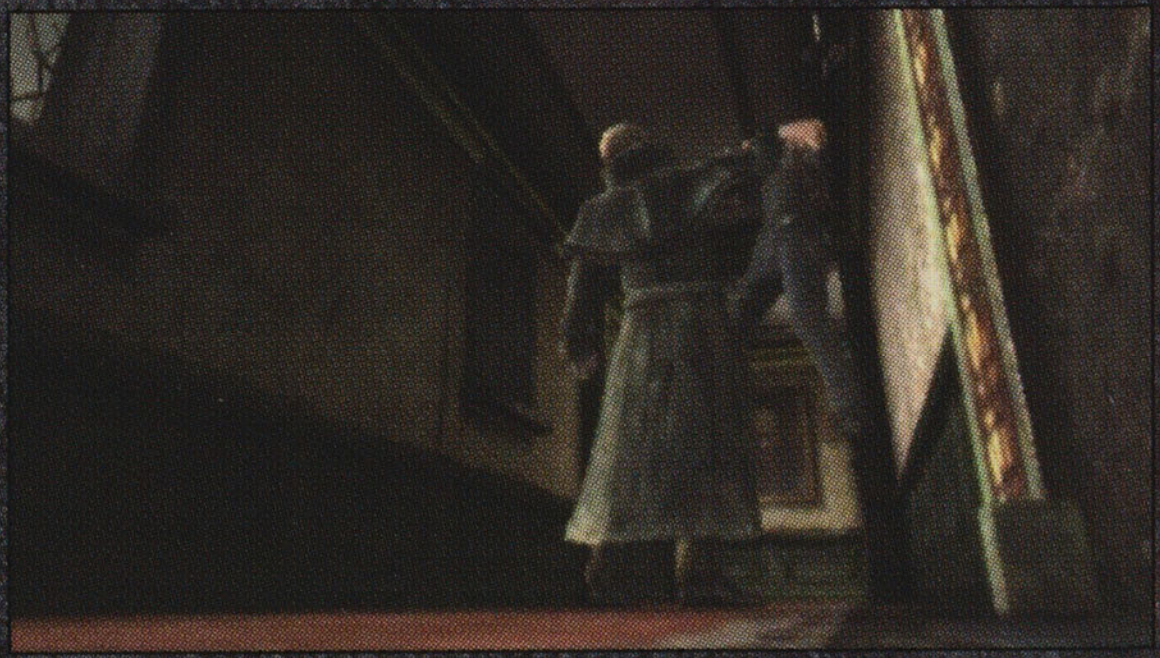
「第3の組織」とは、敵対する勢力なのだろう。部屋を見渡し、壁に掛かった肖像画に目を留める。そこに描かれている顔に見覚えがあった。

フードを被った老人、夢に出てきた魔法使い……。

屋敷内に誰かがいるようだ。レオンはオートマチックを抜き、廊下へ出た。突然、背後から首筋に向かって何者かが襲い掛かり、レオンは銃を落とす。喉を万力のように絞め上げるのは、コートを着た大男の腕。
レオンの意識が遠のく中、視界が赤い色に染まっていく……。
「同じ血が混じったようだ」
そう言うとメンデスは、不意にレオンの体を床に叩き付けて、吐き捨てるように告げる。
「だが、おまえは所詮よそ者。目障りになるような事があれば、容赦はしない……」

レオンが顔を上げると、メンデスは寝室へ姿を消していた。
その時、通信が入る。ハニガンはこの村の宗教団体について調べていた。アシュリーをさらった黒装束の集団のことだ。
「ロス・イルミナドスと呼ばれているわ」
レオンはハニガンに、村長のメンデスと遭遇した件を報告する。
「しかしあの男……。なぜオレを殺さずに逃がした？　それに『同じ血が混じった』とか……。訳のわからん事も言っていたな」

通信を終えたレオンは屋敷の階下へ向かおうとするが、ふと立ち止まった。メンデスはまだ寝室にいる。教会へ向かうのは急務だが、メンデスにアシュリーの居場所を聞いたほうが早い。今度はこちらが不意をつく番だ。レオンは踵を返し、寝室の扉を開ける。
メンデスが目前にいた。大男は猫のようにしなやかに駆け寄り、レオンを床に叩き付けると、胸を右足で踏み付けた。じわじわと体重が加わり、肋骨が悲鳴を上げる。
銃声が聞こえ、ガラスの割れる音がしたのはその時だ。メンデスは窓を振り返ると、レオンから足を離す。窓の外にいたのは、銃をかまえる赤いドレスを着た女。メンデスが駆け出し、そのまま窓を破って飛び出すと、女も姿を消していた。
室内に静寂が訪れる。あの女……。レオンの脳裏に懐かしい記憶が蘇るが、今は感傷に浸る時間などなかった。



4

目指す教会が見つかったが、静まり返り、扉は固く閉ざされている。カギがなければ中に入れないようだ。とはいえ、やみくもに押し入ってアシュリーを危険にさらすわけにはいかない。レオンは、目的を村の探索とカギの発見に変更した。

うっすらと霧がかかった湖に、村人2人を乗せたボートが漂う。彼らは若い警官を担ぎ上げると湖へ投げ込んだ。急に警官の遺体を揺らす波が荒くなり、水中から岩の塊のような、巨大な生物の頭が飛び出した。警官の遺体を飲み込んだ、形状はサンショウウオに似た巨大生物は、うねりながら水中へ潜っていく。あいつの餌にするために投げ捨てたのだ。

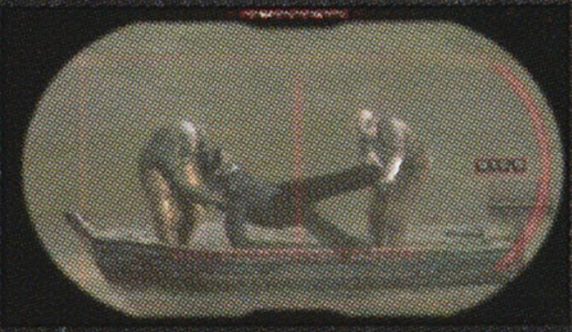
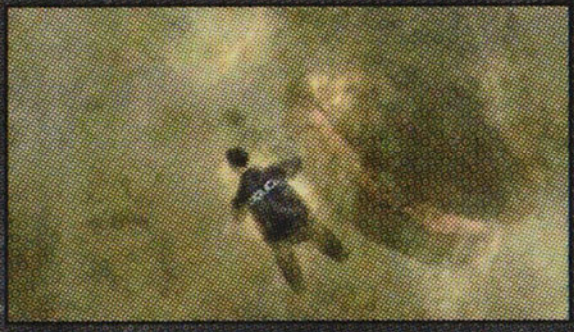
レオンは、湖畔に止められたボートに乗り込んだ。
湖を覆う霧の先に、そいつは現れた。巨大生物が水中から飛び出し、ボートごと飲み込もうとしてきた。レオンはモリを何度も投げ付け、激闘の末、巨大生物を湖底に沈めた。
岸へ辿り着いたレオンは、目前に建つ小屋へ向かった。不意に胸に痛みが走り、激しく咳き込む。口を覆った掌には、血が付いていた。急に体が重くなり、視界が闇に覆われ、額に冷たい汗が流れる。小屋の扉を開けると同時に、レオンは力なく床に倒れ込んだ。

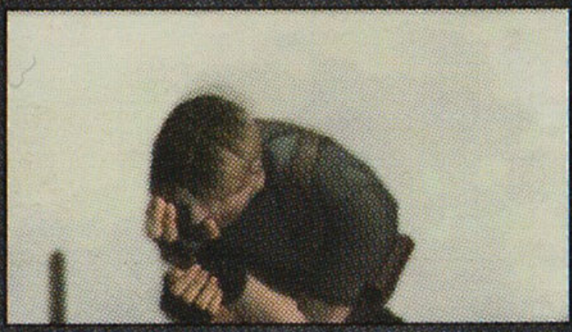
体の中でぶちぶちと何かがうごめく。胸や腹、両足の中に何かがいるように感じる。痛みよりも違和感に恐怖し、レオンは両腕に目を落とす。腕の中に無数の血管が、赤や青の線を描いて浮き出ていた。次第に太さを増す線は、皮膚を押し上げ、そして……。

悲鳴が聞こえる。体を起こしたレオンは、それが自分の声だと気付いた。小屋の中で意識を失っていたようだ。
本部のハニガンと連絡を取り、状況を報告した。彼女の話によれば、レオンは6時間も意識を失っていたことになる。
「すまない。急にめまいがして、今まで気を失っていたんだ」
「……さっき『血が混じった』とか言ってたことと何か関係が?」
ハニガンの指摘に不気味なものを覚えたが、今はアシュリー救出を急がねばならない。通信を終えたレオンは、小屋の中にある紙片に気付く。それは何者かが、レオンに向けて書き残した手紙だった。アシュリーが捕らわれている教会のカギの在処が書かれ、次の文が添えられていた。

ところで、あなたの身体に起きている異変だけど、残念ながら、もう私の手には負えないわね。

レオンは自分の手を見つめた。手紙を持つ掌は、自分の吐いた血で汚れていた。



第二章　同じ血への恐怖

1

　簡素な礼拝堂だ。2階の外周部には細い通路が設けられているが、その途中を2枚の鉄格子が塞いでいた。鉄格子を開ける仕掛けを作動させ、レオンは扉を開いた。

　物置と思われる狭い室内に、金髪の少女が立っていた。アシュリーに間違いない。声をかけると、彼女はいきなり手にした木片を投げ付けてきた。

「イヤー、来ないで!」

　レオンは自分が銃を手にしていることに気付いた。不気味な邪教集団に地球の反対側まで連れてこられた彼女が、銃を持った怪しい男におびえるのは当然だった。レオンは銃をホルスターへしまいながら語りかける。

「俺はレオン、大統領の命で君を助けに来た」

「えっ？　パパが……」

　子供のように目を輝かせてレオンを見上げた。レオンは通信機を取り出し、本部のハニガンにアシュリーの身柄確保を報告した。

「おめでとう、レオン。すぐに救出のヘリを向かわせるわ」

　救助ヘリによる回収ポイントが、村の農場から北東に設けられているという。

「とりあえず、ここから出よう」

　レオンはアシュリーを促し、部屋を出て礼拝堂へ戻った。ハシゴを下りて出口へ向かう途中、背後から声が響いた。

「その娘を返してもらおうか」

　声の主は紫色のフードを被り、魔法使いのような杖を掲げた男だった。

2

「私は、オズムンド・サドラー。この教団のカリスマ」

　村の随所で見かけた肖像画。悪夢の中で見た魔法使い。あれはまさに、目の前に立つサドラーだった。

「目的は何だ?」

「我が力を世に示す為だ。アメリカは宣伝するのにちょうどいい。その大統領の娘を拉致し、我らの力を与え……そして返す」

　レオンの背後でアシュリーが、はっとしてつぶやく。

「レオン、首に何かされたわ」

「アシュリーに何をした?」

「その娘には種を植えつけた。父親のもとに帰ったら、さぞかし世間はにぎわうだろう」

　サドラーは声のトーンを落として話を続ける。

「君にも同じ種を植えたことを忘れるところだった」

　レオンは思い返した。あの悪夢。首を刺す痛み。

「君たちに植えたのは特別でね。卵がふ化すれば、君たちは私の思うがままに行動する」

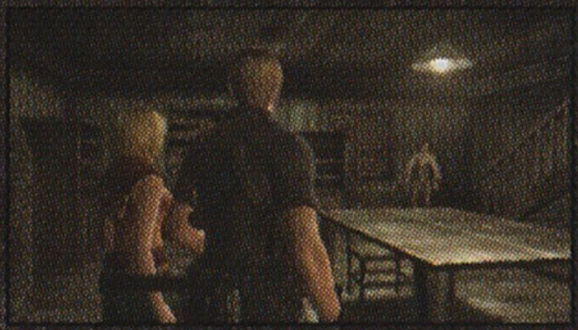
　レオンは頭の中で否定しながら、この村人たちの狂気に満ちた行動を思い返していた。

　その時、フードを被り、炎が灯るボウガンの矢をかまえた男たちが現れた。レオンはアシュリーの手を取ると、ステンドグラスへ駆け出し、突

き破って外へと飛び出した。
　教会の外は雨が降っていた。濡れた地面に倒れ込んだアシュリーが、レオンを見上げながら問いかけてきた。
「レオン、私たちどうなるの?」
　レオンは自分自身にも言い聞かせるように答えた。
「心配するな。助かる道は必ずある」

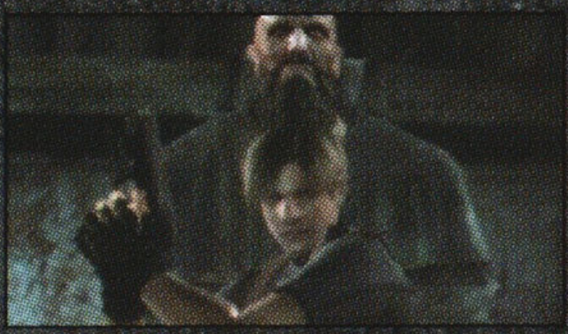
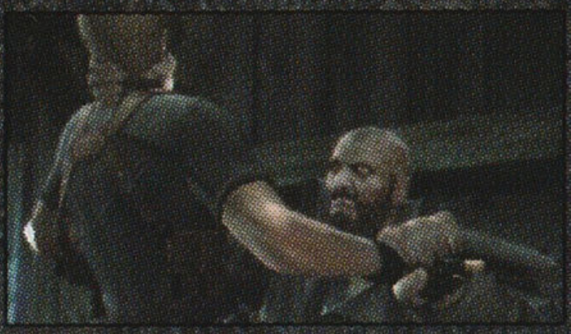
3

　教会から東へ向かう途中も、村人からの襲撃は続いた。レオンは先を急ぎたいが、アシュリーを連れている状況では困難だ。ただ、彼女が想像していたよりもタフだったことは、救いでもあった。
　悪い知らせは、こういう時に入ってくるものだ。
「あなた達の救助に向かったヘリが、何者かの攻撃によって撃墜されたの」
「……なけるぜ」
「今、次のヘリを準備しているわ。その間、当初のヘリ降下ポイントへ向かって」
　ヘリが墜とされたこと以上に、こちらの行動に先手を打たれているようで気に入らなかった。政府か情報部に教団の内通者がいるのかもしれない。



　吊り橋を渡った先で、前方から村人の集団が現れた。後方からも、たいまつを手にした村人たちが追いかけてくる。目前に建つ小屋へと逃げ込んだ2人に声を掛ける者がいた。
「また会ったな」
　ルイスだ。彼は扉のカンヌキをレオンへ投げて渡すと、アシュリーを見ながら話し続ける。
「その娘か?　大統領の娘にしちゃあオッパイがでかいな」
「失礼ね、それとは関係ないでしょ。あなた、誰?」
「そちらこそ失礼じゃありませんか、お嬢様。名を聞く時は先ずご自分から」
　ラテンの血なのか、非常時においても会話を楽しんでいる。
「私はアシュリー・グラハム。大統領の娘よ」
　ルイスがアシュリーの目を見つめているのに気が付いたレオンは、さりげなく伝えた。
「大丈夫だ、安心しろ」
　ルイスは知っているのだろう。アシュリーとレオンの体内に入れられたモノを。だからこそ、彼もまたロス・イルミナドス教団から追われる身なのだ。
「まあいい。奴らのようになる前には、兆候がある……」
「見て」
　アシュリーの声がルイスの言葉を遮った。たいまつの炎が窓の外に揺らめいている。小屋を包囲した村人たちが行動を開始しようとしていた。
「アシュリー、2階に隠れてろ」
　村人の侵入に備えるレオンの横にルイスが並ぶ。その手には年代物の軍用拳銃が握られていた。
「ゲームの始まりだ」
　村人たちが扉を叩き始め、窓ガラスを割り、なだれ込む。外壁にハシゴを叩き付ける音がした。複数の侵入路から波状攻撃を仕掛けてくる。レオンとルイスで応戦するが、ルイスもなかなかの腕前だ。

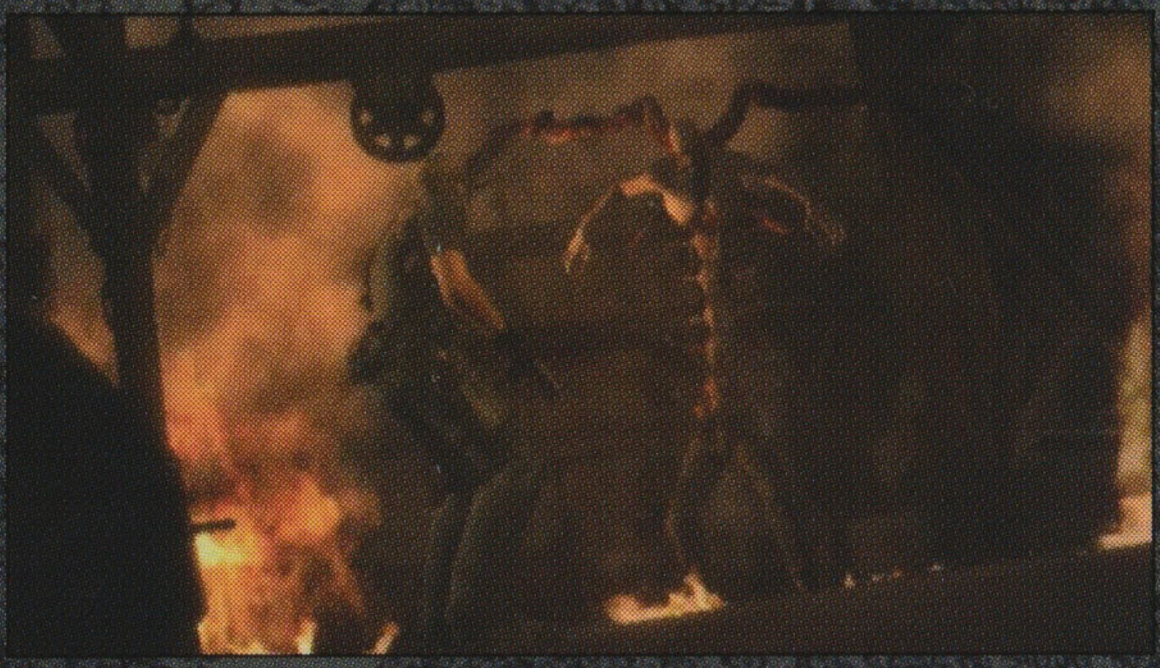
鐘の音が聞こえた。いや、雷鳴か？ 2階の窓から外を窺うと、たいまつの炎がゆっくりと遠ざかっていくのが見えた。銃を下ろしたレオンに、ルイスが尋ねる。
「どうするんだ、これから」
「村から出る吊り橋は奴らに落とされた。前へ進むしかないな」
ルイスはレオンの目を見つめていたが、不意に扉へ向き直ると、歩きながら呑気な調子で言った。
「忘れ物を取りに行ってくる。先に行っててくれ」
レオンが後を追い外へ出ると、ルイスの姿は消えていた。あたりには夜霧が立ち込めていた。

4

ヘリの降下ポイントに向かうレオンたちの前に、怪しげな小屋が現れた。アシュリーを外で待機させ、鉄製の扉を開けて侵入する。どうやら家畜を処分する施設のようだ。内部には人の気配はなく、農具や飼料、木箱やドラム缶などが雑然と置かれていた。
何度となく感じた殺気が、背後から近づいてきた。振り向くと、太い腕がレオンの喉元をつかむ。腕の主はコートを着た大男、ビトレス・メンデス。
メンデスはレオンを空中へ投げ飛ばした。小屋の梁に背中からぶつかり、そのまま床へ叩き付けられた。ゆっくりとレオンへ歩み寄り、右手を振り上げた。その一撃をかわしたレオンが脇に置かれたドラム缶を蹴り倒すと、缶から流れ出るガソリンが床を伝い、メンデスの足元を濡らした。
「終わりだ！」
レオンが銃を撃つ。メンデスの足元が炎に包まれた。火の手は勢いを増し、コートを焦がし、倒れたドラム缶が轟音を上げて爆発する。

……燃え盛る炎の中で、メンデスの体は不気味な変化を見せた。腹からちぎれた上半身を異様に伸びた脊髄が支えている。サソリの尾のような触手が2本、背中を突き破って現れる。体内の何かが、本性を現したのだ。
離れた位置から脊髄へ向けて銃を連射するレオン。メンデスの脊髄は砕け、遂にちぎれ、上下に分かれた体は炎の中へ崩れ落ちる。
しかし、終わりではなかった。黒い影が炎から跳ね上がったのだ。それはメンデスの上半身だった。背中の触手で梁にぶら下がり、生気のない目でレオンを見据えている。なんという生命力だ。レオンに飛び掛かるメンデスは、触手を突き出す。切っ先が脇腹をかすめる痛みを感じながら、レオンは床を転がり連射した。
メンデスは断末魔の雄叫びを上げると、今度こそ動かなくなった。人間ではなくなった姿を見て、レオンはあの言葉を思い出していた。
「同じ血が混じる」
その言葉が脳裏から離れなかった。



第三章　小さな怪人ラモン・サラザール

1

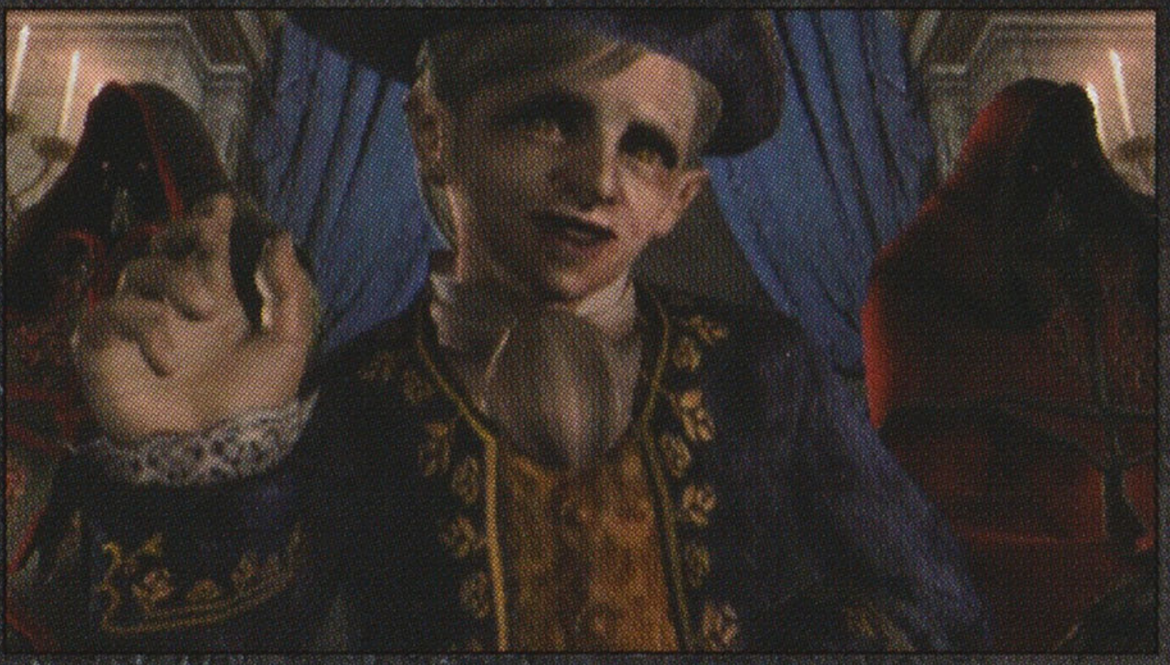
村人たちの追跡は執拗を極め、たいまつの炎が後方に迫っている。レオンとアシュリーは城の正門を目指していた。
「レオン！」
振り返ると、そこにはルイスの姿があった。
「お前らに渡すものがあって……」
ポケットを探る手が慌ただしく動いた後、ルイスはひとりで悪態をつく。

「くそっ！　奴らから逃げる時に落としたんだ」
「何を?」
「お前らの発作を抑える薬だ」
この村人たちを侵すものの正体について、ルイスは確実に知っているようだ。
「お前ら、寄生されてるだろ?　吐血したか?」
単刀直入に問いかけるルイスの口調には、以前のようなふざけた様子はない。レオンは否定しなかった。アシュリーにも同じ質問をする。

「……したわ」
「もうふ化しちまったか。急がないと」
教会でサドラーが、種を植え付けたと言っていたことを、レオンは思い出した。
「ルイス、どういうことだ……」
「俺は薬を取りに戻る」
「何故……」
レオンの問いを遮るように、ルイスは答えた。
「良心の呵責さ」

2

城の正門から入ったレオンたちを迎えたのは、かん高い笑い声だった。声の主は2階のテラスからこちらを見下ろしている。まるで中世の貴族のような服装の小さな男。その左右には衛兵のようにフードを被った2人の男を従えている。
「誰だ?」
「私はラモン・サラザール。このすばらしい城の八代目の主にして、偉大なパワーを、教祖サドラー様より授かりし者です」
よく見ると、サラザールと名乗る男はシワだらけの顔をしている。子供のような老人。不気味な古城の主にふさわしい男だった。



「あなたがた同胞をお待ちしておりました」
「一緒にするな」
同胞と呼ばれたことが、レオンは不快だった。レオンとアシュリーの体内に無理やり寄生させた何かが、サラザールとの絆なのだろう。
「おやおや、威勢がいいですね」
サラザールは心外だという口調だが、明らかにレオンたちを挑発している。
「ひどい目に合う前に金銭交渉の人質になりなさい。もっとも、大統領の娘だけで結構です。スコット君はお金になりません。死んでも大丈夫です」

サラザールは笑い声を上げ、両脇に従えたフードの男たちとともに姿を消した。それを苦々しく見送るレオンの横で、アシュリーが声を上げる。
「あいつらみたいになるのは絶対イヤ！」
アシュリーの目には涙が浮かんでいた。それを見たレオンは、彼女に対して過ぎた期待をしていた自分を恥じた。見た目はタフに振舞っているとはいえ、得体の知れない恐怖と戦ってきたのだ。それを抑えるのに、どれだけ無理をしていたのか。
「そうだな。治療法を探そう」
レオンは優しい声で答えた。

3

古城の中は迷路のようだ。入り組んだ通路と部屋には武装した教団の信者たちが潜んでいるため、前進するのも一苦労だ。それに加え、城を抜ける正しい道を進んでいるのか心もとない状況だった。
通路を進む途中、いきなりアシュリーが咳き込む。顔を覆った指の隙間から血が流れている。
「大丈夫か」
声をかけるレオンを振り切り、アシュリーはひとり駆け出した。自身を蝕む恐怖に、遂に耐え切れなくなったのだ。
「放っといてよ！」
通路の奥へ駆けていくアシュリーの足元から、いきなり無数の槍が突き出される。後を追うレオンは、格子のように並ぶ槍に阻まれて近づけなかった。
次々と突き出る槍。アシュリーを通路の突き当たりまで追いやり、壁に背を付いた体が拘束具に捕らえられ、そのまま壁ごと反転して姿を消した。壁の向こうから彼女の叫び声が聞こえる。レオンは叫んだ。
「すぐに助けに行くから待ってろ」

無線機が鳴った。レオンは急いで応答する。
通信機の向こうから、かん高い笑い声が聞こえる。
「サラザール！……なぜお前が？」
「この回線、我々がジャックさせて頂きました。余計な事をされては困りますからね」
「アシュリーをどこへやった!?」
「彼女はワナに掛かったみたいですね。こちらで探し出しますから、心配しないでください」
なんとしてもアシュリーを救い出さなければならない。サラザールの相手は、その後だ。

4

アシュリーが消えた通路の反対側へは、幾重にも施された古城の仕掛けを解除する必要があった。散発的に現れる教団の信者たちの襲撃を退けながら、レオンは先へ進む手掛かりを探した。その過程で、興味深い資料を見つけた。ひとつは寄生体の生物実験に関するメモだ。
ロス・イルミナドス教団は、寄生体を「プラーガ」、寄生された宿主を「ガナード」と呼んでいた。教団はプラーガを城の地下で発掘後、この寄生体の生態についての研究を進めているようだった。また、この

5

　レオンは古城の中心部に位置する大広間に侵入した。アシュリーとはぐれた通路から、ちょうど反対側だ。

「レオン」

　振り返ると、ルイス・セラが立っていた。彼は笑顔を浮かべながら両腕を広げる。左手にはサンプルケースが握られていた。

　その瞬間、肉をえぐるような不快な音が響き、ルイスの手からサンプルケースが落ちる。胸からは、頭ほどの大きさの鋭利な触手が突き出していた。背後からルイスを貫いた触手は、鮮血を噴き出すルイスの体を掲げるように宙へ持ち上げた。

「ルイス！」

　触手が大きく上下に振られ、その先端からルイスの体が引き抜かれた。縮み始めた触手の持ち主は、サドラー。触手は彼の体の一部だったのだ。

　サドラーは床に落ちたサンプルを拾い上げると、満足そうに笑みを浮かべた。

「サンプルさえ手に入れば用はない」

「サドラー！」

「おまえ達の処分はサラザールに任せてある」

　サドラーはあざけるようにレオンに一瞥を向けると、そのまま大広間の外へ出ていった。レオンは血溜まりの中に横たわるルイスへ駆け寄り、言葉をかける。

「しっかりしろ」

　ルイスは、咳き込みながら声を絞り出す。

「俺はサドラーに雇われていた研究員だ」

　プラーガと呼ばれる寄生体について、彼が詳しいことはレオンも気付いていた。

「サドラーに逆らったばかりに……」

「しゃべるな」

　傷口を止血しようとするレオンの手をルイスは払いのけ、右手を掲げてカプセル錠剤の入った小瓶を見せた。

「これを……一時的にやつらの成長を抑える薬だ」

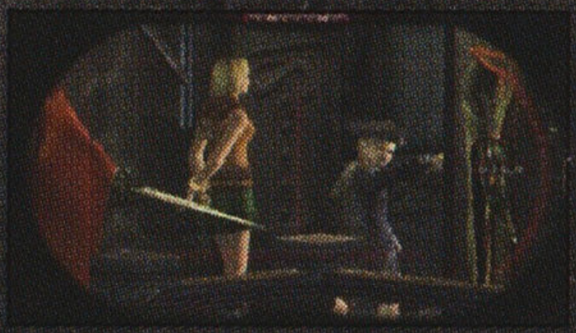
　ルイスは瞳孔が開きかけた目を宙に向け、レオンへ最後の望みを訴えた。

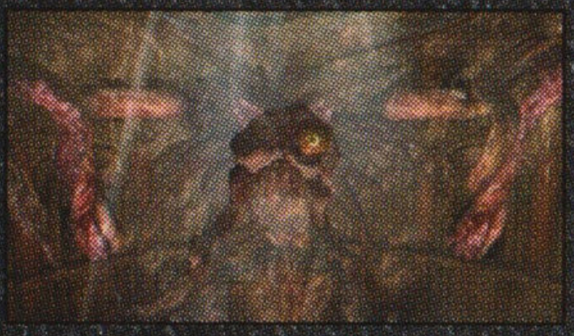
「サンプルが……やつの手に渡った。取り返してくれ……」

6

レオンは拘束具で捕らわれたアシュリーをいったん救い出したものの、宙を飛ぶ人間ほどの羽虫にアシュリーを連れ去られてしまった。古城から外へ出ると、遠方に建つ巨大な塔が見えた。双眼鏡で様子を窺うと、アシュリーが塔の中へ連行されていき、彼女の前にはサラザールの姿があった。

塔の最上部に設けられた祭壇に、サラザールは立っていた。彼は黒いフードの護衛を従え、祭壇の先にあるものを仰ぎ見ていた。アシュリーを追ってきたレオンに気付いたサラザールは、いたずらがばれた子供のような笑みを浮かべる。
「残念。洗礼は終わり、私の仲間と島へ向かいました」
　祭壇の奥の壁には巨大な花が飾られている。いや、その花は飾り物ではなく、壁に根を張っていた。花びらに見えた部分からは無数の触手が伸び、ゆらゆらと動いている。
「あなたの強い意志に対して、私も敬意を払って上げましょう」
　サラザールと彼の護衛の体に無数の触手が巻き付き、花びらの中へ運んでいく。2人を飲み込むと花びらを閉じ、不気味に脈動した。その直後、開かれた花びらから巨大な触手が飛び出す。その先にはグロテスクな顔が備わり、異様に膨れ上がった赤い色の左目でレオンを見下ろした。触手の根元の花びらには、花に同化したサラザールの上半身が見える。
「また化け物か」
　塔内部が激しく揺れ、さらに2本の触手が外壁を貫いて姿を現す。サラザールたちを取り込んだこの化け物は、まるで塔に寄生しているかのようだった。
「少々飽きたが付合うか」
　レオンは触手をかいくぐりながら攻防を繰り返し、サラザールの頭部へ狙いを付け、引き金を絞った。
　サラザールの額を弾丸が貫くと、彼の上体は糸が切れた操り人形のように倒れていった。壁に根付いた化け物の本体と、そこから伸びる巨大な触手は瞬く間に風化し、崩れていく。
　信仰の対象とともに死ねるのなら、サラザールも本望だろう。レオンは立ち上がり、その場を後にした。





第四章　旧友との対決

1

　海上を覆っていた霧の向こうにうっすらと映っていた島影が、近づくにつれはっきりと見えてきた。もうじき夜が明ける。レオンはモーターボートの助手席から、建ち並ぶ工業施設を眺めていた。
　ボートを操縦しているのは、エイダ・ウォンだった。サラザールを倒したレオンを待っていたかのように、船着き場に現れた。彼女がどんな目的でこの地へ来たのか、なぜレオンを助けるのか。数多くの質問を口に出せないまま、レオンはエイダの横顔を見つめていた。
「私は用があるから」
　レオンの視線に気付いたエイダは、急にハンドルを回し、ボートを崖下に着けた。太もものホルスターから銃を抜きワイヤーを射出し、島の断崖を上っていく。
「またね、レオン」
　慌ててハンドルを握るレオンが蛇行するボートを修正する間に、エイダの姿は霧の中に消えていた。
「なけるぜ」

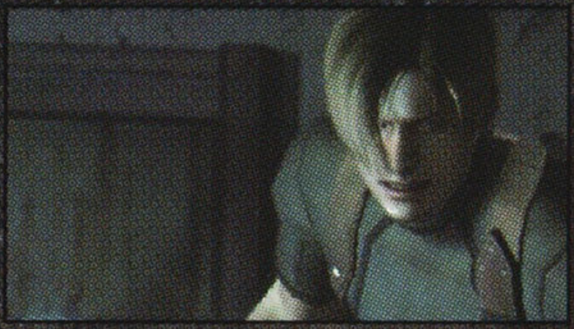
　島に上陸したレオンは、ここが何かの採掘施設らしいことを知る。入り組んだ通路を進む途中、労働者たちがレオンに襲い掛かった。斧やボウガン、ダイナマイトを手にした彼らは、やはりプラーガに寄生されていた。体内に成長したプラーガを持つ者は、たとえ頭部を失っても動きを止めない。
　施設内で管制室を発見したレオンは、監視カメラのモニターでアシュリーの監禁場所を特定。ひたすら前進し、研究室のような部屋を抜け、カードキーを見つけ部屋へ入った
「レオン」
　部屋の片隅で座っていたアシュリーは、レオンの姿を見ると笑顔を見せながら立ち上がる。
「大丈夫か」
　アシュリーは取り乱すこともなく、黙ってうなずいた。どうやら、まだ時間はあるようだ。
「さあ、行くぞ!」

2

　二人三脚の逃避行が再開した。岩盤掘削用の車両に襲われ、ゴミ集積場へダイビングするなど、危険極まりない場面も多々あったが、レオンの指示に従うアシュリーの度胸は、なかなかのもの。さすがは大統領の娘だ。たまに悪態をつくものの、従うしかない境遇にいることを理解している。
　地下通路の逃げ込んだ部屋でレオンたちを待っていたのは、オズムンド・サドラーだった。彼は2人を見つめると、嬉しそうに言った。
「おまえたちの中にあるモノを、強く感じるぞ」
　その言葉が体内のプラーガを指すことに、レオンは怒りに駆られる。サドラーはレオンへ向けて左手をかざした。胸の奥に耐えがたい激痛が走り、床に崩れ落ち、レオンはもだえることしかできなかった。
「抵抗してもムダだ。子は親には逆らえないのだよ」
　サドラーの左手がアシュリーへ向けられた。
「さあ、こっちへ来い。アシュリー」

無表情でサドラーを見つめる彼女の目は、村人たちと同じような赤い色の輝きを放ち、導かれるままサドラーの前へ進んでいった。
レオンの苦痛が和らいだ時、すでに2人の姿はなかった。震える足で立ち上がりながら、自分たちの症状を意識せざるをえなかった。
「同化が始まっているのか……」

連れ去られたアシュリーの後を追って、レオンは地下に広がる施設内を進んだ。ここは教団の施設というより、大規模な研究施設のように見える。
背後に気配を感じて振り返ったが、誰もいなかった。しかし頭上から迫る殺気を感じ、後方へ跳ぶと、体重を乗せたナイフが床に突き立てられた。ナイフを手にした男はゆっくりと顔を上げた。
「久しぶりだな、レオン」
見覚えのある男だった。
「クラウザー……」
ジャック・クラウザー。かつて、レオンとともに死線を潜り抜けた陸軍兵士。だが、彼は……。レオンの考えを見透かすように、
「2年前、事故で死んだはず……と言いたいのか」
クラウザーはナイフを手にしたまま、一定の間合いを取りながらレオンの周りを歩いている。獲物を品定めする野犬のように。
「お前か、アシュリーを連れ去ったのは?」
レオンの問いかけに、クラウザーは淡々と答えた。
「なるほど。やはりオレとお前はコインの裏表と言うわけだ。察しがイイ」
いきなりクラウザーがナイフを振るう。レオンは刃先をかわすと、相手の顔へ向けてナイフを突き出す。クラウザーは上体を反らしてかわし、間合いを取った。
この男は合衆国陸軍が鍛え上げた白兵戦のプロだ。容易な相手ではない。
「目的は何だ」
「サドラーが育てたサンプルが欲しいだけだ」
「アシュリーは関係ないだろ」
「サドラーにアメリカ人であるオレを信用させる為だ」
突きと払いの応酬が続く。組み合う格好になり、クラウザーはレオンの腹を蹴り付けた。床に蹴り飛ばされたレオンはナイフを落としてしまう。クラウザーは、倒れたレオンに歩み寄りながらつぶやいた。
「これもアンブレラの為」
「アンブレラ……?」
「お前にこの先は必要ない。死ね!」
クラウザーが頭上に覆い被さり、ナイフを振り下ろす。レオンはその腕を受け止めるが、体重の乗ったナイフの切っ先は喉元へジリジリと迫っていた。
銃声と同時に、クラウザーのナイフが弾け飛び、レオンは彼の腹を蹴って立ち上がる。銃声の方向を見たクラウザーは抑揚のない口調で言った。
「やはり、どこかのメス犬だったか」
銃をかまえるエイダを黙って見返すクラウザーは、レオンへ向けて警告した。
「もがいたところで、この島から生きては出られん」
クラウザーが姿を消すと、エイダはレオンに歩み寄った。
「知り合いだったようね」
クラウザーもまたエイダを知っている様子だった。レオンは問い詰めた。



「そろそろ目的を教えてくれてもいいんじゃないか?」
「またね」
素っ気なく返して、エイダも去っていった。

3

地中を掘って作られた通路の途中で、レオンはクラウザーが仲間へ宛てたメモを発見する。彼がロス・イルミナドス教団に近づいた目的はプラーガのサンプルを奪取することだった。クラウザーはウェスカーの指示に従ってエイダと連携していたが、今や足並みが乱れているようだ。

地下通路から地上へ出ると、そこは古代都市の遺跡だった。ここで忌まわしき寄生体と対面したのだろうか。

「あの女と関係してるとはな……」

クラウザーだった。彼は遺跡の高台からレオンを見下ろしていた。

「アシュリーをどこへやった」

「知りたいか。あのゲートの先だ」

遺跡の奥にある石の扉を顎で示しながら、扉を開く3つのレリーフの在処をレオンに語った。2つのレリーフはこの遺跡内に置かれているという。

「もう1つがお前ってわけか?」

レオンにはわかっていた。クラウザーはレオンと決着をつけたいのだ。おそらくレオン抹殺命令を受けており、彼の腕ならレオンの不意を討つこともできただろう。しかし彼は、わざわざレオンが否応なしに戦う状況を整えた。どちらの実力が上なのか、それを証明したいのだ。

クラウザーがマシンガンをかまえた。レオンは駆け出し、銃弾をかいくぐりながら2つのレリーフを回収する。レオンは問いかけた。

「アンブレラを復活させてどうする?」

「狂った世界のパワーバランスを変えるのだ」

本気で言っているのか?　狂っているのは、ウィルスや寄生体を振り回す人間のほうではないのか。レオンは言った。

「狂った人間にバランスなどとれない」

「まともな人間に今の世の舵取りはムリだ」

そう答えたクラウザーが天に掲げた左腕は、いびつな形に膨れ上がった。5本の指がカギ爪に変わり、腕自体がブレードのように変形する。彼もまた、体内にプラーガを寄生させていたのだ。

「これが、寄生体の力だ!」

クラウザーの目は、赤い狂気の光を放っていた。

「行くぞ、レオン」

クラウザーは離れた距離から瞬時に近寄り、変形した左腕の刃を突き出す。かろうじて突きを回避したレオンは反撃に転じたが、クラウザーは後方へ宙返りをしながら銃弾を回避した。常軌を逸した身体能力だ。

これは、まさに生死を賭した長い戦いだった。

左腕のブレードを盾にして銃弾を跳ね返すと、クラウザーはゆっくりと歩み寄る。レオンを足払いで転倒させて、ブレードを突き立てようとした。とっさに回避しながら、レオンはナイフで相手の脚を切り付けた。そして、膝を付くクラウザーの頭部に銃口を向け、一瞬の躊躇もなくトリガーを引いた。

雄叫びを上げながら直立したクラウザーは、地面に倒れて動かなくなった。広がる血溜まりの中で、彼の左腕は音もなく崩れていった。

第五章　サドラーの最期

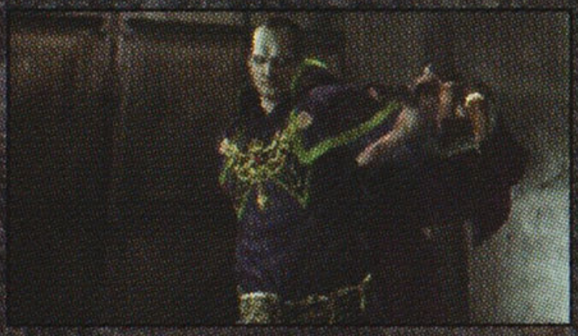
1

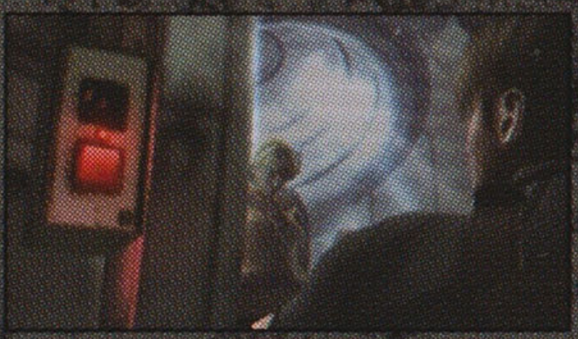
遺跡を抜けたレオンは、大勢のガナードが待ちかまえる採掘施設に辿り着く。バリケードやサーチライトで防備を固め、ボウガンやロケットランチャーで武装したガナードや、ガトリング砲座まで配置されている。砦と化した施設へは、近づくのも容易ではなかった。
その時、上空からヘリのローター音が聞こえてきた。待ち望んだ米軍のヘリコプターだ。
「やっと来たか」
「遅くなってすまん、援護する」
パイロットはそう答えると、砦の脇にある給油タンクに向けてバルカン砲を発射。給油タンクが爆発し、ガナードたちは炎に包まれた。
「スゴイので来たな」
胸のすくような派手な援護に、レオンは無線で正直な感想を伝えると、パイロットは陽気な声で応えた。
「オレはマイク。よろしくな」
ガトリング砲座がレオンを足止めすると、上空からマイクがバルカンとロケット砲で砲座を吹き飛ばす。援護に助けられながら砦を抜け、奥にある階段を上った。

崖の上の開けた場所に駆け込むと、武装したガナードたちが現れた。レオンは包囲される。
「伏せろ！」
マイクからの無線の指示に、レオンは即座に反応した。彼が柱の陰へ飛び込むと、上昇したヘリがバルカンで掃射を開始。逃げ惑うガナードたちに砲弾の雨が降り注ぎ、駆逐された。ホバリングするヘリを見上げ無線で謝意を伝えると、明るい声が返ってきた。
「帰ったら一杯やるか。いい店があるんだ」
しかし突然、レオンの目の前でヘリが閃光に包まれる。爆発した機体は煙を噴きながら、崖下へ落下していった。
「マイク！」
振り返るレオンの目に、崖上に建つ施設の屋上でロケットランチャーをかまえるガナードの姿が。その横には、サドラーが立っていた。
「サドラー、お前だけは許さん」

2

　島の奥に建つ施設に潜入したレオンは、遂にアシュリーを発見した。彼女は巨大なカプセル状の装置に入れられていた。駆け寄ろうとするレオンに、背後からサドラーの声が響く。
「もう少しで偉大な力が手に入るというのに。死にたいようだな」
「アシュリーは返してもらう」
「貴様にはムリだ」
　サドラーは地を滑るように接近し、右の掌底でレオンの胸を突いた。身動きひとつできず、レオンは後方のカプセルに激突。胸部の激痛で咳き込むレオンへ歩み寄りながら、サドラーは笑みを浮かべていた。彼はアシュリーをさらった時と同じく、左手をレオンへ向けてかざしている。
　けたたましい銃の連射音が、サドラーの歩みを止めた。彼が振り返った視線の先に、赤いドレスの女が立っていた。エイダはマシンピストルを連射しながら叫んだ。
「レオン、今よ」
　エイダが牽制する間に、レオンはカプセルからアシュリーを助け出す。
　その時、サドラーは低い呻き声を上げた。声は次第に雄叫びに変わり、彼の体から肉と骨が軋む音が聞こえ始める。メンデスやクラウザーがそうであったように、サドラーもまた体内にプラーガを宿していたのだ。
「早く」
　エイダに促され、レオンはアシュリーを連れて出口へと向かった。背後では再びマシンピストルの連射音が聞こえ、続いて何かが爆発する音が響く。引き返したい思いを懸命に抑えながら、レオンはアシュリーとともに先を急いだ。





3

アシュリーを連れて逃げる途中で、レオンはプラーガに関する記録を見つけた。それによれば、プラーガが成体になる前なら特殊な放射線で、体内の寄生体のみを死滅させることが可能らしい。ただし、プラーガが成体になっていた場合、プラーガの除去は同化してしまった人間をも殺すことになる。

この記録の筆跡は、ルイス・セラのものだった。彼が遺した個人的な記録が、レオンたちの希望を繋いだ。

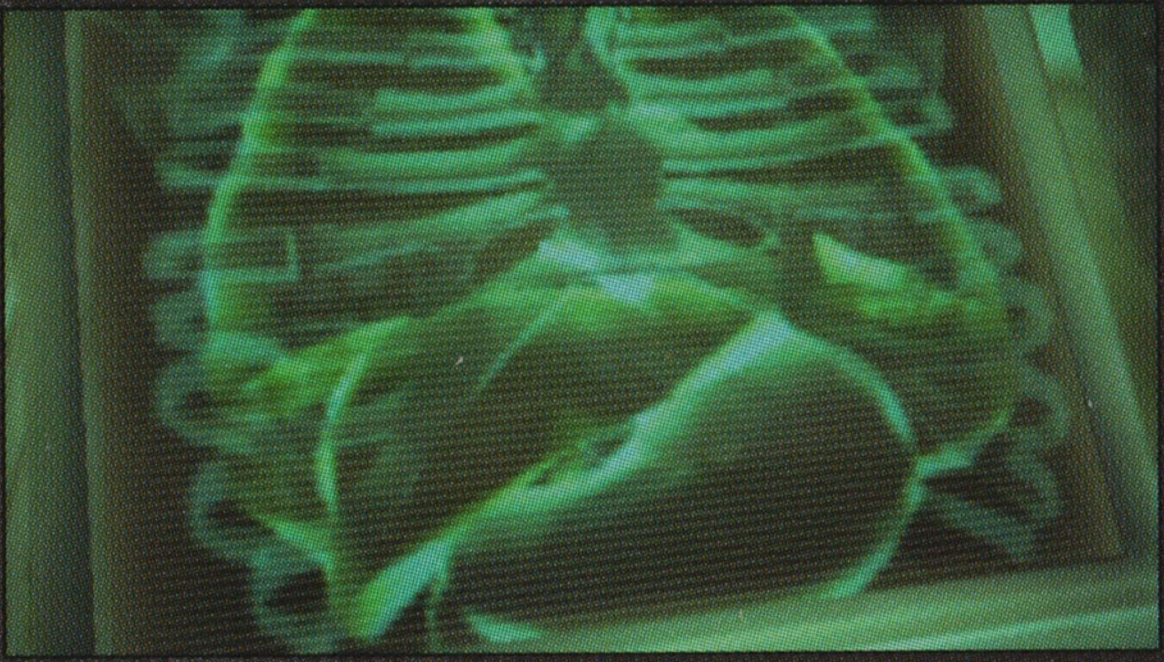
レオンとアシュリーが手術室を見つけたのも、まるでルイスの導きのようだった。長い間、使われていない様子だったが、自動化された放射線治療の装置が備わっていた。レオンは電源と操作パネルを確認すると、自ら手術台に上がってアシュリーに言った。

「まずオレが試す。そっちを頼む」

操作パネルにレントゲン映像が表示され、レオンの胸部のプラーガが映っていた。

「本当にいいの?」

「ああ」



アシュリーはパネルを操作する。放射線が体内のプラーガに照射され、レオンは呻き声を上げげた。全身の神経が焼かれる激痛が彼を襲う。しばらくして装置が停止すると、レントゲン映像には四散して消滅するプラーガの姿が映し出された。

続いてアシュリーが手術台に上がった。プラーガに寄生されたのは、レオンよりも彼女が先だったはずだ。ルイスが渡したカプセル錠剤が効いていることを祈りながら、レオンは照射を開始した。

苦痛の叫びを上げる彼女と同様に、体内のプラーガも身をよじらせている。レオンは操作パネルの映像を見守るしかない。照射が止まり、画面に「除去完了」と表示されたが、アシュリーは手術台の上で動かない。

「大丈夫か?」

ゆっくりと目を開いたアシュリーは、レオンに抱き付いた。無理やり負わされた重荷から解放され、これまでこらえていた感情が溢れ出たのだろう。

レオンは彼女の肩に手をかけながら言った。

「さあ、家に帰ろう」

4

アシュリーと屋外へ脱出したレオンは、周囲の様子を確認した。彼らの傍らには、鉄骨がむき出しの巨大な塔が建っている。誰かに見られているような張り詰めた空気を感じ、アシュリーを待機させて、レオンはリフトで鉄塔の上に出た。

鉄塔の頂上部には、縄で縛られたエイダが宙吊りにされていた。レオンたちを逃がそうとして、逆に捕まってしまったのだ。その傍らにはオズムンド・サドラーが立っていた。レオンの体内の寄生体を操ろうと、彼は右手をレオンに掲げながら歩み寄ってくる。

「無駄だ、サドラー」

レオンはナイフを投げ、エイダを拘束するロープを断ち切る。それを眺めながら、サドラーは笑い声を上げていた。

「何がおかしい」

「君も分かっているだろう。今やアメリカ人が勝つなどというのは、映画の中だけのクリシェなのだよ。ケネディ君。私は君が気に入った。褒美として君の幻想に終止符を打ってやろう」

おもむろに開かれた口から、巨大な眼球が現れる。3つの目でレオンを見つめるサドラーの体が激しく震え出し、変化が起こった。

首の皮が内側から裂かれ、頭を押し上げながら体内の寄生体が溢れ出る。首の横から4本の脚が現れ、さらに幾本もの触手も。サドラーの体は、巨大な節足動物のような怪物に変貌した。

怪物の触手がレオンを地面に叩き付け、鋭く尖った脚先で切り裂こうとする。大きな体のすべてが凶器であり、恐るべき力で攻撃してくるため、レオンは防戦を強いられた。弱点があるのか。必死に攻撃を避けた際に、怪物の脚の関節部に眼球が備わっていることに気付いた。

レオンが銃で脚部の眼球を撃ち抜くと、怪物は苦痛の叫びを上げる。レオンは距離を取りながら、すべての脚の眼球を破壊した。しかし怪物は何度倒れても立ち上がり、レオンへ向けて襲い掛かってくる。無尽蔵な生命力、これがサドラーの言っていた「力」なのか……。

「これを使って」

エイダの声が聞こえ、レオンの脇へ何かが落とされる。使い捨てのロケットランチャーだった。レオンはそれを拾い上げると、迫り来る怪物へ狙い撃つ。射出された弾頭が怪物の体に突き刺さり、閃光に包まれる。爆発は肉片を四散させると、怪物の体は煙を上げながら崩れ落ちた。

怪物の亡骸の傍らに、見覚えのあるガラス管が落ちていた。これがルイスの言っていた寄生体の「サンプル」だった。

「悪いけど、それは頂くわ」

振り返ると、彼女はレオンに銃を向けていた。なるほど、彼女の目当てはこれだったのか。サンプルを渡しながら、レオンは彼女に確認する。

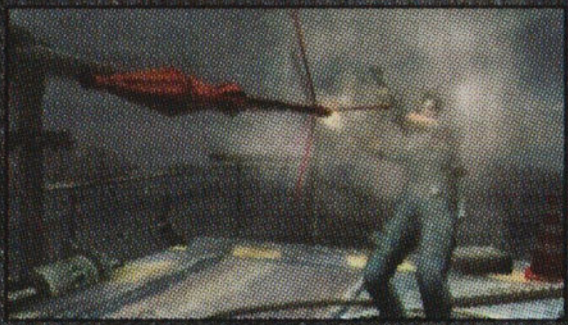
「エイダ、わかってるのか。これが何かを」

エイダは返事の代わりに笑みを見せると、鉄塔の端へと駆け出した。そのまま鉄塔から跳躍して待機させていたヘリに飛び乗ると、サンプルを持つ手を振りながら言った。

「悪いようにはしないわ。あなたも早くこの島から出た方が良さそうよ」

彼女は何かの装置を取り出すと、スイッチを押して見せる。警告のような電子音が聞こえる。

「押すなよ」



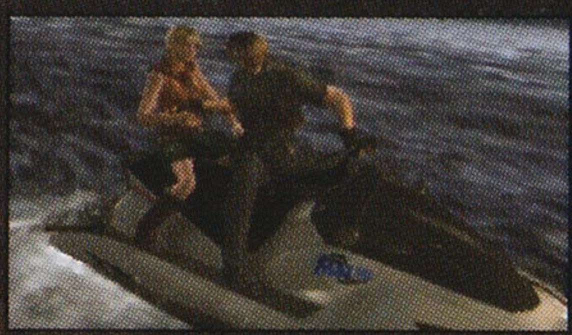
島のあちこちで、彼女の仕掛けた爆薬が起動し始めた。
「これ、あげるわ」
そう言ってレオンへ何かを投げ渡すと、彼女を乗せたヘリは水平線へ向けて遠ざかっていった。
エイダからの贈り物は、ジェットスキーのカギだった。キーホルダーに付いている熊の人形が揺れている。
「なけるぜ」

終章　すべての夜明け

「急ごう、島が吹っ飛ぶ」
鉄塔を下りたレオンはアシュリーの手をつかむと、有無を言わさず駆け出し、海へ通じる水路へ急ぐ。そこに止められていたジェットスキーに、エイダから受け取ったカギを差し込むと、エンジンが起動した。アシュリーを後部に乗せて、レオンは水路の中へ走り出した。水路を進めば、島を出て海へと出られるはずだ。

背後から聞こえる轟音が水路の中に響き渡る。島の随所で大規模な爆発が起きていた。
「レオン、水が……」
アシュリーが振り返りながら声を上げた。水路の後方から、津波が押し寄せてきたのだ。
「分かってる、しっかりつかまってろ」

目の前に出口の光が見える。レオンはジェットスキーのスロットルを限界まで開いて加速する。後方の津波に飲み込まれる直前に、ジェットスキーは広い海原へ飛び出した。津波のしぶきがレオンたちに降り注ぎ、青い空に虹を作り出していた。



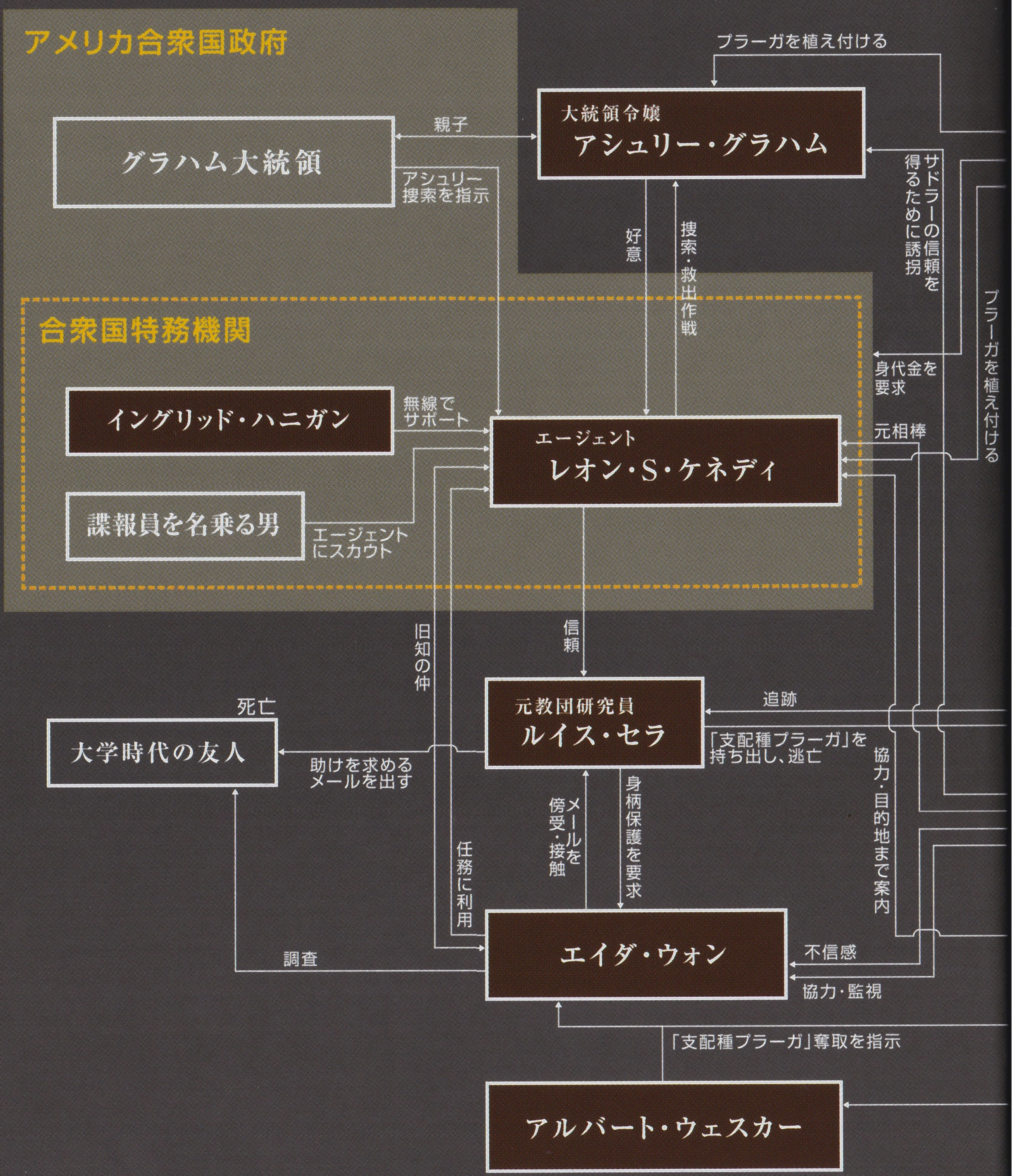
「さあ、帰ろう」
レオンはアシュリーを振り返って声をかけた。
「ええ。任務完了ね、レオン」
「まだ、君を本国へ送り届ける任務が残ってる」
レオンはジェットスキーのスロットルを開き、陸を目指して海面を疾走した。
「よかったら、その後の任務も頼もうかしら」
レオンは短く答えた。
「残念だ」
アシュリーは、この返事に沈み込むほどヤワではなかった。

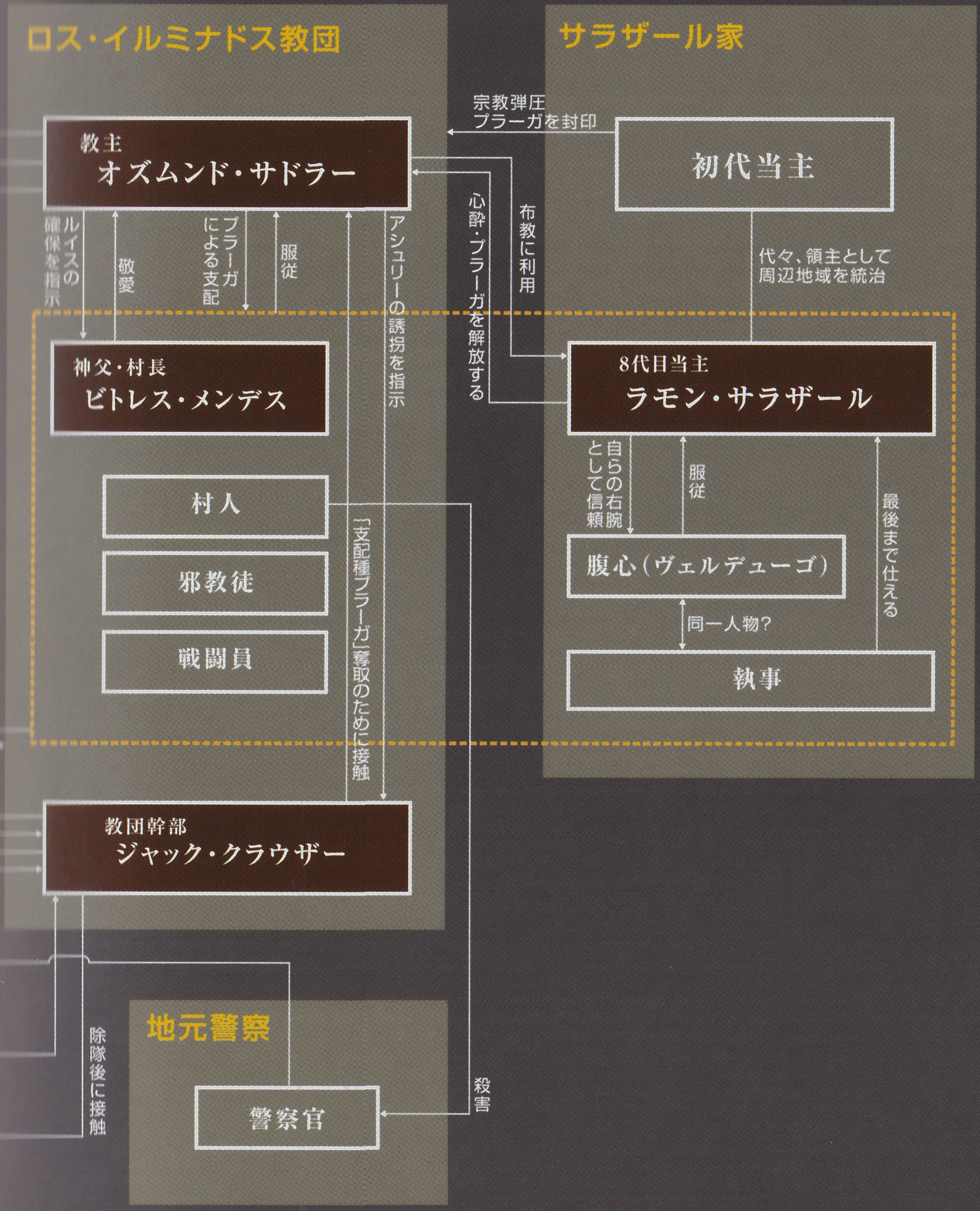
「ところで、あの女の人誰なの?」
なかなか鋭い指摘であり、レオンにとっても返事に困る質問だった。
「ねえ、教えてよ」
アシュリーは兄に甘える妹のようだった。その声に親しみを覚えながら、レオンは自分に納得させるようにつぶやいた。
「俺の心の中にある幻影かもな……」

Text by Toshiro Yoshida

Interrelation

biohazard 4 相関図




ロス・イルミナドス教団
サラザール家
宗教弾圧
プラーガを封印
教主
オズムンド・サドラー
初代当主
ルイスの確保を指示
敬愛
プラーガによる支配
服従
アシュリーの誘拐を指示
心酔・プラーガを解放する
布教に利用
代々、領主として周辺地域を統治
神父・村長
ビトレス・メンデス
8代目当主
ラモン・サラザール
自らの右腕として信頼
服従
最後まで仕える
村人
邪教徒
戦闘員
「支配種プラーガ」奪取のために接触
腹心（ヴェルデューゴ）
同一人物？
執事
教団幹部
ジャック・クラウザー
地元警察
除隊後に接触
警察官
殺害

Character Track

レオン・S・ケネディ

Leon S. Kennedy

元ラクーン市警の警察官で、現在は大統領直属のエージェント。ミドルネームは、スコット(Scott)。正義感が強く、冷静で多少のことでは動じず、なおかつ大胆不敵な面もある。新人警官だった頃と比べ、心身ともに格段に成長しており、度重なる苦境の中でもジョークを口にする余裕を見せる。

アメリカ合衆国大統領の令嬢アシュリー・グラハム誘拐事件が発生。レオンは捜査並びに救出の指令を受けて単身ヨーロッパへ飛び、目撃情報により、直ちに都会から離れたある村へ向かう。そこには、宗教団体ロス・イルミナドス教団の本部があった。

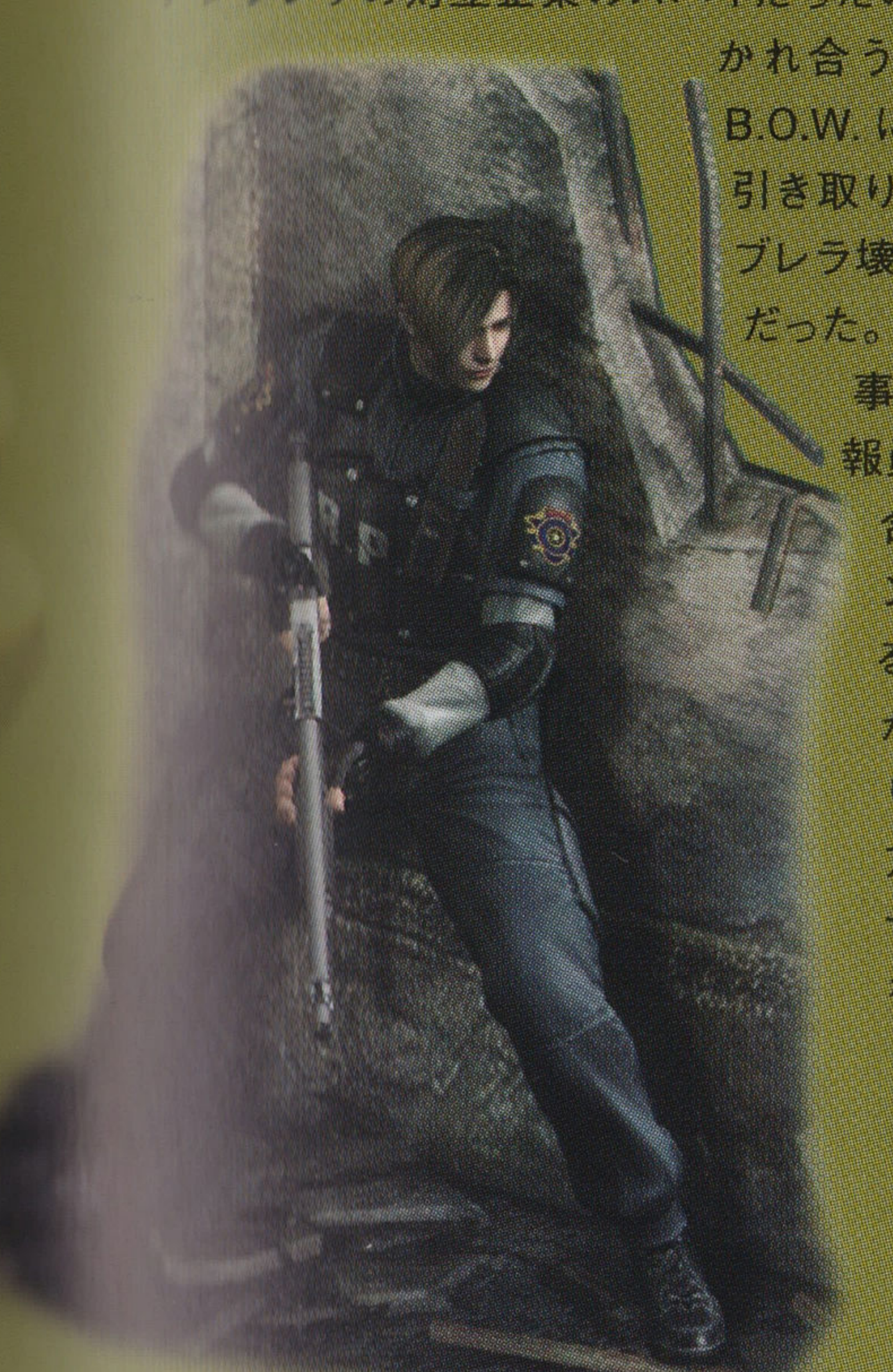
捜査が進むにつれて、単なる身代金目的の誘拐事件ではなかったことが判明。教祖オズムンド・サドラーの狙いは、宿主を意のままに操れる寄生体「プラーガ」を使って、各国の要人を操作し、世界の頂点に君臨することであったのだ。

敵側にはエイダ・ウォン、ジャック・クラウザーがいた。予想外の2人の出現に驚く間もなく、プラーガに寄生されて怪物と化した人間たちとの死闘が始まった。

PERSONAL DATA

age: 27 [bio4]
blood type: A
height: 180cm
weight: UNKNOWN
current unit:
U.S.AGENT

レオンは、1998年にラクーンシティで発生した大規模なウィルス流出事件の数少ない生還者。ラクーン市警察着任当日にバイオハザードに遭遇し、警察学校を卒業したばかりの彼にとって初めての現場がゾンビの巣窟となった街であった。市街地や警察署でクレア・レッドフィールド、エイダ・ウォンと出会い、協力して街からの脱出を試みる。エイダはアンブレラの対立企業のスパイだったのだが、次第に惹かれ合う。エイダは敵のB.O.W.に襲われて息を引き取り、レオンはアンブレラ壊滅を心に誓うのだった。



事件後、政府の諜報員を名乗る男から合衆国のエージェントにスカウトされる。ラクーンシティからの生還者であり、身体能力、判断力など並外れたサバイバル能力を備えた逸材と判断されたのであろう。とはいえ、警察学校で学んだ以上のことを求められるため、エージェントとして研鑽を積む日々が続く。その間、エイダが生存しており、ウェスカーの組織に入ったという情報を耳にする。

大統領直属のエージェントになったレオンは、特命により南米に派遣され、元アンブレラ研究員が接触したとされる麻薬王の捜査に着手。その際、アメリカ特殊作戦軍に属していたクラウザーがレオンのサポート役として付く。優秀な軍人と自負していたクラウザーだが、人間性も含めてレオンのほうが勝っていた。南米任務を終えたクラウザーは除隊し、その後事故に遭い命を落とす。

2004年、ヨーロッパの片田舎。やはりエイダは生きていた。さらに事故死したと思われていたジャック・クラウザーもレオンの前に姿を現す。エイダには支配種プラーガのサンプルとともに逃げられたものの、クラウザーを含めて教団を壊滅させ、アシュリーも無事に救出。任務は完了した。帰国後、レオンはガナードについて詳細に記した「レオン・レポート」を作成。同レポートは、彼の所属機関とBSAA以外には閲覧が許されない極秘資料である。

およそ1年後、アメリカのハーバードヴィル空港内で人々がゾンビ化する事件が発生、レオンが事態鎮圧の特別指揮官として派遣される。偶然居合わせたクレアとともにゾンビと戦って空港にいた人々を救出するが、直後に関連した事件が勃発。アンブレラに代わって医薬品業界で台頭してきた製薬会社ウィルファーマ社が絡んだ、そのバイオテロ騒動を解決に導いた。

ADA WONG

エイダ・ウォン
Ada Wong

蝶が舞うデザインの真紅のチャイナドレスを身にまとう東洋系の美女。一流の戦闘技術を持つ腕利きのスパイだが、その素性は一切不明で、エイダ・ウォンという名前すらも偽名である。
アルバート・ウェスカーの依頼により、ロス・イルミナドス教団が保有する支配種プラーガを持ち帰るため、現地に潜入した。

ロングのチャイナドレスという一見すると工作活動には向かないファッションだが、洋風にアレンジされた胴回りのデザインや、ホルスターをはめた脚を覗かせる深めのサイドスリットなど、戦闘におけるアクションを妨げないための工夫がされている。また、繊細な装飾の施されたフックショットやサングラス型の閃光弾など、彼女の用いるアイテムはデザイン性が高いのが特徴。いつでもお気に入りを身に着けていたいという彼女自身のスタイルと、女性らしさの表れだろう。

PERSONAL DATA

age: UNKNOWN
blood type: AB
height: UNKNOWN
weight: UNKNOWN

ウィルス流出事件当時、エイダはアンブレラと対立関係にあった企業に所属。ラクーンシティで諜報活動中に、同企業に身を置くウェスカーからアンブレラのウィリアム・バーキンが発見した「G-ウィルス」の回収指令が下る。警察署で出会ったレオンを利用してサンプルを入手するために身分を偽って行動をともにするが、危険な状況の連続は2人に密度の濃い時間を与えた。レオンが身を挺して彼女を守った時にエイダの恋愛感情が確信となり、そのわずか数時間後に自身も同じ行動をとる。B.O.W.「タイラント」に襲われたレオンを助けるために致命傷を負い、彼の腕の中で次第に息が弱くなっていった。

レオンは絶命したと思ったが、深手を負いながらもエイダは死んではいなかった。レオンを思い、負傷した自分が足手まといになるのを恐れての芝居であったのだろうか。市内のホテルに辿り着き、モニター越しにウェスカーに向けて「G」を見せる。それは、バーキンが自らの体にG-ウィルスを投与し、変異してGとなった体から採取した組織片。ウェスカーは直ちに救援ヘリを送り、エイダはラクーンシティから脱出した。

6年の時を経て再びレオンの前に姿を現した。敵対する立場だが、彼が窮地に立たされると援護し助言を与えるなど微妙な距離を保っている。サドラーとの決戦で窮地に陥ったレオンにロケットランチャーを渡したかと思えば、銃を突き付けて支配種プラーガのサンプルを奪取、その後にジェットスキーのカギを与えている。レオンとの関係を楽しんでいるかのように。
ウェスカーとは異なる組織が手配したヘリに乗り、サンプルとともに姿を消した。プラーガ回収の任務ですら「真の目的のための足がかり」と語る彼女の真意は依然謎に包まれたままである。

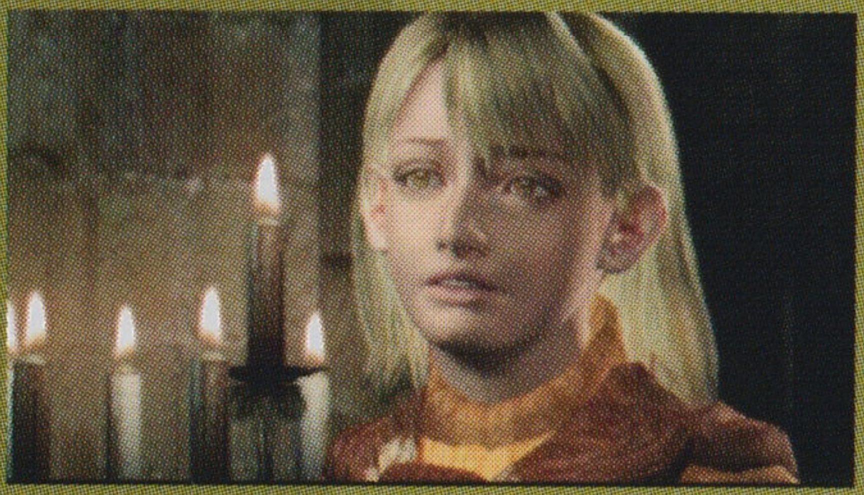
ASHLEY GRAHAM

アシュリー・グラハム
Ashley Graham

アメリカ合衆国大統領のひとり娘。お嬢様育ちゆえのワガママさも見られるが、物怖じしない明るい性格の持ち主。マサチューセッツ州の大学からの帰宅途中に、クラウザーに誘拐される。彼女が連れ去られた先は、宗教団体ロス・イルミナドスの支配下にあるヨーロッパのとある地域。寄生体「プラーガ」によって操られた人間たちが暮らす狂気の村だった。レオンによって発見され、ガナードらの襲撃に耐えながら脱出を目指す。

レオンに発見された時にはすでにプラーガの卵を植え付けられており、脱出を試みるうちに寄生体との同化の兆候が現れる。体内に巣食う言い知れぬ恐怖に一時は取り乱すこともあったが、落ち着きを取り戻した後は皮肉めいたジョークを飛ばす余裕を見せ、時には突破口を見つけ出してレオンをサポートする。過酷な状況の中、そんな彼女の気丈な態度はレオンを勇気付けたことだろう。

無事に脱出した途端、安心したためか、レオンに興味津々の態度を見せる。



PERSONAL DATA

age: 20
blood type: UNKNOWN
height: UNKNOWN
weight: UNKNOWN

表情や言動に幼い印象を受けるがスタイルは抜群で、廃屋で出会ったルイス・セラに冷やかしを受けるほど。トップスは、そのボディラインが目立つノースリーブのオレンジ色のニット。袖に模様編みが施された茶色のカーディガンで寒さ対策も万全。裾が斜めにカットされたチェックのミニスカートは緑色が基調。肩のカーディガン、ベルト、足元のブーツカバーとポイントにバランスよく茶色を配し、さらに部分使いでバックルにシルバーを取り入れているため落ち着いた印象を受ける。

一転して、白のトップスとボトムス。トップスは露出がかなり大胆だが、光沢のある素材と胸元のリボンで上品にまとめ、ベルトの鈍い赤色がアクセント。ブレスレットも同色と白のコンビ。

JACK KRAUSER

ジャック・クラウザー

Jack Krauser

ウェスカーの指示によりヨーロッパへ渡り、支配種プラーガのサンプルを入手するためにロス・イルミナドス教団に潜入。教団の中枢に接近する目的で、合衆国大統領令嬢アシュリー・グラハムの誘拐を敢行する。首尾よく幹部として迎えられるが、プラーガのサンプルにだけは近づくことが許されず、不本意ながらもエイダの協力を受けることとなる。アシュリーの救出に来たレオンと対決することになるが、2年前の南米では命を預け合うパートナーであった。

PERSONAL DATA

age: UNKNOWN
blood type: UNKNOWN
height: UNKNOWN
weight: UNKNOWN

南米に赴いた頃はアメリカ陸軍に所属。大統領直属のエージェントとして活躍するレオンに対して嫉妬にも似た強いライバル心があり、相反する道を歩むことになるとは薄々感じていた。レオンと組んだ任務を最後に軍を去る。除隊後まもなく、事故死したとの情報もあったが遺体確認にはいたらなかった。

南米でB.O.W.の持つ人知を超えた力に触れ、彼の中でより強大な力を求める心が芽生えていた。死亡を装って消息を絶ってから、レオンから聞いた事件の関連資料にその名が記されていたウェスカーと接触し、彼の組織で活動を開始。南米での戦闘中に左腕を負傷したが、屈強な肉体を持ち、ナイフを用いた戦闘を得意とする。

教団内部で情報を集めるうちにプラーガの力に魅せられたクラウザーは、自らの体に支配種プラーガを受け入れ、超人的な身体能力を手に入れる。

再会を果たしたヨーロッパで、レオンに決着をつけるべく戦いに挑むが敗れ去る。

LUIS SERA

ルイス・セラ

Luis Sera

廃屋でレオンと出会ったラテン系の男。本人はマドリッドの警察官だったと語るが、その正体はロス・イルミナドス教団の元研究員である。好奇心のままに寄生体の研究を続け、邪悪な計画に加担してしまったことの罪悪感から教団を裏切り、支配種プラーガのサンプルを持ち出し逃亡を図る。もともとは教団が支配する村の住人だった彼は、土地勘を武器に教団の追っ手から逃れていたが、やがて捕まり村外れの廃屋に監禁されていた。ひょうひょうとしていてレオンの質問ものらりくらりとかわし、決して本心を見せようとしない。話しぶりも軽薄で人を小馬鹿にしたような態度を取るが、これらはすべて強い警戒心の裏返しである。

優秀な研究員だった彼は寄生体についてのあらゆる知識を有しており、教団から植え付けられた寄生体の卵を自分の力で取り除くことに成功している。教団からの逃亡を決断した当初は自身の身の保全を第一に考えていたようだが、レオンとアシュリーの体内にプラーガの幼体が宿っているのを知ると、その成長を抑制する薬を入手するために危険を承知で古城へと戻る。彼を動かしたものは、レオンたちとの出会いによって取り戻した真の良心だったに違いない。

PERSONAL DATA

age: 28
blood type: UNKNOWN
height: UNKNOWN
weight: UNKNOWN

BITORES MENDEZ

ビトレス・メンデス

Bitores Mendez

レオンが訪れた村の村長。長いアゴ髭をたくわえ、トレンチコートに身を包む大男。ロス・イルミナドス教団の神父でもあり、敬愛するオズムンド・サドラーの手足となって働く忠実なる部下である。一般のガナードとは異なる「支配種」と呼ばれる寄生体を宿しており、常人離れした怪力を得ながらも完全に自我を保っている。

レオンが村に調査に訪れるという情報をつかんだメンデスは、村人にそれを通達し村周辺の警戒態勢を強めていた。レオンと遭遇した際、寄生体の卵を植え付けられていることを知ると一度は見逃し、サドラーの指示通りに行動を妨害しながら体内の寄生体が成体になるのを待っていた。しかし、度重なる包囲網をかいくぐるレオンの生存能力に危機感を覚え、サドラーの計画を守るためにレオンを葬り去ろうとする。彼の左目は義眼であり、サラザール城正門の鍵にもなっている。これは彼自身が壁となることで外部から教団を守ってきた証でもある。

PERSONAL DATA

age: UNKNOWN
blood type: UNKNOWN
height: UNKNOWN
weight: UNKNOWN

オズムンド・サドラー

Osmund Saddler

ヨーロッパのとある地方に古くからある宗教団体、ロス・イルミナドス教団の現最高指導者。地域の現領主サラザールの協力を得て、いにしえより教団が用いていた寄生体「プラーガ」を用いた布教法を復活させる。プラーガには宿主をコントロールする能力を持つ従属種と、それらを統率する支配種が存在し、これらの性質を利用してサドラーは地域において絶対的な権力を手に入れた。しかし、彼の欲望はこれにとどまらず、寄生体を利用した生体兵器の開発実験を開始。プラーガの力で世界をも支配しようと目論み、その足掛かりとしてアメリカ合衆国大統領の娘アシュリーの誘拐を計画。まずは大国を中枢から操り、やがて全世界に君臨する野望を抱いている。

教団最高権力者の証である紫色のローブに身を包み、プラーガが絡んだ杖を持っている。時代錯誤とも感じる風体だが、ローブの下には鋭い爪を備えた触手を隠し持ち、背く者を退ける。

PERSONAL DATA

age: UNKNOWN
blood type: UNKNOWN
height: UNKNOWN
weight: UNKNOWN

WEAPONS MERCHANT

武器商人

Weapons Merchant

武器を行商する黒いコート姿の男。青白い炎を灯したたいまつが彼の店の看板で、気の向くままに移動しては商売をしているようだ。大きなリュックサックとコートの内側にあらゆる武器がギッシリと格納されている。その風体から彼がガナードであることは間違いなさそうだが、不思議とよそ者に敵意を見せることはなく、お金さえ払えば誰とでも取引する。入手経路は定かでないが、品揃えの充実ぶりはレオンも唸るほど。「ガッツで買うんだよ」「そいつを選ぶとはしぶいねー」など、ビジネストークも上手。

PERSONAL DATA

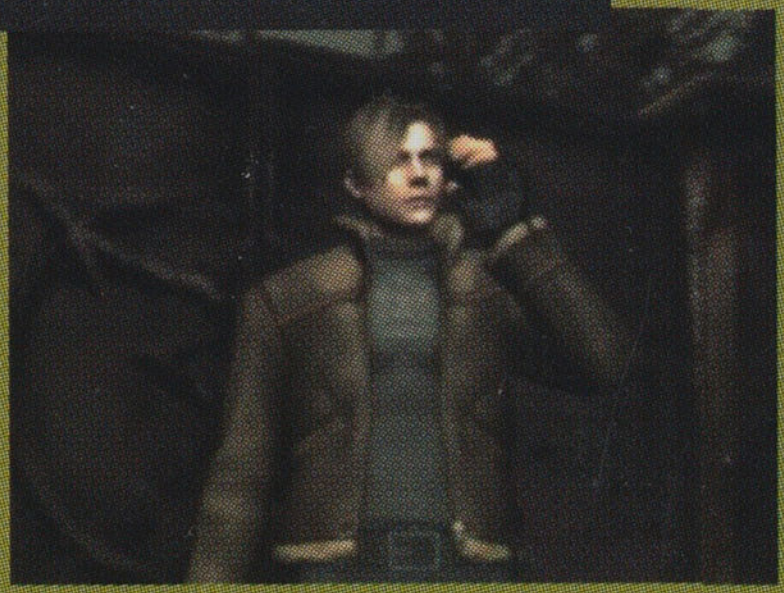
age: UNKNOWN
blood type: UNKNOWN
height: UNKNOWN
weight: UNKNOWN

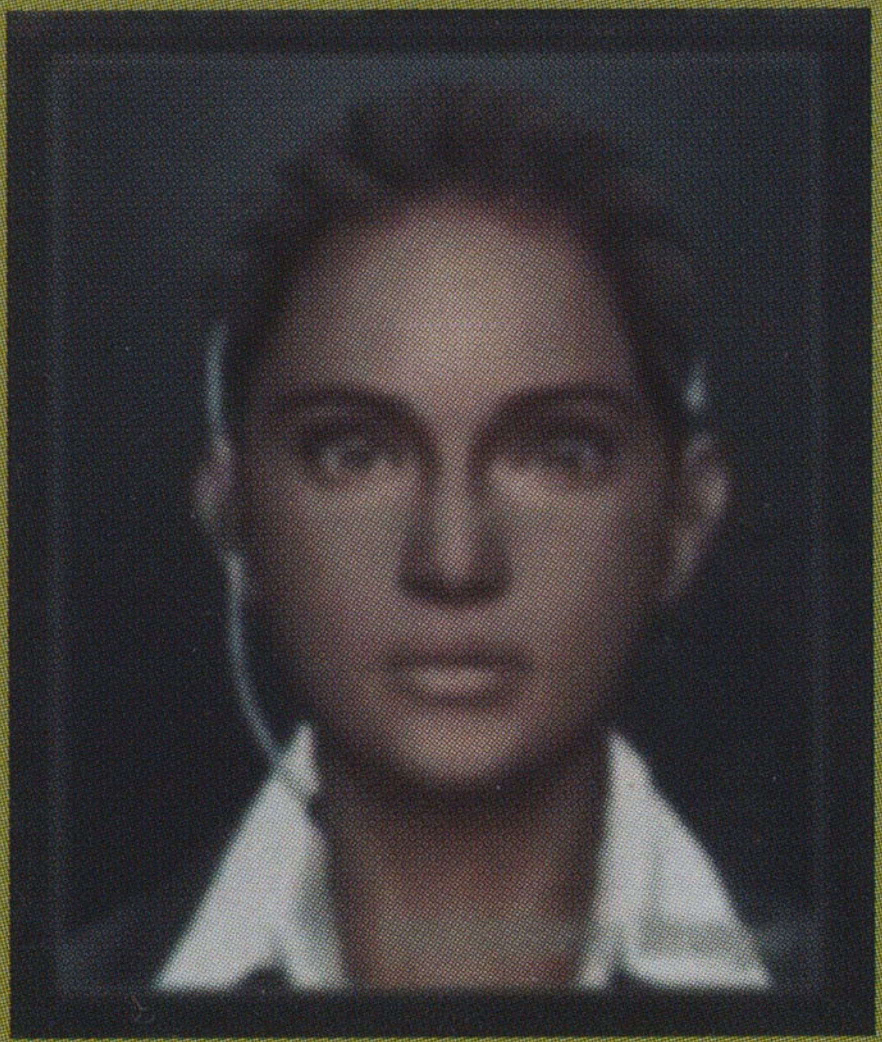
INGRID HUNNIGAN

イングリッド・ハニガン

Ingrid Hunnigan

合衆国特務機関に所属し、特殊任務に就くエージェントのサポートを担当。レオンと大統領の関係を明らかにしないため、彼女がホワイトハウスからの指示を中継している。アシュリー・グラハム救出任務のためヨーロッパへ飛んだレオンを、本国から無線通信で援護。該当資料や情報を迅速かつ的確に伝達する、聡明で冷静な女性。ヨーロッパの事件から約1年後には、ハーバードヴィル空港から議員やクレアを救出したレオンに関連情報を伝えている。





PERSONAL DATA

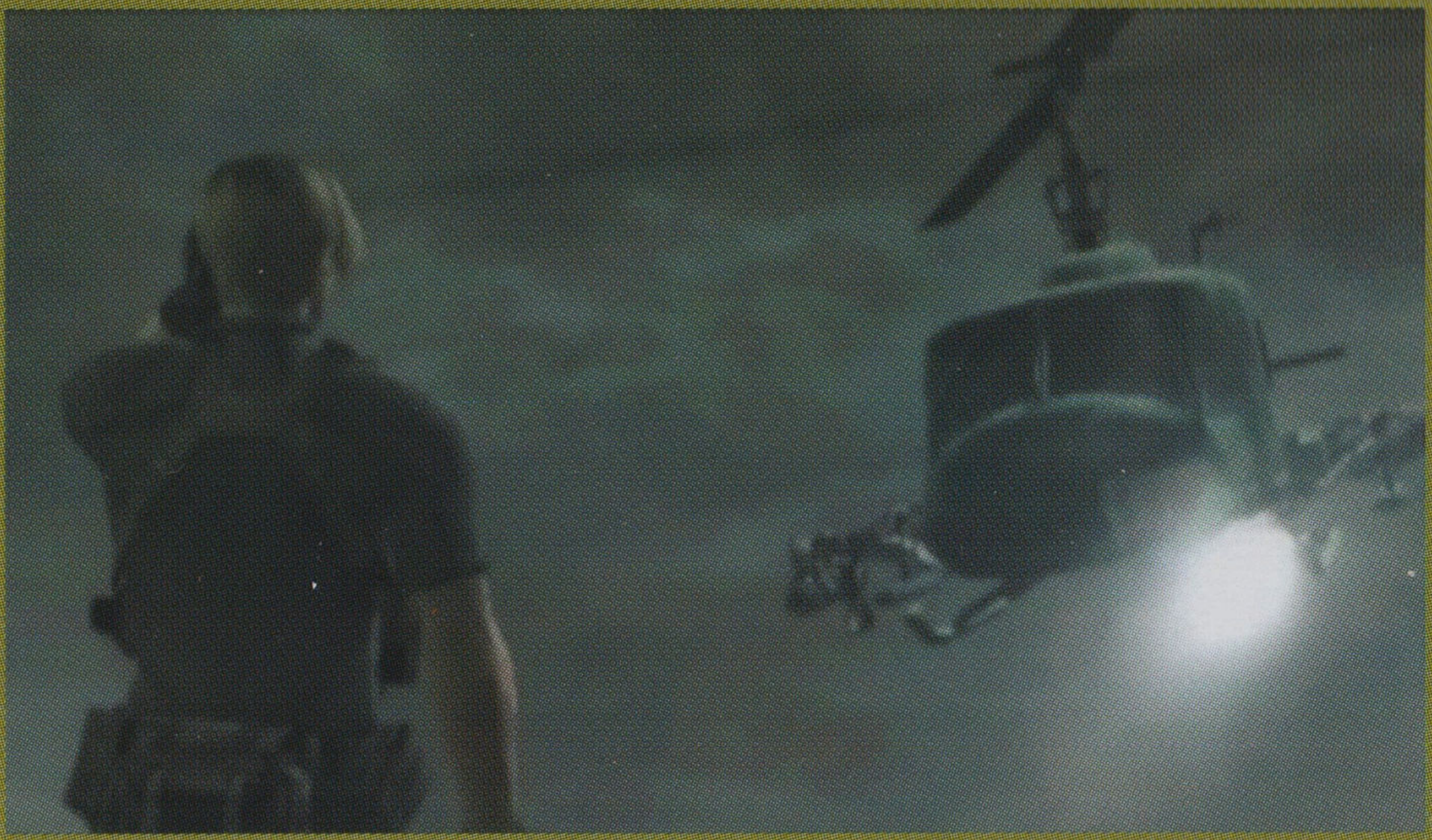
age: 25 [DEGENERATION]
blood type: UNKNOWN
height: UNKNOWN
weight: UNKNOWN

MIKE

マイク
Mike

アメリカ政府から派遣された軍用ヘリのパイロット。レオンとはアシュリーが連れ去られた孤島で合流し、戦闘員が待ち受ける砦へと向かう彼を空中から援護する。

マイクの操縦するヘリは、バルカン砲やミサイルを搭載した重装備のもので、窮地に現れた心強い援軍にレオンも奮起。力を合わせて襲い来る軍勢を見事に退けた。「帰ったら一杯やるか」とレオンを誘うマイクだったが、サドラーの手下によってヘリが撃墜され、帰らぬ人となった。



PERSONAL DATA
age: UNKNOWN
blood type: UNKNOWN
height: UNKNOWN
weight: UNKNOWN

HUNK

ハンク
Hunk

元アンブレラ特殊工作部隊員。幹部直属のエリート部隊に所属し、ラクーンシティで起こった惨劇を知るひとり。精鋭揃いの部隊が壊滅するほどの状況に置かれても、彼のみが生還することから「死神」の異名を持つ。優れた戦闘技術はアルフレッド・アシュフォードが司令官を務めるロックフォート島の軍事訓練で培われた。

ウィルス流出事故が発生したラクーンシティへは、アンブレラのフランス支部施設所長の極秘指令で潜入。G-ウィルスにより異形と化した研究者バーキンの襲撃を振り切り、G-ウィルス奪取の任務を成功させた。アンブレラ崩壊後の彼の動向については一切不明である。

PERSONAL DATA
age: UNKNOWN
blood type: UNKNOWN
height: UNKNOWN
weight: UNKNOWN

©CAPCOM CO., LTD. 2011 ALL RIGHTS RESERVED

©CAPCOM CO., LTD. 2011 ALL RIGHTS RESERVED